

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 644 集

こ な り 2
小成Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路事業関連遺跡発掘調査

2015

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
(公財)岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 644 集

小成Ⅱ遺跡発掘調査報告書

2015

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
(公財)岩手県文化振興事業団

小成Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路事業関連遺跡発掘調査





小成Ⅱ道跡透景（上が東）



調査区全景（上が北）



SI14 全景 (南東から)



磨製石斧

序

本県には、縄文時代をはじめとする数多くの埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要となりますが、それらの開発にあたっては環境と調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来岩手県教育委員会の指導のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路事業に関連して、平成25年度に発掘調査を行った小成Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものです。

今回の発掘調査では、縄文時代中期後半に営まれた集落跡が明らかとなりました。様々な形態の炉を伴う多数の竪穴住居跡が検出されたことをはじめ、多くの縄文土器や石器などが出土しています。これらの分析結果から、この地が小成川流域における拠点集落として縄文時代の人達に利用されたことが判明いたしました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、岩泉町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成27年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野 洋樹

例 言

- 1 本報告書は、岩手県下閉伊郡岩泉町小本字小成4-36ほかに所在する小成Ⅱ遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 今回の調査は、三陸沿岸道路事業に伴う緊急発掘調査であり、岩手県教育委員会生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所の協議を経て、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡登録台帳番号と遺跡略号は、以下の通りである。
小成Ⅱ遺跡 遺跡番号…LG 53-0313 遺跡略号…KNⅡ-13
- 4 発掘調査期間・調査面積・調査担当者は、以下のとおりである。
調査期間 平成25年7月1日～10月11日
調査面積 1,900㎡
調査担当者 藤本玲子・村上 拓・高橋麻衣子・佐々木隆英・森 裕樹
- 5 室内整理期間・整理担当者は以下の通りである。
室内整理期間 平成25年11月1日～平成26年3月31日
室内整理担当者 藤本玲子・佐々木隆英
- 6 本報告書の第Ⅰ章は、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所に依頼している。
Ⅱ～Ⅴ章は藤本が執筆し、Ⅳ章とⅤ章の縄文土器については、当センター高木晃主任文化財専門員が監修を行った。全体の編集は藤本が行った。
- 7 鑑定各種・分析は次の外部機関に委託した。
石質鑑定：荏岡岩研究会
黒曜石産地同定：(株)バリノ・サーヴェイ
¹⁴C年代測定：(株)加速器分析研究所
石器実測：(株)ラング
- 8 基準杭設定は(株)鈴木測量設計に委託した。
- 9 野外調査及び本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った(順不同、敬称略)。
田鎮康之・宇田川浩一・北原 治
- 10 野外調査では岩泉町、宮古市田老地区の方々にご協力いただいた。
- 11 本遺跡の調査成果は、当センター主催の現地説明会などで公表されているが、本報告書の内容はそのいずれよりも優先される。
- 12 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

- 1 本報告書収載の遺構実測図に付した方位は、国土地理院座標第X系(世界測地系)による座標北を示す。
- 2 土層注記は基本層序にローマ数字、遺構埋土層位にはアラビア数字を用いる。
- 3 土層注記は次の順に表現し、粘性・しまりについては以下のようにアラビア数字5段階で表記することにする。

例	土色	土質	粘性	しまり	混入物
	1.10YR1/2黒	砂質シルト	1	3	φ1~5mmの炭化物10%
	2.10YR1/1.7黒	砂質シルト	5	2	φ1~20mmの黄褐色土50%

粘性		しまり	
弱	1	疎	1
やや弱	2	やや疎	2
中	3	中	3
やや強	4	やや密	4
強	5	密	5

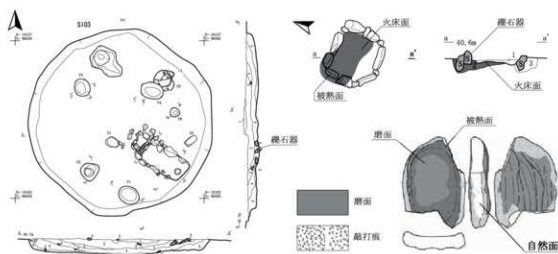
- 4 表中の()は法量の残存値を示す。
- 5 遺構名に用いた略号は以下のとおりである。

SI……堅穴住居跡 SN……焼土遺構 P……柱穴
SD……溝跡 SK……土坑跡

- 6 遺構図中の遺物表記は以下の通りである。

S……礫・石器 (礫には自然石も含まれる) RP……土器

- 7 遺構図の断面にかかる礫石器にはスクリーントーンを使用し、平面図には用いない。平面図の礫においては被熱を受けたもののみスクリーントーンを使用する。その際、断面図のスクリーントーンと区別するため、火床面および焼土範囲に用いるスクリーントーンと同じ濃さの物を使用する。挿図中に使用しているスクリーントーン、遺物実測の表現は以下の通りである。



目 次

I	調査に至る経過	1
II	立地と環境	1
	1 遺跡の地理的環境	1
	2 歴史的環境	1
III	野外調査・室内整理方法	7
	1 野外調査	
	(1) グリッド設定	7
	(2) 調査の手順	7
	(3) 調査過程	10
	2 室内整理	
	(1) 遺構記録の整理	11
	(2) 遺物の整理	11
	(3) 室内整理過程	11
	3 基本層序	13
IV	検出遺構と遺物	14
	1 概 要	14
	2 遺 構	
	(1) 竪穴住居跡	14
	(2) 溝 跡	31
	(3) 焼土遺構	31
	(4) 土坑跡	31
	3 出土遺物	58
	(1) 縄文土器	58
	(2) 土製品	62
	(3) 石器	62
V	自然科学分析	100
	1 黒曜石の産地同定	100
	2 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS測定)	104
VI	総 括	107
	1 縄文土器	107
	2 石器	108
	3 遺 構	109

4 三陸沿岸北部の縄文中期後葉集落について	110
報告書抄録	201

図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第36図 出土遺物 縄文土器(4)	68
第2図 地形分類図	3	第37図 出土遺物 縄文土器(5)	69
第3図 地形区分図	4	第38図 出土遺物 縄文土器(6)	70
第4図 周辺遺跡分布図	5	第39図 出土遺物 縄文土器(7)	71
第5図 周辺地形・調査範囲	8	第40図 出土遺物 縄文土器(8)	72
第6図 遺構配置図	9	第41図 出土遺物 縄文土器(9)	73
第7図 基本層序	12	第42図 出土遺物 縄文土器(10)	74
第8図 SI01・02・32竪穴住居跡	32	第43図 出土遺物 縄文土器(11)	75
第9図 SI03竪穴住居跡	33	第44図 出土遺物 縄文土器(12)	76
第10図 SI04竪穴住居跡	34	第45図 出土遺物 縄文土器(13)	77
第11図 SI05竪穴住居跡	35	第46図 出土遺物 縄文土器(14)	78
第12図 SI06・19竪穴住居跡	36	第47図 出土遺物 縄文土器(15)	79
第13図 SI07竪穴住居跡	37	第48図 出土遺物 縄文土器(16)	80
第14図 SI08竪穴住居跡	38	第49図 出土遺物 縄文土器(17)	81
第15図 SI09・10竪穴住居跡	39	第50図 出土遺物 縄文土器(18)・土製品	82
第16図 SI11竪穴住居跡	40	第51図 出土遺物 剥片石器・敲磨器類(1)	83
第17図 SI12・13竪穴住居跡	41	第52図 出土遺物 敲磨器類(2)	84
第18図 SI14竪穴住居跡(1)	42	第53図 出土遺物 敲磨器類(3)	85
第19図 SI14竪穴住居跡(2)	43	第54図 出土遺物 敲磨器類(4)	86
第20図 SI15・16竪穴住居跡(1)	44	第55図 出土遺物 敲磨器類(5)・磨製石斧(1)	87
第21図 SI16竪穴住居跡(2)・SI17竪穴住居跡	45	第56図 出土遺物 磨製石斧(2)・垂飾・石皿(1)	88
第22図 SI18・19竪穴住居跡	46	第57図 出土遺物 石皿(2)	89
第23図 SI20竪穴住居跡	47	第58図 竪穴住居集成図1(石 囲 炉)	110
第24図 SI21・22竪穴住居跡	48	第59図 竪穴住居集成図2(複 式 炉)	111
第25図 SI23・24竪穴住居跡	49	第60図 竪穴住居集成図3(地 床 炉)	112
第26図 SI25・26竪穴住居跡	50	第61図 竪穴住居集成図4(土器埋設)	112
第27図 SI27・28竪穴住居跡(1)	51	第62図 遺構内出土遺物集成1	113
第28図 SI28(2)・29・30竪穴住居跡	52	第63図 遺構内出土遺物集成2	114
第29図 SI31・32竪穴住居跡	53	第64図 遺構内出土遺物集成3	115
第30図 SI33・34・35竪穴住居跡	54	第65図 遺構内出土遺物集成4	116
第31図 SI36・37・38竪穴住居跡	55	第66図 遺構内出土遺物集成5	117
第32図 SK04・05土坑・SD01溝跡・SN01焼土	56	第67図 遺構内出土遺物集成6	118
第33図 出土遺物 縄文土器(1)	65	第68図 遺構内出土遺物集成7	119
第34図 出土遺物 縄文土器(2)	66	第69図 時期別変遷図	121
第35図 出土遺物 縄文土器(3)	67	第70図 三陸沿岸北部遺跡図	122

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	4	第3表 土器観察表(1)	90
第2表 遺構観察表	57	第4表 土器観察表(2)	91

第 5 表	土器觀察表 (3)	92
第 6 表	土器觀察表 (4)	93
第 7 表	土器觀察表 (5)	94
第 8 表	土器觀察表 (6)	95
第 9 表	土器觀察表 (7)	96

第 10 表	土器觀察表 (8)	97
第 11 表	石器計測值一覽表	98
第 12 表	出土遺構別石器數量	99
第 13 表	三陸沿岸北部遺跡表	122

写真図版目次

写真図版 1	調査前風景・基本層序	127
写真図版 2	SI01 竪穴住居跡	128
写真図版 3	SI02・32 竪穴住居跡	129
写真図版 4	SI03 竪穴住居跡 (1)	130
写真図版 5	SI03 竪穴住居跡 (2)	131
写真図版 6	SI04 竪穴住居跡	132
写真図版 7	SI05 竪穴住居跡 (1)	133
写真図版 8	SI05 竪穴住居跡 (2)	134
写真図版 9	SI06 竪穴住居跡 (1)	135
写真図版 10	SI06 竪穴住居跡 (2)	136
写真図版 11	SI07 竪穴住居跡	137
写真図版 12	SI08 竪穴住居跡 (1)	138
写真図版 13	SI08 竪穴住居跡 (2)	139
写真図版 14	SI09 竪穴住居跡	140
写真図版 15	SI10 竪穴住居跡	141
写真図版 16	SI11 竪穴住居跡 (1)	142
写真図版 17	SI11 竪穴住居跡 (2)	143
写真図版 18	SI12 竪穴住居跡	144
写真図版 19	SI13 竪穴住居跡	145
写真図版 20	SI14 竪穴住居跡 (1)	146
写真図版 21	SI14 竪穴住居跡 (2)	147
写真図版 22	SI14 (3)・15 竪穴住居跡	148
写真図版 23	SI16 竪穴住居跡 (1)	149
写真図版 24	SI16 竪穴住居跡 (2)	150
写真図版 25	SI17 竪穴住居跡	151
写真図版 26	SI18 竪穴住居跡	152
写真図版 27	SI19 竪穴住居跡	153
写真図版 28	SI20 竪穴住居跡	154
写真図版 29	SI21 竪穴住居跡	155
写真図版 30	SI22 竪穴住居跡	156
写真図版 31	SI23 竪穴住居跡 (1)	157
写真図版 32	SI23 竪穴住居跡 (2)	158
写真図版 33	SI24 竪穴住居跡	159
写真図版 34	SI25 竪穴住居跡	160
写真図版 35	SI26 竪穴住居跡	161
写真図版 36	SI27 竪穴住居跡	162
写真図版 37	SI28 竪穴住居跡 (1)	163

写真図版 38	SI28 竪穴住居跡 (2)	164
写真図版 39	SI29・30 竪穴住居跡	165
写真図版 40	SI31 竪穴住居跡	166
写真図版 41	SI33 竪穴住居跡	167
写真図版 42	SI34 竪穴住居跡	168
写真図版 43	SI35 竪穴住居跡	169
写真図版 44	SI36 竪穴住居跡	170
写真図版 45	SI37 竪穴住居跡	171
写真図版 46	SI38 竪穴住居跡	172
写真図版 47	SD01清跡・SN01焼土跡・SK04・05土坑跡	173
写真図版 48	縄文土器 (1)	174
写真図版 49	縄文土器 (2)	175
写真図版 50	縄文土器 (3)	176
写真図版 51	縄文土器 (4)	177
写真図版 52	縄文土器 (5)	178
写真図版 53	縄文土器 (6)	179
写真図版 54	縄文土器 (7)	180
写真図版 55	縄文土器 (8)	181
写真図版 56	縄文土器 (9)	182
写真図版 57	縄文土器 (10)	183
写真図版 58	縄文土器 (11)	184
写真図版 59	縄文土器 (12)	185
写真図版 60	縄文土器 (13)	186
写真図版 61	縄文土器 (14)	187
写真図版 62	縄文土器 (15)	188
写真図版 63	縄文土器 (16)	189
写真図版 64	縄文土器 (17)	190
写真図版 65	縄文土器 (18)	191
写真図版 66	縄文土器 (19)	192
写真図版 67	縄文土器 (20)	193
写真図版 68	石器 (1)	194
写真図版 69	石器 (2)	195
写真図版 70	石器 (3)	196
写真図版 71	石器 (4)	197
写真図版 72	石器 (5)	198
写真図版 73	石器 (6)	199
写真図版 74	石器 (7)	200

I 調査に至る経過

小成Ⅱ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（田老～岩泉）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月2日付国東整陸2調第701号により、三陸国道事務所から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年11月5日～9日にわたり試掘調査を行い、平成24年11月12日付け教生第1541号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成25年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

II 立地と環境

1 遺跡の地理的環境

小成Ⅱ遺跡は岩手県下閉伊郡岩泉町小本字小成4-36他に所在する。三陸鉄道北リアス線小本駅から南約3kmの国道45号線沿いに位置する。丘陵部を縫い、小成川の河口からは約2km程遡った場所である。東は太平洋に面し、3方が北上山地の山々に囲まれている。遺跡は岩泉町小本地区の最南端に位置し、調査区西側は小成川を挟んで宮古市田老地区と隣接する。

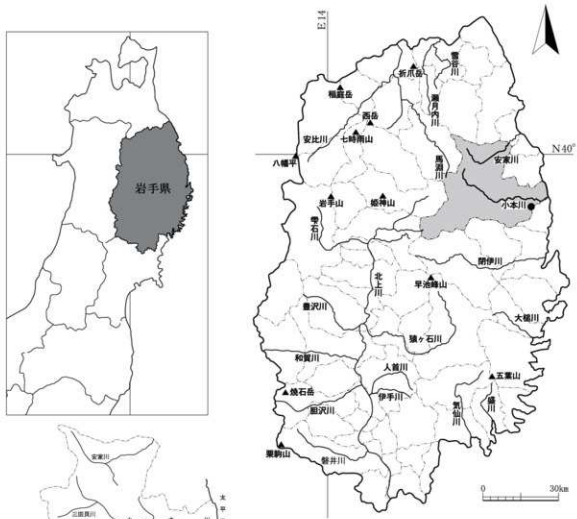
岩泉町は東西51km、南北41km、992.92km²の面積を誇り、これは本州一である。しかし、周囲に標高1,000～1,300mの山地が連なり、大半を山林が占める。御大堂山等を水源とする小本川が町の中央を横断し太平洋に流れでる。宇雲羅山内部には鍾乳洞である龍泉洞が存在する。

遺跡が所在する小本地区は町内6地区のうち、最も面積が小さく、北は同郡内田野畑村、南は宮古市田老地区に面し、西側は岩手郡葛巻町、盛岡市玉山地区に接する。調査区は北側に広がる小本丘陵の末端から小成川に面した低地、谷底平野及び氾濫平野の緩斜面上に立地する。標高は40m前後である。調査区内北半には十和田中掬テフラの二次堆積層が広範囲に分布し、上面が縄文中期の遺構検出面となる。調査区南側では黒色土の堆積が厚く礫層が確認された。調査前は水田として利用されており、開田による削平が著しい。

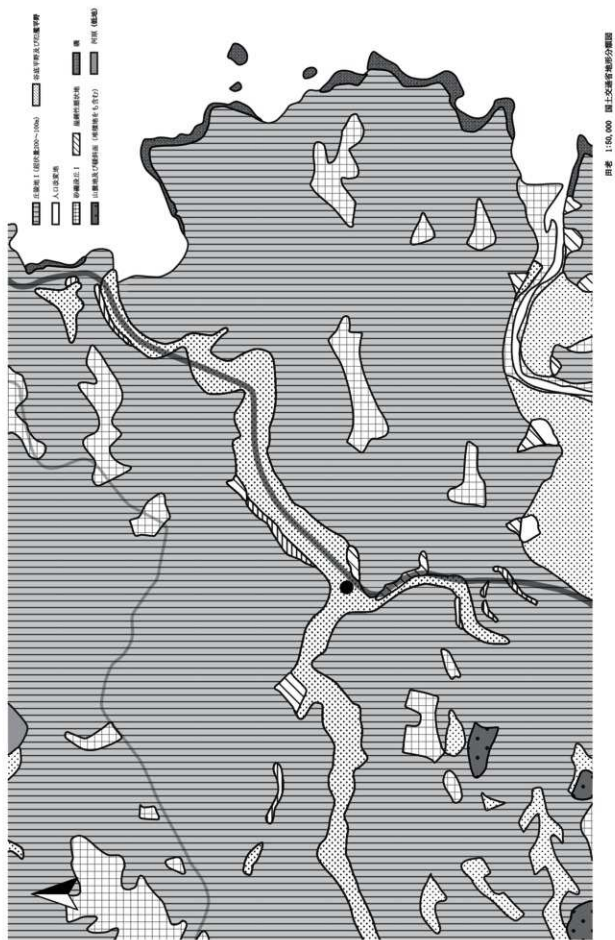
2 歴史的環境

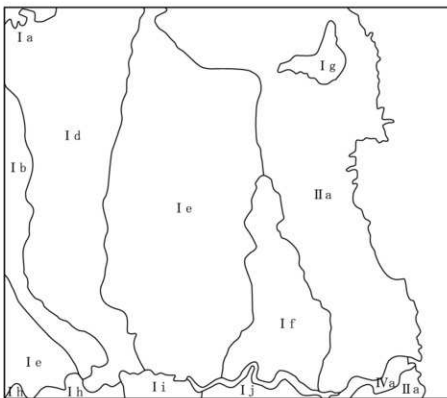
岩泉町は岩手県北東部に位置する。現在の岩泉町は昭和31年、旧岩泉町、大川村、小本村、安家村、有芸村、昭和32年に小川村が合併して誕生した町である。

岩泉町内には、約600か所の遺跡が確認されており、うち小本地区は101か所遺跡が存在する。町内全域では、龍泉洞新洞遺跡といった後期旧石器時代末～縄文時代草創期をはじめとして、森の越遺



第1図 遺跡位置図

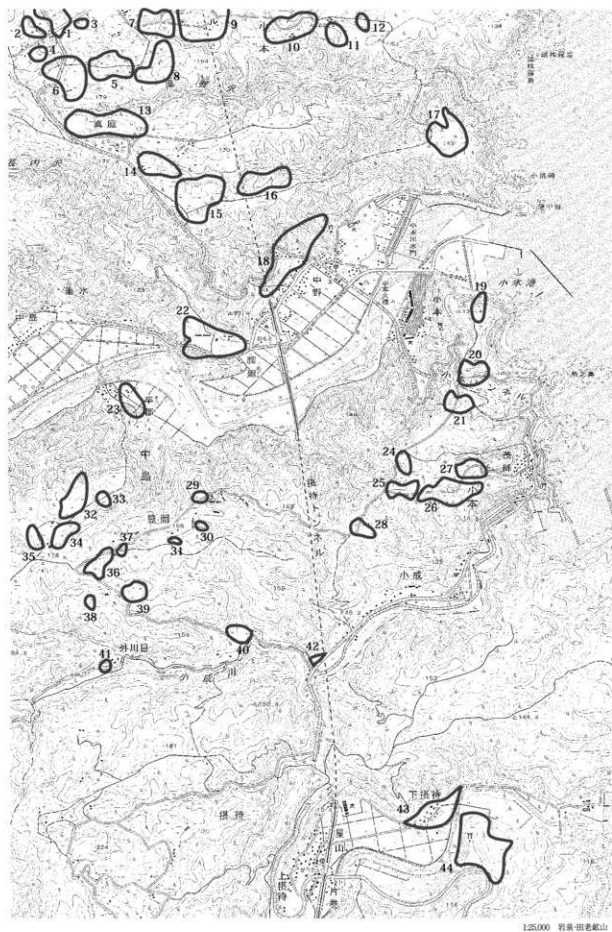




第3図 地形区分図

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	清水野Ⅲ	散布地	縄文(中～後期)	23	平部	散布地	縄文
2	清水野Ⅱ	散布地	弥生	24	茂野大平Ⅱ	集落跡	縄文(前～後期)、弥生
3	清水野Ⅰ	散布地	縄文(中期)	25	茂野大平Ⅰ	集落跡	縄文
4	清水野Ⅱ	散布地	縄文(中期)	26	茂野上野	集落跡	縄文(前～中期、晩期)、奈良、平安
5	古松林Ⅱ	集落跡	縄文(前～後期)	27	茂野貝塚	貝塚	縄文(晩期)
6	古松林Ⅲ	散布地	縄文	28	小成	散布地	縄文(前期)、弥生、奈良、平安
7	清水野Ⅴ	散布地	縄文	29	豊田Ⅰ	散布地	縄文(前期)、弥生
8	小松林Ⅰ	集落跡	縄文(前～後期)	30	豊田Ⅱ	散布地	縄文(前期)
9	清水野Ⅳ	集落跡	縄文(前～後期)	31	豊田Ⅲ	散布地	縄文(中～後期)
10	松坂Ⅲ	集落跡	縄文(中～後期)	32	豊田Ⅳ	散布地	縄文(前期)
11	松坂Ⅱ	散布地	縄文	33	豊田Ⅴ	散布地	散布地
12	松坂Ⅰ	散布地	縄文	34	豊田Ⅵ	散布地	縄文(前期)弥生、奈良、平安
13	眞原	集落跡	縄文(後期)、弥生	35	豊田Ⅶ	散布地	縄文(前期)
14	真知平	集落跡	縄文(前期)	36	豊田Ⅷ	集落跡	縄文(前～後期)、弥生、奈良、平安
15	崎Ⅰ	集落跡	縄文(前～中期)、弥生	37	豊田Ⅷ	散布地	縄文(前期)
16	崎Ⅱ	散布地	縄文	38	豊田Ⅸ	散布地	縄文
17	有畑	散布地	縄文	39	豊田Ⅹ	散布地	縄文(中期)
18	中野	集落跡	縄文(後～晩期)、古代	40	円川Ⅰ	集落跡	縄文(前期)
19	オモイ子	集落跡	弥生、奈良、平安	41	円川Ⅱ	散布地	縄文
20	にした平	集落跡	縄文(前期)、弥生	42	小成Ⅱ	集落跡	縄文(中期)
21	岩ヶ沢	集落跡	縄文(前期)、弥生、奈良、平安	43	岩竹	散布地	縄文
22	關高部	城跡	古代、中世	44	關の部	散布地、城跡跡(石)	縄文、中世



第4図 周辺遺跡分布図

跡など全域で縄文時代草創期～晩期にかけての遺跡が広範囲で分布する。龍泉洞新洞遺跡出土の瓜型土器は盛岡市大新町遺跡出土土器とともに県内で最も古い草創期後半の土器である。縄文時代中期の遺跡が最も多く、小本川流域は谷底平野が狭い範囲で形成され、川に沿って縄文時代の遺跡が点在する。

小成Ⅱ遺跡が所在する小本地区は、遺跡の大半が河岸段丘上に位置し、若干弥生時代の遺跡も見られるがほとんどは縄文時代のものである。小本川沿いの河岸段丘上には縄文時代や古代の遺跡も見られる。平成3年に文化財補助事業3ヵ年計画の2年目としてとして小本地区、有芸地区の町内遺跡詳細分布調査が岩泉町教育委員会によって行われた。この調査によって、町内の遺跡数は急激に増え、小本地区は55ヶ所増の100ヶ所となった。また、それまで不明であった町指定文化財の遮光器土鍋の出土地点が明らかになり、茂師貝塚（第4図27）の遺跡登録につながった。現在では平成25年に調査された本遺跡と腰巡館跡を入れ、小本地区内で102ヶ所の遺跡が登録されている。

茂師貝塚（27）は、平成6年に遺跡の一部が岩泉町教育委員会によって発掘調査され、竪穴住居跡9棟、竪穴状遺構2基、土坑2基、墓壇1基、埋設土器遺構3基が確認された。縄文時代早期～晩期の土器が出土しており、うち縄文時代後～晩期の土器が最も多い。大型石斧、垂飾、石棒等も出土している。縄文時代晩期の遮光器土鍋は全長が約30cmあり、町の文化財に指定されている。豊岡V遺跡（36）は、平成16年に水道施設建設工事に伴う事前調査として岩泉町教育委員会によって発掘調査され、町内初の弥生時代後期の集落跡であることが確認された。弥生時代の竪穴住居10棟、土坑2基が見つかり、住居内からは在地の赤穴式土器と北海道系の後北式土器が共伴して出土した。またアメリカ式石鏃、木製品、多量の堅果類等も出土している。小成Ⅱ遺跡から北西約2.25kmに位置する腰巡館跡（22）は、平成25年に東日本大震災に係る移転地造成盛土材採取事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が岩泉町教育委員会、岩手県教育委員会によって行われ、平安時代の集落跡と中世の館跡であることが確認された。竪穴住居4棟、郭2基、土塁1基、空堀3条、道状遺構1基、銭貨集中1基、炭甕3基が検出された。空堀からは寛永通宝13枚がまとめて出土した。

参考文献

- 岩泉町教育委員会 1980 『岩泉町史』〈上巻〉
 1992 『岩泉地方史』（地質編）
 1992 『岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅱ—小本・有芸地区—』岩泉町文化財調査報告書第24集
 1994 『茂師貝塚—平成6年度発掘調査概報—』岩泉町文化財調査報告書第29集
 2006 『豊岡V遺跡—平成16年発掘調査報告書—』岩泉町文化財調査報告書第43集
 2014 『腰巡館跡—東日本大震災に係る移転地造成盛土材採取事業地発掘調査報告書—』岩泉町文化財調査報告書第47集

Ⅲ 野外調査・室内整理方法

1 野外調査

(1) グリッド設定

調査区前は田地で、三陸沿岸道路（田老～岩泉）事業に伴い道路建設予定地部分の調査を実施した。調査区面積は1,900㎡である。調査に必要となる基準杭設定を外部委託し、3級基準点を調査区内東西に2点、南に区画付杭4点の計6点打設した。調査区内に遺物包含層が確認されたため、基準点1（基1）を原点とし、西端から東端をアルファベットa～q、北端から南端をアラビア数字1～9とふりわけ、全域に5mグリッドを設定（第6図）することで、調査区内の遺構・遺物の検出土状況把握に努めながら調査を進めた。打設した杭の世界測地系による座標値は以下のとおりである。

	X	Y	Z
基-1	= -19160.000m	96550.000m	40.752m
基-2	= -19160.000m	96600.000m	39.911m
付1	= -19180.000m	96550.000m	40.568m
付2	= -19180.000m	96575.000m	40.350m
付3	= -19160.000m	96575.000m	40.629m
付4	= -19160.000m	96585.000m	40.142m

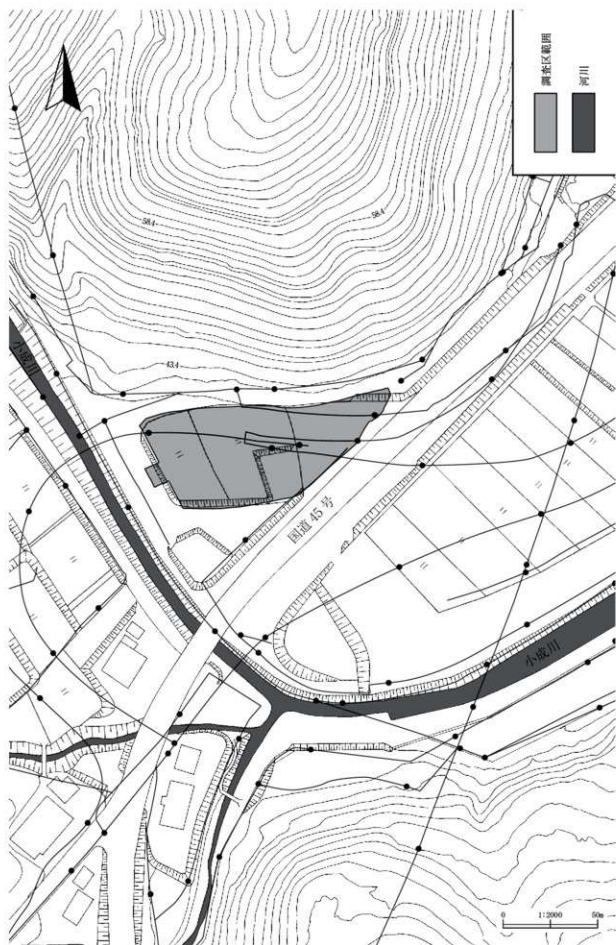
(2) 調査の手順

調査開始とともに雑物撤去を行い、土の堆積と地形観察、確認のため調査区内各所にトレンチを設定し、人力で掘削を行った。土層観察の結果、遺跡の基本層序は大きくⅠ～Ⅳ層に分層することができ、Ⅱ層より遺物が多く出土したことから遺物包含層と判断した。また、Ⅲ・Ⅳ層上面で遺構を確認し、遺構検出面とした。Ⅲ層は黄色味が強く、前後の層位堆積状況、出土遺物年代からTo-Cu火山灰であると判断した。Ⅲ層上部は田地開墾時に上部が削平されたため消滅したものと判断した。Ⅳ層は地山とした。

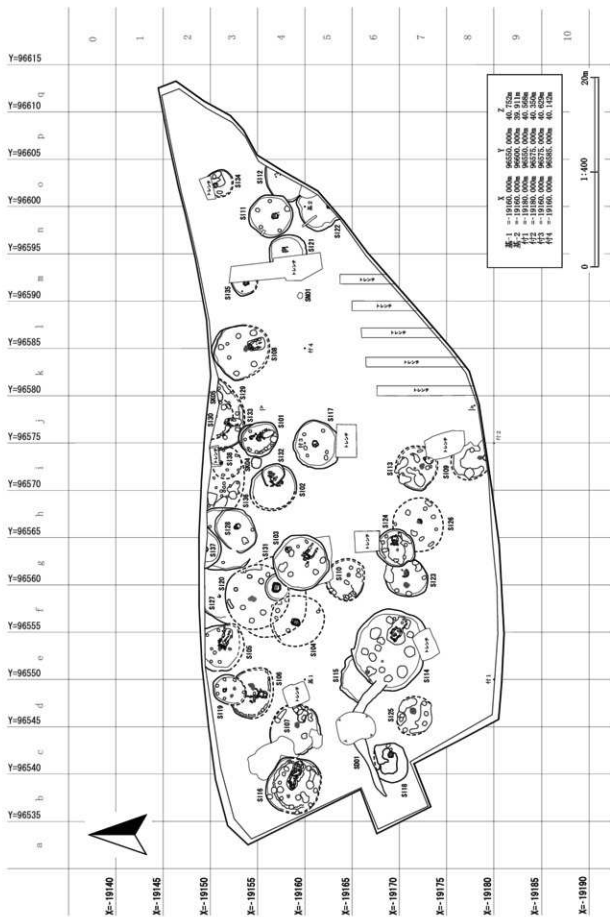
以上を確認し、Ⅱ層の遺物包含層上面まで重機を使用し掘削を行い、次に人力で掘り下げ、遺構検出と調査を行った。

検出した遺構は、奈良国立文化財研究所が採用している遺構略号を使用した。堅穴住居跡、土坑跡の掘り下げ、観察、記録には種類・規模に応じて6分法と4分法、2分法を用い、溝状遺構は数か所にベルトを掛け掘り下げた。

遺構の実測は、平面を電子平板測量で行い、断面は基準杭の標高値を基にレベル測量から、S = 1/20、1/10で手実測を行った。使用した基準杭値（X、Y、Z）は上記の通りであり、第6図中に記された場所に位置する。現場の記録撮影には35mm記録にデジタルカメラ、フィルム記録に6×9カメラを使用した。



第5図 周辺地形図・調査範囲



第6図 遺構配置図

(3) 調査過程

調査記録

平成25年(2013年)

- 7月1日 事務所設営、環境整備
- 7月2日 試掘トレンチ掘削、基本層序確認、重機搬入
- 7月3～5日 安全柵設置、重機による表土除去開始、排土運搬
- 7月8～12日 重機による表土剥ぎ、確認トレンチ掘削、遺構検出開始
- 7月16～19日 重機による表土除去、遺構検出、排水作業(18日は雨天の為作業中止)
- 7月22～25日 遺構検出、グリッド設定、トレンチ掘削
- 7月29～31日 遺構検出、遺構精査
- 8月1～2日 資材整備、遺構精査、藤本調査員合流
- 8月5～8日 遺構精査、確認トレンチ掘削
- 8月9日 現場長期閉鎖による安全対策、遺物水洗
- 8月19～23日 遺構精査(20日は雨天の為作業中止)、森調査員合流
- 8月26～29日 遺構精査、重機搬入、調査区内U字溝撤去、表土除去、土山固め
- 9月2～6日 遺構精査、現地説明会準備(2日は雨天の為作業中止)、佐々木調査員合流
- 9月7日 遺跡現地説明会
(国土交通省三陸国道事務所 副所長 戸嶋 守氏 他2名 来跡)
- 9月9～30日 遺構精査(10日事業団理事長視察)
- 10月1～10日 遺構精査
- 10月11日 遺構精査、現場撤収作業、機材搬出

来跡記録

- 7月3日 岩手県教育委員会(以下略)生涯学習文化課 半澤氏来跡
- 7月10日 国土交通省三陸国道事務所 金濱氏 来跡
- 7月11日 PPP小林氏来跡(旧水路確認の為)
- 7月12日 鈴木測量来跡(基準点打設打合せの為)
- 7月16日 国土交通省三陸国道事務所 金濱氏、生涯学習文化課 菅氏来跡
- 7月23日 国土交通省三陸国道事務所 金濱氏、宮古労働基準監督所 澤田氏、
生涯学習文化課 菅氏 来跡
- 7月25日 共同通信社 西薮氏 来跡取材
- 7月29日 岩泉町教育委員会 田鎖氏 来跡
- 9月3日 岩手日報社 阿部記者 来跡取材
- 9月5日 国土交通省三陸国道事務所 金濱氏他 2名 来跡(現地説明会打合せの為)

2 室内整理

(1) 遺構記録の整理

野外調査の際、電子平板測量で作成した平面図と手実測による遺構断面図から第2原因図を作成し、デジタルトレース、編集作業を行った。図版スケールは遺構の種類・規模・性格により1/40、1/60などに統一することとした。

撮影した遺構写真は、モノクロームフィルムは密着写真とともにナンバリングを行い、ネガアルバム収納した。デジタルカメラによる記録は岩手県立埋蔵文化財センター内保管の記録媒体に保存している。報告書作成時に使用した写真は主にデジタルデータである。

遺構図版は佐々木・藤本が作成し、全体の作成・編集は藤本が行った。

(2) 遺物の整理

遺物の整理は、土器・石器・石製品・土製品ともに水洗後に袋単位で番号を付け、重量計測、登録作業を行った。その後、土器に登録番号を注記し、接合、復元作業を行った。土器の掲載基準は①残存率の高いもの、②遺構の時期推察に有効なもの、③遺跡の主体出土土器群とは異なる他型式土器と推測できるもの。石器・石製品は①使用痕が顕著に認められるもの、②加工が著しく認められるもの、③遺構の性格に有効な資料と判断されるものとした。土製品は残存率の良いものとした。遺物図版は、土器1/3、土製品1/2、剥片石器1/1、礫石器類1/4、石製品1/2/または1/1、石皿1/8で掲載した。なお、遺物の原稿執筆・表作成は縄文土器・土製品を高木が石器は藤本が行った。

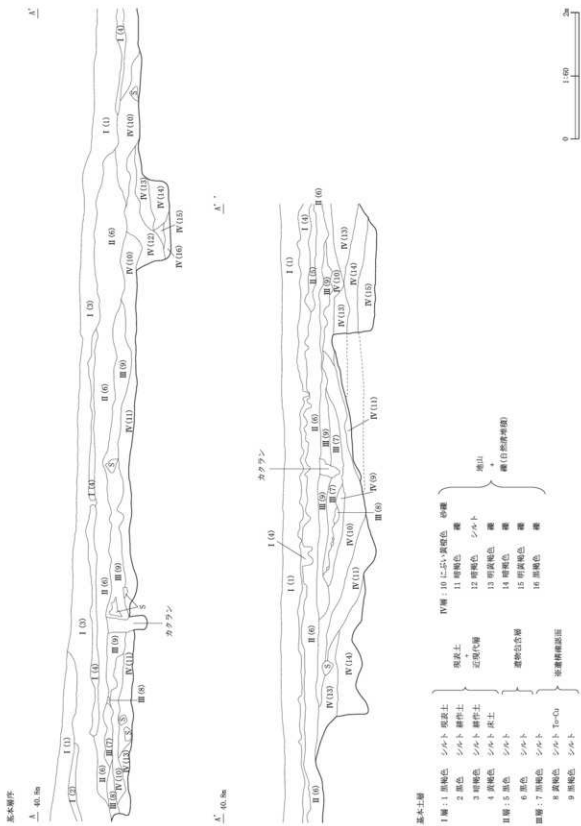
(3) 室内整理経過

平成25年(2013年)

10月18～22日	土器水洗
11月1日	土器仕分け、計量、遺構注記打ち込み
11月5日	土器計量、報告書本文作成開始
11月6日～12月27日	土器復元開始、遺構トレース、遺物観察表入力

平成26年(2014年)

1月6～23日	土器復元、遺構トレース
1月17日	遺物撮影開始
1月24～3月11日	遺物実測開始、写真整理開始
1月31～2月14日	土器拓影開始
2月17～18日	土器実測、写真編集
2月19～3月7日	土器実測、デジタルトレース
3月10～11日	遺物実測、拓本裏張り
3月12～18日	土器トレース
3月19～25日	遺物図版作成
3月26～31日	遺物収納



第7図 基本層序

3 基本層序

残存状態の良い調査区中央東西方向A-A'で基本層序を確認した。

I～IV層に大分し、I層が現代層、II層が遺物包含層、III層が遺構確認層、IV層が地山と判断した。層位理解の為、細分しながら行い、表記は第7図の通りである。I(1)～(4)層、II(5)～(6)層、III(7)～(9)層、IV(10)～(16)層と表現する。I層は近現代の耕作土層である。I(1)層は現表土、I(2)・(3)層は水田耕作土、I(4)層は床土である。II層は黒色シルト層である。層相のわずかな差異によりII(5)・(6)層に細分した。部分的に開田による削平を受け消失しているが、残存状態の良い地点では層厚30～50cmで平坦に堆積する。比較的多量の縄文時代中期後葉遺物を包含する。III層は黒褐色シルト層である。中位に十和田中掬テフラ(以下To-cuと略)と見られる黄褐色テフラ層を挟むため、上位からIII(7)・(8)・(9)層に細分した。III(8)層がTo-cuである。調査区の北側から中央部にかけて分布する。III(7)層とIII(9)層は類似する層相だが混入物の差異が見られる。なおIII(7)～(9)層上面において遺構検出を行った。III(7)・(9)層上面では遺物や炭化物の分布により遺構の判断を行っており明確なプランの検出は難しい。IV層は基盤礫層を中心とした所謂地山である。一部の深掘りトレンチにおいて約1m下位までを観察している。色調により複数層に細分した。IV層上面で検出した遺構も複数存在する。

小成II遺跡で検出された基本層序III(8)層とした火山灰層は黄色のシルト質壤土であり、色調・土質から縄文時代前期中葉に降下したTo-Cuと判断した。To-Cuは青森県南東部から岩手県北部において顕著に確認され、当該地域の発掘調査において遺跡の年代を知る指標とされてきた。色調・土性・土質からA種、B種、C種に分類され(星、茅野2006)、A種が十和田火山から約60km圏内の近郊、B種が約200km前後、C種は青森県から岩手県田野畑村和野遺跡などにみられるとされている。

三陸沿岸の遺跡事例では、北は種市町から南は陸前高田市までほぼ全域でTo-Cuが検出されている。噴出源からの距離は約70～200kmを測る。テフラの種類はB種とした所謂安家火山灰と呼ばれる黄色や肌色の粉状を主体に、C種とした白色の砂状を呈するもので、A種としたアズナと呼ばれるものは確認されていない。

To-Cuが確認されている遺跡の立地は海岸段丘や、山麓斜面地、谷底平野などに多い。遺跡の標高は約7～270mの範囲で、小成川を由来とする谷底平野部に立地する小成II遺跡は標高約40m前後である。これはTo-CuのB・C種の降下標高の範囲内におさまる。しかし、当該遺跡で検出されたTo-Cuは、遺跡の立地する急斜面下という環境から判断すると降下当初の堆積状況を保っているとは判断しがたく、降雨などの自然現象によって山麓斜面上に降下したTo-Cuが二次堆積したものである可能性が極めて高い。遺跡内からはごくわずかではあるが、縄文時代前期中葉以前の土器が数点出土しており、古いものでは早期中葉から前期前葉のものが出土している。これは山麓斜面中に縄文早期中葉～前期前葉までの遺跡が存在し、To-Cuが谷底部へ二次堆積する際に巻き込まれて混入した可能性が考えられる。

参考文献

- 星雅之・茅野嘉雄 2006 「十和田中掬テフラからみた円筒下層a式土器成立期の土器様相」
『植生史研究』特別第2号 pp151-180
菊池強一他 1981 「北上山地東部に分布する縄文前期火山灰について」『東北地理』33-1, pp57-58

IV 検出遺構と遺物

1 概 要

小成Ⅱ遺跡の検出遺構数は縄文時代中期後葉～末葉の竪穴住居跡38棟、焼土1基、土坑2基のほか、時期不明の溝跡1条である。竪穴住居跡は大小の複式炉・石囲炉・地床炉を伴う縄文時代中期後葉大木9式、10式段階のものが主体である。出土遺物のうち縄文土器の総重量は重量約188kg、40Lコンテナで19箱である。土器の破片数は集計していない。このうち、260点を掲載遺物として選抜した。他に、若干量の縄文早期中葉、同前期初頭、同晩期後葉の土器を含む。土製品では円盤状土製品が1点出土している。石器は180点、うち82点を掲載遺物として選抜した。石鏃2点、石錐1点、石筥1点、石匙1点、異形石器1点、スクレイパー5点、不定形石器7点、使用痕のある剥片9点、両極剥片4点、剥片22点、磨製石斧17点、礮器2点、石皿台石類10点、敲磨器類88点、磨製石斧1点、石製品6点、その他5点がある。他に琥珀碎片9点が出土している。

2 遺 構

(1) 竪穴住居跡

SI01 竪穴住居跡 (第8図、写真図版2)

[位置・検出状況] 調査区中央北部3i・3j・4i・4jグリッド、Ⅲ(8)(9)層上面から、不整形プランを確認した。遺物の出土量も多く、規模から住居と判断した。上部は開田による削平を受けている。[重複関係] SI33を切る。重複関係にあるSI33のほぼ直上に造られている。

[長軸方向]

[平面形・規模] 不整形円形で開口部4.0×3.5m、深さ10cmである。

[壁・床面] 壁は崩落し立ち上がりは丸味を帯びている。南側は開田時の削平により消失している。壁際に柱穴がめぐり、南西側に一部壁溝を確認した。床面はⅣ(11)層の礮層に到達し平坦ではない。複式炉前庭部南西側の壁際に土坑が1基確認した。埋土2層がSI33の埋戻し兼貼り床であった可能性が高く、SI33住居跡の炉を形成していた材石が散乱していた。床面積7.9㎡である。

[堆積土] 4層に分層した。切り合うSI33の床面及び石囲炉の埋戻しである2層面が貼り床であった可能性が高い。1・3層に火山灰が混入し、4層とも基本層序Ⅱ層由来の埋土である。2・4層に炉燃焼部由来の焼土ブロックを確認した。

[炉形態] 掘り込み部と石組み部の複式炉である。周辺からは石組部の構成材が検出された。

[柱穴] 9個確認した。内、主柱穴はP1～5の5個と推測した。北側で検出された柱穴は重複するSI33の柱穴である可能性も想定される。

[遺物] 土器の出土総重量は4,049gで、大木9式を主体とする深鉢が大半を占める。埋土中からは原体圧痕と繊維を含む前期の深鉢片も出土した。石器は敲磨器類1点、垂飾1点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI02 竪穴住居跡 (第8図、写真図版3)

[位置・検出状況] 調査区中央北側3h・3i・4h・4iグリッド、Ⅲh・i層上面で不整形プランを確認し

た。上部は開鑿に寄る削平を受けている。

〔重複関係〕 SI32 を切り、ほぼ直上に造られている。

〔長軸方向〕 N - 22° - W

〔平面形・規模〕 不整形円形で、開口部 5.1 × (4.6) m、深さ 25 cm である。

〔壁・床面〕 削平の為、壁の大半が消失していたが、東側一部にわずかに残る。壁は崩落し立ち上がりは丸味を帯びている。南東方向に落ち込みを確認したが、現況で確定は難しい。床面は IV (10) 層の礫層に到達し平坦ではない。調査時に貼り床を確認できなかったが、使用時は貼り床がされていたものと想定される。床面には SI32 の炉を形成していた材石が散乱していた。床面積は不明である。

〔堆積土〕 6 層に分層した。遺構北側は To-Cu 面で検出した。南側は開田時の削平により火山灰が消失し、Ⅲ (9) 層黒色土に到達している。2・3 層に火山灰が混入し、埋土は基本層序 II 層由来の埋土と推定した。1 層に炉燃焼部由来の被熱土を確認した。

〔炉形態〕 石囲炉 (不整形)

〔柱穴〕 6 個確認したが、調査の不手際により記録に残すことができなかった。内、配置から主柱穴とされるものは 4 基と想定したが、根拠は薄い。

〔遺物〕 土器の出土総重量は 1,963g。炉直上から RLR 縦回転の深鉢片が出土した。石器は剥片 1 点、磨製石斧 1 点、敲磨器類 2 点が出土した。

〔時期〕 縄文時代中期後葉

SI03 竪穴住居跡 (第 9 図、写真図版 4・5)

〔位置・検出状況〕 調査区中央北側 4f・4g・4h・5f・5g・5h グリッド、Ⅲ (9) 層、IV (10) 層上面で確認した。明確なプランは検出できず、ベルトを設定し掘削をおこなったところ、中央部に多量の礫と炉石の検出がされたため住居跡と判断した。

〔重複関係〕 SI31 を切る。

〔長軸方向〕 N - 51° - W

〔平面形・規模〕 円形を呈す。開口部 5.9 × 5.6 m、深さ 50 cm である。

〔壁・床面〕 壁立ち上がりは崩落し、外傾する。壁の北側は礫層に達する。床面は一部礫層に到達しているため、調査で確認できなかったが本来は貼り床がされていたものと想定される。P 5 の東側に埋設土器 (第 9 図、第 34 図 11) を確認した。周囲は礫で石囲いされ、底部は欠損していた。口縁-胴部上半が平面形で三角状に組まれ、底には胴部が敷かれていた。床面積 20.5 m² である。

〔堆積土〕 6 層に分層した。1・2 層に火山灰が混入し、基本層序 Ⅲ (8) 層由来の埋土と推定した。埋土中央部、北東側に礫を多量に含む。

〔炉形態〕 掘り込み部と石組み部の複式炉である。前庭部の中央底面に被熱した花崗岩と粉砕粒が確認できるのみで、火床面は検出されなかった。

〔柱穴〕 7 個確認した。

〔遺物〕 土器の出土総重量は 12,516 g。床面直上から大木 9 式、大木 10 式を主体とする深鉢片が出土し、埋土中からは縄文時代中期末葉の土器片の他、早期中葉の土器片も出土した。いずれも流れ込みによるものであると判断される。石器は剥片 1 点、磨製石斧 1 点、石皿 3 点、台石 1 点、敲磨器類 7 点が出土した。

〔時期〕 縄文時代中期後葉

S104 竪穴住居跡（第10図、写真図版6）

〔位置・検出状況〕調査区西側北東部4e・4f・5e・5fグリッド、Ⅲ層上面で確認した。削平により壁面は失われており、石囲炉とその周辺に広がる床面の一部を検出した。

〔重複関係〕北東でS120、S131と重複する。本住居跡炉の設置位置がS131の外周上とみられること、S120の堆積土が本遺構内部に伸びることから、S120に切られ、S131を切ると判断した。ただしいずれも柱穴配置と壁溝からプランを推定したものであり新旧関係の根拠は弱い。

〔長軸方向〕軸方向は不明である。

〔平面形・規模〕炉から約2.5mの北西部にある柱穴、溝の配置から円形に近い住居プランを推定している。

〔壁・床面〕前述のように壁面は未確認。床面は炉の周辺に硬化面の広がりが見られるが平面実測記録を欠く。

〔堆積土〕床面上に薄く残存する黒褐色土で火山灰ブロックが含まれる。5層に分層したうち、S120にかけて分布する。

〔炉形態〕垂角礫を用いて亀甲形に組まれた石囲炉である。内部の焼成は比較的強く炉石の一部も被熱する。焼成面上面には層厚3～4cm程度の炭化物層が堆積する。

〔柱穴〕推定プラン内に7個の柱穴を確認しているが、うちP1～5の5個が周溝と炉の位置から本住居跡に伴うと判断した。

〔遺物〕土器出土総重量114g。石器は石皿1点が出土した。

〔時期〕縄文時代中期

S105 竪穴住居跡（第11図、写真図版7・8）

〔位置・検出状況〕調査区北西部北側調査課境、2e・2f・3e・3fグリッド、Ⅲ（8）（9）層上面で確認した。住居の南側は掘削により床面まで露呈している状態で検出され、炉石も一部露出していた。

〔重複関係〕掘削により、住居の南側は推定範囲にとどまるが、東に立地するS127と重複し、これを切る。

〔長軸方向〕N - 65° - W

〔平面形・規模〕開口部5.5×4.9m、深さ20cmである。

〔壁・床面〕床面積13.5㎡である。床面は一部硬化している。炉の長軸方向左側に焼土を確認した。

〔堆積土〕2層に分層した。遺構北側はTo-Cu面で検出し、比較的埋土と明確な差が確認できた。南側は開田時の削平により火山灰が消失し、Ⅲ（9）層黒褐色土に到達している。

〔炉形態〕複式炉。前庭部には石組みされていた痕跡がある。掘削時に破壊されたと想定される石材が多数散乱していた。炉埋土は4層に分層され、5層目は掘り方埋土と判断した。

〔柱穴〕6個確認した。いずれも黒色土を主とする埋土であり、住居南側では柱穴を確認することはできなかった。

〔遺物〕土器の出土総重量は2,929g。大木9式を主体とする深鉢が出土した。また、P4からは土器（第35図3）が出土した。石器は敲磨器類1点出土している。炉前庭部右側壁立ち上りの床直上で多数の材石が出土した。

〔時期〕縄文時代中期後葉

S106 竪穴住居跡（第12図、写真図版9・10）

〔位置・検出状況〕調査区北東部北側4c・4d・5c・5dグリッド、Ⅳ（8）層上面で確認した。

[重複関係] SI19に切られる。

[長軸方向] N - 16° - E

[平面形・規模] 開口部 (5.6) × (4.6) m、深さ 26 cmである。

[壁・床面] 壁は開田時の掘削により大半が消失している。床面はⅢ (9) 層黒色土に到達しており、床面積 17.0 m²である。炉の長軸方向に材石の一部が残存している。炉の北東部床面に焼土を確認した。

[堆積土] SI19と連続する断面 A-A' 7～11層が本遺構の堆積土である。埋土全体に炭化物和焼土ブロックが混入し、炉周辺の床面は特に顕著である。また、7層には礫が多く混入している。

[炉形態] 住居の南壁に接し、石組み部は平扁な石によって2ヵ所に仕切られ、炉石の内側に被熱痕が確認できた一方、炉内に被熱面は見られない。炉内と周辺に焼土ブロックが多量に混入していることから、住居の廃絶の際に掻き出ししている可能性もある。また、長軸方向に配石を思わせる石の並びが伸びる。これら材石も被熱しているものが確認された。炉周辺と炉の上部には特に礫の集中を確認した。

[柱穴] 8個確認した。

[遺物] 土器出土総重量 24.169 g。大木 10 式を主体とする深鉢が出土している。床面から貝殻腹縁圧痕を施した早期中葉の土器片が出土している。土器の出土は炉と住居中軸線上周辺に集中している。石器は剥片 2 点 (使用痕有 1)、磨製石斧 2 点、敲磨器類 12 点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後～末葉

SI07 竪穴住居跡 (第 13 図、写真図版 11)

[位置・検出状況] 調査区東側北部 3k・3l・4k・4l グリッド、Ⅲ (9) 層上面で焼土を確認した。当初、焼土のみの確認だったが炉であると判断し、住居の検出となった。開田時壁面の北東部は削平され、床面が一部露出していた。試掘トレンチと攪乱によって消失している部分が多く、住居北東側は炉と柱穴の確認範囲からの推定線である。

[重複関係] なし

[長軸方向] N - 18° - W

[平面形・規模] 残存部から円形と推測した。開口部 (6.1) × 5.8 m、深さ 10 cmである。

[壁・床面] 前述の通り、壁面は消失しているため、立ち上がりは不明。北東部に壁溝を確認した。床面積 36 m²。

[堆積土] 2層に分層したが、実際の住居内堆積土は1層のみでわずかに炭化物を含み、2層目はP5の埋土である。基本層序Ⅲ (8) 層由来の To-Cu 火山灰を床面に確認した。

[炉形態] 地床炉と掘り込み部の境に仕切り石が1基ある複式炉である。

[柱穴] 6個確認した。

[遺物] 土器出土総重量 1.510 g。石器は剥片 1 点が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI08 竪穴住居跡 (第 14 図、写真図版 12・13)

[位置・検出状況] 調査区東側北部 3k・3l・4k・4l グリッド、Ⅲ (8) (9) 層上面で確認した。当初、複式炉の石組み部のみの検出であったが、炉の存在と柱穴から住居であると判断した。遺構北側は To-Cu 面で検出し、比較的埋土との明確な差がうかがえた。南側は開田時の削平により壁面が消失している。

〔重複関係〕なし

〔長軸方向〕N - 18° - W

〔平面形・規模〕検出された柱穴配置から消失した南側壁面を推定した。全体形は楕円形である。開口部 (6.1) × 5.8 m、深さ 25 cm である。

〔壁・床面〕南側壁面は消失している。残存する北側の壁立ち上がりは緩やかに外傾する。推定床面積 24.0 m² である。

〔堆積土〕2 層に分層した。確認できた部分の層厚は 1 ~ 5 cm 程度である。

〔炉形態〕地床炉と石組み前庭部からなる複式炉である。長軸方向に燃焼部を確認した。前庭部の中央には平石が長軸方向と平行に設置されていた。炉埋土は 3 層に分層した。

〔柱穴〕7 個確認した。うち P 1 ~ P 5 が主柱穴であり、調査時には確認できなかったが炉を挟んだ対角上に P 6 と対になる柱穴があったものと推定される。

〔遺物〕土器出土総重量 1,510 g。炉埋土を含め大木 9 式を主体とする深鉢が出土した。石器は剥片 1 点が出土している。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI09 竪穴住居跡 (第 15 図、写真図版 14)

〔位置・検出状況〕調査区中央南側 Si・8j グリッド、Ⅲ (9) 層上面調査区域で確認した。当初、焼土のみの検出であったが、焼土南側にわずかにプランと柱穴を確認したことから住居と判断した。住居壁面は開田時の掘削によりすべて消失している。東側は試掘トレンチと攪乱により消失している。

〔重複関係〕なし。

〔長軸方向〕N - 3° - W

〔平面形・規模〕開口部 (4.9) × (4.1) m。

〔壁・床面〕削平により、壁と床面は不明。炉と柱穴、住居掘り方の位置から住居範囲を推定した。

〔堆積土〕削平により堆積土は残存しない。

〔炉形態〕地床炉の南に前庭部の掘り込みを伴う複式炉である。調査区境断面に炉石が見られることから、本来は燃焼部と石組部の複式炉であった可能性もある。

〔柱穴〕1 個確認した。

〔遺物〕土器出土総重量は 1,210 g。大木 10 式を主体とした縄文中期後葉の土器が出土している。石器は剥片 1 点 (使用痕有) が出土している。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI10 竪穴住居跡 (第 15 図、写真図版 15)

〔位置・検出状況〕調査区中央西側 5f・5g・6f・6g グリッド、Ⅲ (9) 層上面で確認した。焼土範囲の確認と遺物の出土量から住居と判断したと南西を除くすべてが開田時の削平試掘トレンチによって消失している。

〔重複関係〕なし

〔長軸方向〕N - 85° - E

〔平面形・規模〕開口部 (4.5) × (4.0) m、深さ 12 cm である。

〔壁・床面〕壁面は前述の通り大半が消失している。床面積 (12.6) m² である。床面は一部硬化している。

〔堆積土〕1 層確認し、炭化物をわずかに含む。

【炉形態】 地床炉である。

【柱穴】 7個確認した。うち主柱穴はP1～5と推定される。

【遺物】 土器出土総重量787g。大木10式を主体とする縄文時代中期後葉の土器が出土している。石器は剥片2点（使用痕有）、両極剥片1点が出土した。

【時期】 縄文時代中期後葉

SI11 竪穴住居跡（第16図、写真図版16・17）

【位置・検出状況】 調査区東側中央部3n・3o・4n・4oグリッド、Ⅲ（9）層上面で確認した。

【重複関係】 SI12を切る。

【長軸方向】 N - 10° - W

【平面形・規模】 開口部4.7×4.5m、深さ38cmである。

【壁・床面】 壁面は一部崩落しており全体に外形する。床面積13.2㎡である。

【堆積土】 6層に分層した。6層は炭化物と焼土ブロックを多量に含む。特に壁際にその傾向が顕著である。焼失住居である可能性が高い。

【炉形態】 方形の石囲炉である。炉の上部に平石が集中して出土した。また、石囲部外南東にわずかに2箇所、焼土を確認した。

【柱穴】 5個確認した。いずれも主柱穴と見られる。P3は正位で出土した土器（第16図、第37図68）の下部に開口している。

【遺物】 土器出土総重量は25819g。住居の北西側からは深鉢（上記同）が正位で出土し、内部から白色粘土が出土した。土器の上部には平石が蓋をする状態でのせられており、出土した白粘土が乾燥していなかったことから、乾燥防止の蓋であった可能性がある。また、出土した位置はP3柱穴掘方にわずかに重なり、さらに柱穴と壁の立ち上がりとの間の位置に存在することから収納されている可能性もある。全体を通して大木9式を主体とした縄文時代中期後葉の深鉢、鉢、壺が出土している。ほか、大木8bも出土している。石器は石匙1点、石笥1点、スクレイパー2点、不定形石器1点、剥片7点（使用痕有3）、両極剥片1点、磨製石斧5点、礫器1点、石皿2点、敲磨器類8点、垂飾1点が出土している。また、黒曜石剥片が1層下位より出土している（V章1節試料No.3）。これは本遺跡で最多の出土量である。

【時期】 縄文時代中期後葉

SI12 竪穴住居跡（第17図、写真図版18）

【位置・検出状況】 調査区東側中央部4oグリッド、Ⅲ（9）層上面調査区境で確認した。

【重複関係】 SI11に切られる。また、風倒木により南側が切られる。

【長軸方向】 N - 63° - W

【平面形・規模】 国道45号線にかかる調査区境にあるため、正確な平面規模は不明である。深さ23cmである。

【壁・床面】 壁立ち上がりは崩落によりやや外傾する。床面積は7.9㎡である。

【堆積土】 2層に分層した。1層の混入物は不明だが、2層にはToCu火山灰をわずかに確認した。

【炉形態】 炉が調査区境にかかるため形態は不明だが、断面とわずかに残る炉石の出土状況から石囲炉であった可能性が高い。

【柱穴】 柱穴は確認できなかった。

〔遺物〕出土土器総量 1,194 g。大木 9 式を主体とする深鉢が出土した。石器は出土していない。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI13 竪穴住居跡（第 17 図、写真図版 19）

〔位置・検出状況〕調査区中央部南側 6i・7i グリッド、Ⅲ（9）層上面で確認した。南東側は試掘トレンチにより消失している。開田により大きく削平されている。西側は床面が露出していた。

〔重複関係〕なし。

〔長軸方向〕N - 46° - W

〔平面形・規模〕住居の壁面は消失しており、正確な規模は不明であるため、掘方から破線の範囲と推定した。開口部 (4.8) × (4.4) m、深さ 10 cm である。

〔壁・床面〕壁はわずかに西側に立ち上がりが残るのみである。

〔堆積土〕3 層に分層した。3 層は地床炉の焼土である。

〔炉形態〕地床炉の南東側に掘り込みの前庭を伴う複式炉である。

〔柱穴〕4 個確認した。

〔遺物〕出土土器総重量 965g。石器は剥片 1 点、敲磨器類 2 点が出土している。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI14 竪穴住居跡（第 18・19 図、写真図版 20・21）

〔位置・検出状況〕調査区西側南西部 6i・7i グリッドで確認した。この区域はⅢ層が開田によって削平を受けており、検出面はⅣ（10）（11）層上面となった。

〔重複関係〕SI15 に切られる。

〔長軸方向〕N - 60° - W

〔平面形・規模〕楕円形で開口部 8.6 × 7.4 m、深さ 50 cm である。

〔壁・床面〕壁立ち上がりは崩落し、丸味を帯びて外傾する。床面積 25.3 m² である。SI15 に接する北西壁際からは、埋土中位に焼土 2 基が確認された。被熱はやや弱いものの、現地性のものであると判断した。

〔堆積土〕6 層に分層した。埋土中央からは礫が多量に出土した。当初、投げ込み等の可能性を想定したが、層位中間中央部に焼土面 (1c 層) を確認し、また、前述した SI15 に接する焼土 1、焼土 2、及び焼土 3（第 18 図）が存在することを考慮すると、堆積後あった可能性が高い。なお、1c 層とした住居中央部検出焼土は調査時 A-A' 断面にかかり平面記録を残すことはできなかったため断面でのみの確認となる。

〔炉形態〕石組み部 3 の複式炉である。3 層に分層した。1・2 層に炭化物と焼土粒がわずかに混入するが、燃焼部は検出されなかった。前庭部壁際に深さ 40 cm の特殊ピットを伴う。

〔柱穴〕12 個確認した。うち、配置から P 1 - 7 が主柱穴と判断した。

〔遺物〕出土土器総重量 1,535 g。大木 9 式を主体とし大木 10 式を含む深鉢が出土している。また、大洞 C₂ 式がみられる。出土状況から流れ込みによるものと判断される。石器はスクレイパー 1 点、不定形石器 1 点、敲磨器類 4 点である。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI15 竪穴住居跡（第 20 図、写真図版 22）

〔位置・検出状況〕調査区西側南西部 5d・5e・6d・6e グリッドで確認した。この区域はⅢ層が開田によ

で削平を受けており、IV (10) 層上面での検出となった。

[重複関係] SI14を切る。

[長軸方向] 不明。

[平面形・規模] 重複の為、正確な規模は不明だが開口部は東西方向で4.8m以上、深さ15cmである。
[壁・床面] 壁は崩落により緩やかに外傾する。床面は掘削により露出している部分があった。住居北側はSI14方向に床面の礫層が露出している。

[堆積土] 2層に分層した。1層には炭化物がわずかに含まれる。

[炉形態] 未確認

[柱穴] なし。

[遺物] 出土土器総重量3,135g。大木9式を主体とする石錐1点、不定形石器1点、剥片1点、磨製石斧2点、敲磨器類6点が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI16 新・旧竪穴住居跡 (第20・21図、写真図版23・24)

[位置・検出状況] 調査区北西部4b・4c・5b・5cグリッド、Ⅲ(9)層上面で確認した。削平により床面が一部露出しており、当初、炉の材石のみの検出であった。炉石と土器の出土量が顕著であることから、住居跡と判断した。

[重複関係] 当初ベッド状遺構を伴う、同一住居と認識していたが、壁面内に壁溝が存在し、炉石の検出レベルと前庭部の掘り込み位置、主軸のわずかな誤差から同住居での建て替えがあったと判断した。以下、旧住居、新住居と記述する。

[長軸方向] 新旧ともにN-61°-W

[平面形・規模] 新住居は円形、旧住居は方形である。住居南側床面は残っているものの壁面は完全に消失しているため、正確なプランは把握できない。炉と柱穴の配置から推定して、新住居は開口部6.1×(5.4)m、深さ2cm、旧住居は北側壁の残存状況から開口部6.1×(5.4)m、深さ13cmと推定される。

[壁・床面] 開田時の掘削により壁の立ち上がりは不明である。床面には、複式炉の主軸方向に焼土が確認された。新住居床面積19.6㎡、旧住居面積28.3㎡である。

[堆積土] 3層に分層した。1・2層とも炭化物をわずかに含む。2層下部底面が新住居の床面である。また3層は建て替え前の旧住居の埋土である。

[炉形態] 炉の前庭部中央は攪乱を受けていた。新住居は石組み部2の複式炉、旧住居も同じく石組み部2の複式炉である。旧住居の複式炉前庭部には壁際にピットが設けられている。

[柱穴] ほほ同位置に建て替えられていること、また、住居内埋土がほとんど消失していることから、新旧合わせての検出となった。確認された柱穴は20個である。その内、配置から新住居の主柱穴はP1~P7、旧住居P8~13、P15、P16と判断した。

[遺物] 土器出土総重量2,031g。大木9式を主体とする深鉢が出土している。石器は剥片1点、敲磨器類2点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI17 竪穴住居跡 (第21図、写真図版25)

[位置・検出状況] 調査区中央4i・4j・5i・5jグリッドで検出した。この区域はⅢ層が開田によって削平を受けておりIV (11) 層上面での確認となった。確認トレンチにより南側は消失している。当初、

平面では明確なプランは確認できず、トレンチ断面からも立ち上りの確認はできなかったが、混入物に炭化物が含まれていること、遺物の出土が顕著なことから住居跡と判断した。

[重複関係] なし

[長軸方向] N - 11° - W

[平面形・規模] 円形である。開口部 5.2 × 4.9 m、深さ 27 cm である。

[壁・床面] 壁は崩落により外傾する。礫層からの検出であり、床面も礫が散在する。貼り床の痕跡は確認できなかった。床面積 15.3 m² である。

[堆積土] 8層に分層した。全体に炭化物が混入する。

[炉形態] 円形の石囲炉である。炉内では扁平気味の長階円礫2個が覆い被さるように出土した。

[柱穴] 6個確認した。うち、配置から主柱穴はP1～4であると判断した。

[遺物] 土器出土総重量 8,289 g。縄文中期後葉の土器片が出土している。石器はスクレイパー1点、不定形石器1点、剥片3点（使用痕有1）、磨製石斧1点、敲磨器類5点、垂飾3点出土した。垂飾の出土量は本遺跡最多である。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI18 竪穴住居跡（第22図、写真図版26）

[位置・検出状況] 調査区西側西端部 5d・5e・6d・6e グリッドⅢ（9）層上面で確認した。当初、プランは確認出来なかったが、炉石の一部が露出していたため住居跡と判断した。

[重複関係] SD01 に切られる。

[長軸方向] N - 88° - W

[平面形・規模] 削平により正確な規模は不明だが、住居掘り方から楕円気味の隅丸方形と推定した。開口部 4.2 × 3.4 m、深さ 5 cm である。

[壁・床面] 削平の為、床面積は不明である。

[堆積土] 3層に分層した。埋土中にはⅢ（7）層由来土が混入している。

[炉形態] 不整形の石囲炉である。

[柱穴] 2個確認した。

[遺物] 土器出土総重量 230 g。石器は不定形石器1点、敲磨器類2点出土している。

[時期] 縄文時代中期

SI19 竪穴住居跡（第22図、写真図版27）

[位置・検出状況] 調査区北西側北部 3d・3e グリッド、Ⅲ（8）（9）層上面で確認した。住居跡南側は開田時の削平により消失している。

[重複関係] SI06 を切る。

[長軸方向] N - 10° - E

[平面形・規模] 開口部 (3.7) × 0.03 m、深さ 25 cm である。

[壁・床面] 壁立ち上りは崩落し、緩やかに外傾する。床面には焼土範囲が確認された。炭化材と焼土ブロックが床面から出土しており、焼失住居と見られる。削平により住居の南側は消失しているが北側の残存状況と断面から床面積 (6.9) m² であったと推定される。

[堆積土] 5層に分層した。全体に炭化物が混入し、1・4層には焼土ブロックが多量に含まれる。

[炉形態] 方形の小型石囲炉である。炉の周辺からは炭化物が多量に出土した。

〔柱穴〕確認した柱穴は6個である。なお、炉の南側に位置する床面の焼土1・2は配置から見て下位に柱穴があった可能性が考えられるが、焼成面の裁ち割りによる下位の確認を行っていないため確証はない。

〔遺物〕土器出土総重量7.881g。大木9・10式を主体とした深鉢、壺が出土した。貝殻腹縁圧痕文を持つ早期中葉の土器も出土している。石器はスクレイパー1点、不定形石器1点、両極剥片1点、石皿3点、敲磨器類1点が出土した。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI20 竪穴住居跡（第23図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕調査区北西側北部3f・3g・(4f・4g)グリッド、Ⅲ（9）層上面で確認した。当初は焼土範囲と柱穴の確認にとどまったが、柱穴の位置関係から、住居跡とした。

〔重複関係〕SI04・05・27・31を切る。

〔長軸方向〕不明

〔平面形・規模〕東側の壁溝を本住居跡に伴うものと捉え、炉を中心とした円形のプランを想定している。

〔壁・床面〕開田時の削平により大部分が消失している。

〔堆積土〕削平により、住居の壁が失われているため、堆積土は確認できなかった。

〔炉形態〕地床炉を確認した。

〔柱穴〕重複が著しいため、SI20 竪穴住居跡の柱穴であると断定はできないが、配置から主柱穴となるものは4個と判断した。

〔遺物〕土器出土総重量2.060g。大木9式を主体とした深鉢が出土した。石器は敲磨器類3点、垂飾1点が出土している。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI21 竪穴住居跡（第24図、写真図版29）

〔位置・検出状況〕調査区東側中央部4m・4n・5nグリッド、Ⅲ（9）層上面で確認した。平面ではプランが確認できなかったため、試掘トレンチ断面での検出となった。上部は開田時の削平により消失している。

〔重複関係〕なし

〔長軸方向〕N - 80° - E

〔平面形・規模〕試掘トレンチにより西側が消失しているため正確な規模は不明だが、南北方向では3.9mの開口部、深さ14cmと推定される。

〔壁・床面〕壁立ち上がりは崩落により外傾する。

〔堆積土〕3層に分層した。

〔炉形態〕燃焼面周辺に被熱した石がまとまって確認されたことから、開田時の削平によって破壊された石囲炉と判断した。

〔柱穴〕不明

〔遺物〕土器出土総重量3.807g。大木9式を主体とした深鉢が出土している。前期前葉の深鉢片が出土した。石器は両極剥片1点、剥片1点、敲磨器類2点が出土した。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI22 竪穴住居跡 (第24図、写真図版30)

[位置・検出状況] 調査区東側中央部4n・4o・5n・5oグリッド、IV(11)層上面調査区域で確認した。北東側は風倒木により消失している。

[重複関係] なし

[長軸方向] 不明

[平面形・規模] 国道45号線調査区域からの検出となり全体の規模は確認できなかったが、開口部4.8×(3.1)m、深さ25cmである。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落し外傾する。

[堆積土] 4層に分層した。1・2層の混入物は不明だが、3・4層は壁の崩落土と判断した。

[炉形態] 調査区域に方形の石囲炉の一部を検出した。全体の把握ができないため形態は不明である。燃焼部中央に礫が設置されている。

[柱穴] 不明

[遺物] 土器出土総重量1,591g。大木9式を主体とする深鉢が出土した。石器は出土していない。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI23 竪穴住居跡 (第25図、写真図版31・32)

[位置・検出状況] 調査区南西側中央6f・6g・7f・7gグリッド、IV(11)層上面で確認した。当初、プランは全く確認できなかったが、土層ベルトを設定し面的に掘り下げた結果、石囲炉を確認したため、住居と判断した。

[重複関係] SI24に切られる。

[平面形・規模] 楕円形で、開口部4.8×4.1m、深さ17cmである。

[壁・床面] 壁立ち上がりは外傾している。床面には黄褐色粘土により一部貼り床がされている。床面積11.2㎡以上である。

[堆積土] 3層に分層した。1層にのみ炭化物の混入が確認された。

[炉形態] 北側は材石が消失しているが石囲炉であったと判断した。石囲炉の西側には地床炉も存在する。

[柱穴] 6個確認した。位置関係からいずれも主柱穴であると判断した。

[遺物] 土器出土総重量3,079g。大木9式を主体とする深鉢が出土した。石器は磨製石斧2点、敲磨器類4点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI24 竪穴住居跡 (第25図、写真図版33)

[位置・検出状況] 調査区南西側中央部6g・6h・7g・7hグリッド、IV(11)層上面で確認した。検出過程はSI23竪穴住居跡と同様である。北側は試掘トレンチにより消失している。

[重複関係] SI23・26を切る。

[長軸方向] N-81°-E

[平面形・規模] 円形を呈し、開口部4.3×3.8m、深さ40cmである。

[壁・床面] 壁面は外傾する。SI23竪穴住居跡同様、床面には貼り床が施されている。複式炉長軸方向延長上に焼土を確認した。また、北西、南東側に壁溝を検出した。床面積10.3㎡以上である。

[堆積土] 5層に分層した。図中6層はSI23竪穴住居跡の掘方である。1層と3層境に礫が集中して

出土した。

〔炉形態〕石囲部の燃焼部に接して石組み前庭部を伴う複式炉である。

〔柱穴〕7個確認した。うち、六角形に配置されるP1～6が主柱穴と判断した。

〔遺物〕土器出土総重量8,675g。大木10式を主体とする深鉢、壺が出土している。石器は磨製石斧2点、敲磨器類8点、垂飾1点が出土している。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI25 竪穴住居跡（第26図、写真図版34）

〔位置・検出状況〕調査区南西側西部6c・6d・7c・7dグリッド、Ⅲ（9）層上面で確認した。開田時の削平により床面以外は消失しており、検出段階では炉の焼土が露出していた。柱穴の確認により住居と判断した。

〔重複関係〕なし。

〔長軸方向〕N-61°-W

〔平面形・規模〕壁は全て消失しているため正確な平面形、規模は不明。柱穴と住居掘り方から、推定で開口部4.2×3.7mである。

〔壁・床面〕壁は消失しており、立ち上がりは不明である。

〔堆積土〕堆積土は確認できなかった。掘方埋土は炭化物を含む。

〔炉形態〕地床炉である。

〔柱穴〕検出したP1～5が主柱穴を構成すると見られる。

〔遺物〕土器出土総重量458g。大木9式を主体とする深鉢が出土した。石器は敲磨器類2点が出土した。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI26 竪穴住居跡（第26図、写真図版35）

〔位置・検出状況〕調査区南西側東部（6g・6h・7g・7h）グリッド、Ⅳ（11）層上面で確認した。当初、プランは全く確認できなかったが、土層ベルトを設定し面的に掘り下げた結果、石囲炉を確認したため住居と判断した。

〔重複関係〕SI24に切られる。

〔長軸方向〕不明

〔平面形・規模〕本遺構は検出された炉と柱穴配置、壁溝からの推定であり、平面形・規模ともに不明である。

〔壁・床面〕検出された柱穴と炉の配置からの推定範囲となった。よって床面積も不明である。

〔堆積土〕当初は5層に分層したが、住居範囲が広がると判断したため、正確には不明である。A-A'断面の5層は本来の壁をとらえていると想定されるが、B-B'断面は南北ともに広がる。

〔炉形態〕半円形の南東に石囲を持つ炉と判断した。

〔柱穴〕7個確認した。その内、配置からP1～5が主柱穴であると判断した。

〔遺物〕土器出土総重量1,109g。縄文時代中期後葉の深鉢が出土した。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI27 竪穴住居跡（第27図、写真図版36）

〔位置・検出状況〕調査区北西側北端2f・3fグリッド、Ⅲ（8）層上面調査区境で確認した。南東側

は開田時の削平により消失している。

[重複関係] SI20に切られる。

[長軸方向] 不明である。

[平面形・規模] 南東側が消失していること、北側は調査区外にのびていることから本来の規模は確認できない。開口部5.3m以上の規模を持つ。深さ30cmである。

[壁・床面] 西側の立ち上がりのみの確認となるが、壁立ち上がりは崩落により外傾する。床面は検出面と同様のⅢ(8)層中でTo-Cuテフラ中に構築されている。

[堆積土] 4層に分層した。1～4層とも炭化物とTo-Cuブロックが混入する。

[炉形態] 掘り込みに石組みを伴う石囲炉である。炉内から焼成面は検出されなかった。

[柱穴] 確認できなかった。

[遺物] なし。

[時期] 縄文時代中期

SI28 竪穴住居跡 (第27・28図、写真図版37・38)

[位置・検出状況] 調査区中央北部2g・2h・3g・3hグリッド、Ⅲ(8)(9)層上面で確認した。南側は開田時の削平により消失している。

[重複関係] SI37に切られる。

[長軸方向] N-40°-W

[平面形・規模] 円形気味である。開口部4.8×3.8m、深さ25cmである。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落により外傾する。床は階段状に炉の周辺が方形気味に掘り込まれ、1段低くなっている所謂、ベッド状遺構を呈する。北側が調査区外にのびており、また南側が消失しているため正確には不明だが床面積(27.7)㎡と推定される。

[堆積土] 9層に分層した。1～4層、7・9層に炭化物が混入する。To-Cuブロックが全層に混入する。

[炉形態] 石組み部は斜位の土器埋設部、石囲燃焼部、石囲を伴う掘り込み前庭部からなる複式炉である。住居の規模に対して炉は小規模である。また、土器内部に現地性焼土が確認される。

[柱穴] 4個確認した。配置から4基とも主柱穴であると判断した。位置関係から炉の北東側にも柱穴があった可能性がある。

[遺物] 土器出土総重量13,034g。大木9・10式を主体とする深鉢が出土している。前期前葉の土器も出土している。石器は石鏃1点、剥片6点(うち使用痕有1)が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI29 竪穴住居跡 (第28図、写真図版39)

[位置・検出状況] 調査区中央北端3i・3j・3kグリッド、Ⅲ(8)(9)層上面調査区境で確認した。当初、土坑と認識していたが、精査中に埋土から多量の礫が出土し、再検討したところ複式炉であると判断したため、住居跡とした。

[重複関係] SI38を切り、SI30・33に切られる。

[長軸方向] N-5°-W

[平面形・規模] 多角形と想定される。南東側が消失しているため正確な平面規模は不明である。柱穴と壁溝の配置から、開口部7.6m以上、深さ35cmと推定される。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落により、大きく外傾する。南側は開田時の削平によりⅢ(8)層

To-Cu が消失し、Ⅲ（9）層に到達している。南東部の壁立ち上がりが消滅しているため、正確な面積は不明だが、柱穴配置と壁溝から床面積（16.9）㎡と推定される。

【堆積土】SI30と合わせて7層に分層した。1層に礫を多量に含み、2～7層には炭化物が混入する。基本層序Ⅲ（8）層由来土が全体に広がり、5層には炉燃焼部由来の焼土塊が混入する。

【炉形態】石組み部2の複式炉であると推定されるが、当初、土坑と判断し東側一部構築材を破壊してしまった。炉内に燃焼部は確認できなかった。

【柱穴】7個確認した。配置からP1～4を主柱穴と判断した。

【遺物】土器出土総重量197g。縄文時代中期後葉の深鉢が出土している。石器は剥片1点、敲磨器類2点が出土した。

【時期】縄文時代中期後葉

SI30 竪穴住居跡（第28図、写真図版39）

【位置・検出状況】調査区中央北端3グリッド、Ⅲ（8）層上面調査区境で確認した。SI29 精査中、調査区北側に焼土を確認し、SI30 竪穴住居内複式炉から不自然にのびる掘り込みと柱穴を確認したことから重複する住居と判断した。

【重複関係】SK05に切られ、SI29を切る。

【長軸方向】不明

【平面形・規模】開田時の削平により、床面が露出しているため開口部（4.4）×（1.6）m、深さ32cmである。

【壁・床面】壁立ち上がりは消失しているため断面のみでの確認となるが、崩落により緩やかに外傾する。

【堆積土】2層に分層した。炭化物がわずかに混入する。

【炉形態】炉と判断した焼土は調査区境にかかり、全体を把握することはできなかった。しかし、平面と断面に材石等構築材は確認できなかったため、地床炉と判断した。

【柱穴】4個確認した。P1～4が主柱穴であると判断した。

【遺物】遺物の出土は床面レベルが同一であることから、SI29 竪穴住居跡として取り上げたものが含まれる。また、柱穴や炉以外からの出土遺物はSI30 竪穴住居跡からの出土であると断定できない。

【時期】重複するSI29 竪穴住居跡と遺跡内の検出遺構の時期、遺構の形態から縄文時代中期後葉とした。

SI31 竪穴住居跡（第29図、写真図版40）

【位置・検出状況】調査区北西側東部（3e・3f・3g・4e・4f・4g）グリッド、SI20 竪穴住居跡床面で不明瞭なプランを検出し、ベルトの設定を行い掘削したところ、炉石が検出されたため住居跡と判断した。開田時の削平により上部は消失している。

【重複関係】SI03・04・20 竪穴住居跡に切られる。

【長軸方向】不明

【平面形・規模】円形を呈する。

【壁・床面】壁立ち上がりは消失しているため不明だが、炉周辺は掘り込みがされ、一段低く床面が設けられている。炉周辺の壁立ち上がりは崩落し、外傾する。SI03 竪穴住居跡に重複するため、正確な面積は不明である。

【堆積土】単層である。わずかに炭化物が混入する。

【炉形態】方形の石囲炉である。

〔柱穴〕4個確認したが、重複が激しいため、他遺構の柱穴の可能性も想定される。炉と柱穴の位置関係からSI31 竪穴住居跡に属する可能性が高いと判断したが断定はできない。

〔遺物〕土器出土総重量191g。縄文時代中期後葉の深鉢が出土した。石器は敲磨器類4点が出土している。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI32 竪穴住居跡（第29図、写真図版3）

〔位置・検出状況〕調査区中央北側4iグリッド、Ⅲ（9）層、Ⅳ（10）上面で確認した。当初、明確なプランが検出できなかったため、ベルトを設定し掘削を行った。炉石を確認したことから住居跡と判断した。

〔重複関係〕SI02 竪穴住居跡を切る。

〔長軸方向〕不明〔平面形・規模〕円形気味の隅丸

方形である。開口部23×2.1m、深さ13m。

〔壁・床面〕壁立ち上がりは崩落により緩やかに外傾する。床面はⅣ（10）礫層中に到達しており、本来は貼り床が敷かれていたと想定されるが、精査では確認できなかった。

〔堆積土〕2層に分層した。埋土には炭化物和礫が多く混入している。

〔炉形態〕当初、SI02 竪穴住居跡の炉と同一の複式炉の一部であると推測していたが、石囲い部内に燃焼部を確認したこと、SI02 竪穴住居跡の燃焼部を切り、構築材を破壊していることから、SI32 竪穴住居跡単独の石囲炉であると判断した。

〔柱穴〕不明

〔遺物〕なし

〔時期〕縄文時代中期

SI33 竪穴住居跡（第30図、写真図版41）

〔位置・検出状況〕調査区東側北西部3i・3j・4i・4jグリッド、Ⅲ（8）（9）層上面、SI01 竪穴住居跡床面で確認した。SI01 竪穴住居跡完掘後、北東部に掘り残しのように暗褐色土のプランを確認し、再検討を行ったところ、床面から後に石囲炉と判断した炉石が一部不自然に露出しており、ベルトを設定して掘削したところ、床面と炉跡を検出したため、住居跡とした。

〔重複関係〕SI01 竪穴住居跡に切られる。

〔長軸方向〕N-38°-W

〔平面形・規模〕円形を呈する。南側はSI01 竪穴住居跡により消失している。開口部2.8×2.7m、深さ13cmである。

〔壁・床面〕壁立ち上がりは崩落により外傾する。床面積5.3㎡である。

〔堆積土〕2層に分層した。いずれも炭化物和焼土塊を含む。

〔炉形態〕南西部は炉石が一部消失しているが、他方3面の配石から石囲炉と判断した。炉内燃焼部上面には炭化物層が存在し、約3cmの厚さで堆積していた。

〔柱穴〕SI01 竪穴住居跡と重複するため、SI33 竪穴住居跡に属する本来の柱穴の断定は困難だが、重複関係からSI01 竪穴住居跡P4に切られる1個は確定であり、これをP1とした。他の柱穴は検出できなかった。

〔遺物〕土器出土総重量696g。縄文時代中期後葉の深鉢が出土している。

【時期】縄文時代中期後葉

SI34 竪穴住居跡（第30図、写真図版42）

【位置・検出状況】調査区東側東部20・30グリッド、Ⅲ（8）（9）層上面で確認した。西側は開田時の削平によって、北側は試掘トレンチにより消失している。プランが不明瞭であったため、トレンチ壁での断面確認により住居跡と判断した。

【重複関係】なし

【長軸方向】N - 21° - W

【平面形・規模】開口部28 × (2.2) m、深さ12 cmである。

【壁・床面】壁立ち上がりは崩落により外傾する。消失により正確な床面は不明だが、炉と柱穴、住居掘方の位置関係から破線のように推定した。

【堆積土】掘方埋土を含め3層に分層した。1層には小礫が混入し、2・3層はTo-Cu火山灰が混入する。

【炉形態】石囲部下部にTo-Cu火山灰による貼り床が敷かれた石囲炉と判断した。燃焼部は検出されなかったが、炉内部1層上面からは深鉢(第46図218)が出土している。2層は掘り方裏込め土である。

【柱穴】2個確認したがいずれも掘り込みが浅く、住居を支えるには困難である。

【遺物】土器出土総重量1,395 g。縄文時代中期後葉の深鉢が出土している。

【時期】縄文時代中期後葉

SI35 竪穴住居跡（第30図、写真図版43）

【位置・検出状況】調査区北東側北部3mグリッド、Ⅲ（9）層上面、試掘トレンチ断面で確認した。試掘トレンチにより東側は消失しているが、断面に焼土を確認し掘り下げたところ住居跡と判断した。また、南側は開田時の削平により消失している。

【重複関係】なし

【長軸方向】N - 24° - W

【平面形・規模】消失により正確な規模は不明だが、残存状況から開口部(2.8) × (1.4) m、深さ35 cmとされる。

【壁・床面】壁立ち上がりは外形する。北西部の残存状況から南側は推定である。

【堆積土】単層である。混入物は不明である。

【炉形態】平石で構成された方形の石囲炉である。3層に分層した。1層は燃焼面、2層は埋戻し埋土、3層は掘り方裏込め土である。

【柱穴】不明

【遺物】土器出土総重量614 g。大木9式を含む縄文時代中期後葉の深鉢が出土している。石器は磨器類2点が出土した。

【時期】縄文時代中期後葉

SI36 竪穴住居跡（第31図、写真図版44）

【位置・検出状況】調査区中央北端部3h・3iグリッド、Ⅲ（8）層上面で確認した。当初、土坑として掘削していたが、のちに検出された柱穴と溝状の掘り方から複式炉であった可能性が濃厚になり、住居跡と判断した。上部は掘削により消失している。

【重複関係】SI28 竪穴住居跡に切られる。また、SI38 竪穴住居跡とは床面レベルが同一の為、新旧不

明である。

〔長軸方向〕N - 79° - W

〔平面形・規模〕上部が完全に消失しているため不明である。

〔壁・床面〕壁立ち上がり、床面積ともに消失により不明。

〔堆積土〕住居内堆積土は不明だが壁溝を4層に分層した。1～4層にかけて炭化物とTo-Cu火山灰を確認した。2～4層には焼土塊が混入する。

〔炉形態〕掘り込み前庭部、燃焼部の複式炉である。前庭部東側にわずかに変色した土を確認したが被熱が弱かったため、当初燃焼部と認識できなかった。平面記録はされていない。

〔柱穴〕SI38 堅穴住居跡と重複している為、SI36 堅穴住居跡に属する正確な柱穴は不明だが15個確認した。

〔遺物〕土器出土総重量 88 g。

〔時期〕縄文時代中期

SI37 堅穴住居跡 (第31図、写真図版45)

〔位置・検出状況〕調査区中央北端部 2g・2h・3g・3h グリッド、Ⅲ(7)層上面とSI28 堅穴住居跡床面、調査区域で検出した。SI28 堅穴住居跡踏査中、住居内北西部に暗褐色土のプランを確認した。当初は、平面でプランを確認できず、南北にベルトを設定し掘削したところ、炉と土器の出土、調査区域断面を再検討してⅢ(7)層から掘り込みを確認したため住居跡と判断した。

〔重複関係〕SI28 堅穴住居跡を切る。

〔長軸方向〕N - 67° - W

〔平面形・規模〕平面形は円形を呈する。調査区域での検出の為、全体を把握することはできないが開口部 4.4 × (1.6) m、深さ 75 cm である。

〔壁・床面〕壁立ち上がりは崩落により外傾する。

〔堆積土〕5層に分層した。1～5層に炭化物が混入し、5層は焼土塊を含む。3～5層にかけ、土器が多量に出土している。

〔炉形態〕調査区域に方形を想定させる平石で構成された石囲炉が検出された。炉内に燃焼部を確認した。

〔柱穴〕不明

〔遺物〕土器出土総重量 3,328 g。大木9式、縄文時代中期後葉の壺、深鉢が床面から出土している。このうち、把手付壺形土器(第47図218)は石囲炉の南側からは完形で出土した。

〔時期〕縄文時代中期後葉

SI38 堅穴住居跡 (第31図、写真図版46)

〔位置・検出状況〕調査区中央北端部 3i グリッド、Ⅲ(8)層上面、試掘トレンチ断面で確認した。

〔重複関係〕SI36 堅穴住居跡と重複する。上部が消失していること、床面レベルがSI36 堅穴住居跡と同一であることから新旧関係は不明。

〔長軸方向〕N - 8° - W

〔平面形・規模〕消失により正確な規模は不明である。開口部 (3.4) × (3.0) m である。

〔壁・床面〕壁面は消失により不明である。床面は柱穴配置から推定となるため、正確には不明である。

〔堆積土〕上部消失の為、確認できなかった。

〔炉形態〕入れ子状に土器が埋設されていた。燃焼部は確認できなかったが、柱穴の配置から埋設土

器炉と判断した。北側が試掘トレンチにより消失している。大半は消失、破壊されているが土器を囲むように石が設置されていた痕跡を確認した。

[遺物] 土器出土総重量 2,112 g。大木9式を主体とする深鉢、壺が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

(2) 溝 跡

SD01 溝跡 (第 32 図、写真図版 47)

[位置・検出状況] 調査区西側 6b・6c・6d グリッド、Ⅲ(9)層上面で確認した。

[重複関係] SI14・15・18 竪穴住居跡を切る。

[平面形・規模] 風倒木により一部消失している。北東から南西に 4.5 m、そこから南東側に 8.5 m のびる。

[堆積土] 単層である。炭化物、焼土がわずかに混入する。

[遺物] 出土遺物なし。

[時期] 不明

(3) 焼 土 遺 構

SN01 焼土遺構 (第 32 図、写真図版 47)

[位置・検出状況] 調査区西側 4i グリッド、Ⅲ(9)層上面で確認した。検出時点で焼土が露出していた。

[重複関係] なし

[平面形・規模] 不整楕円形で長軸 0.65 × 短軸 0.56 m である。焼土の厚さは 5 cm である。

[遺物] なし

[時期] 不明

(4) 土 坑 跡

SK04 土坑 (第 32 図、写真図版 47)

[位置・検出状況] 調査区中央部北側 3i 個グリッド、Ⅲ(8)(9)層上面で確認した。

[重複関係] なし

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、長軸方向 1.1 × 1.0 m、深さ 20 cm である。

[堆積土] 2層に分層した。礫の出土が著しい。

[遺物] なし

[時期] 周辺に柱穴は確認できなかったが、礫の出土状況と周辺遺構から、複式炉であった可能性が高い。そのため、縄文時代中期と想定される。

SK05 土坑 (第 32 図、写真図版 47)

[位置・検出状況] 調査区中央部北側 3j・3k グリッド、Ⅲ(8)層上面調査区境で確認した。

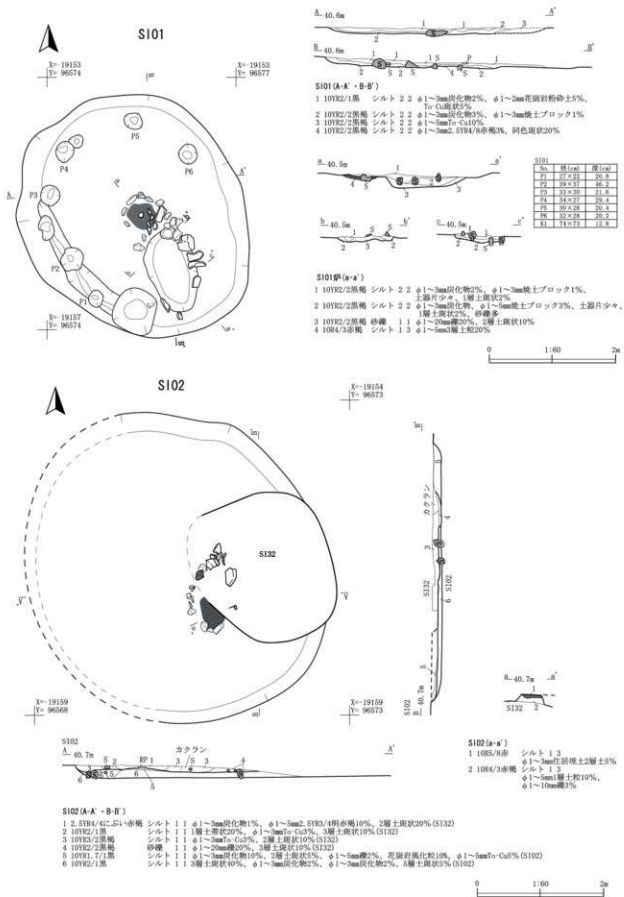
[重複関係] SI29 竪穴住居跡と重複する。上部は開田時の削平により消失している。

[平面形・規模] 不整楕円形である。長軸 1.1 × (0.7) m、深さ 25 cm である。

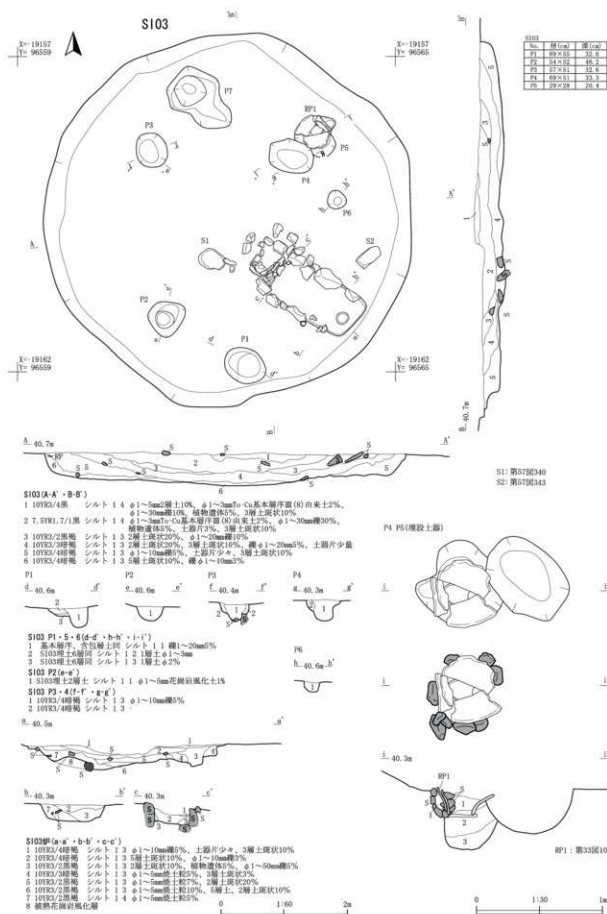
[堆積土] 4層に分層した。混入物に焼土、炭化物は確認できなかった。

[遺物] 土器出土総重量 257 g。大木8b式の略完形深鉢(第49図226・227)、中期後葉の鉢(第49図228)が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

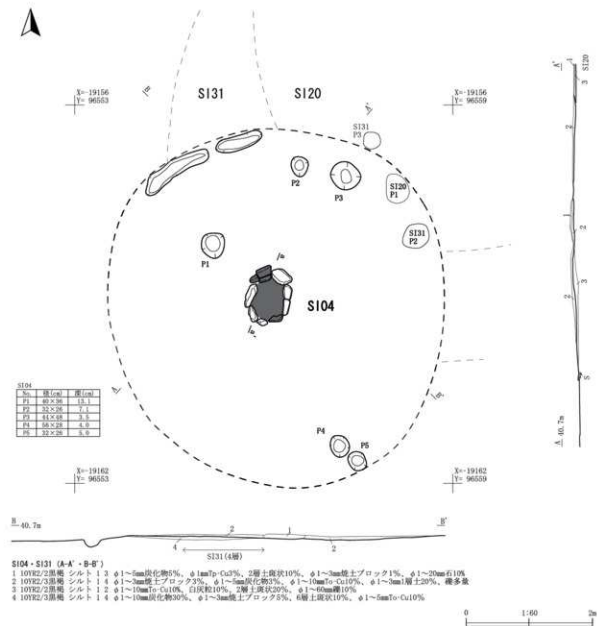


第8図 S101・02・32 竪穴住居跡



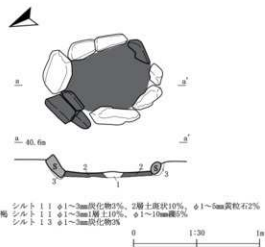
第9図 S103 竪穴住居跡

2 遺構



S104・S131 (A-A'・B-B')

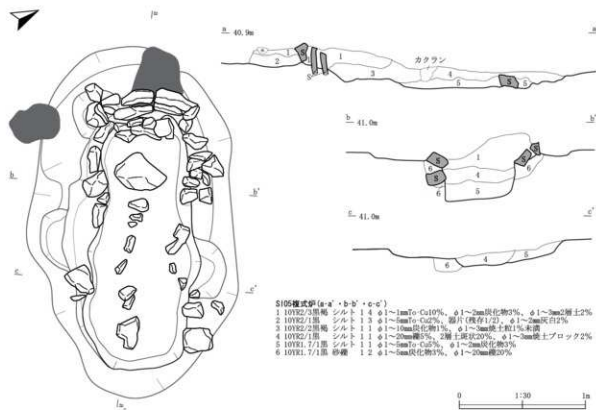
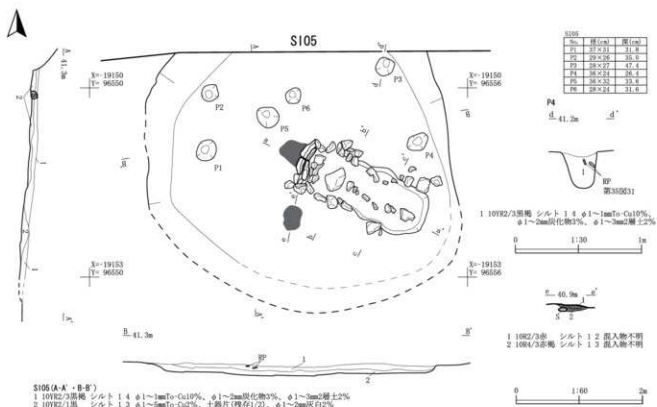
- 1 10YR2/2黒褐色 シルト 1.3 φ1~5mm炭化物3%, φ1mmTp-Cu3%, 2層土炭灰10%, φ1~3mm燧土ブロック1%, φ1~20mm石10%
- 2 10YR2/3黒褐色 シルト 1.4 φ1~3mm燧土ブロック3%, φ1~5mm炭化物13%, φ1~10mmTo-Cu10%, φ1~3mm層土20%, 雑多量
- 3 10YR2/2黒褐色 シルト 1.2 φ1~10mmTo-Cu10%, 白灰粒10%, 2層土炭灰20%, φ1~10mm燧土10%
- 4 10YR2/3黒褐色 シルト 1.4 φ1~10mm炭化物30%, φ1~3mm燧土ブロック3%, 6層土炭灰10%, φ1~5mmTo-Cu10%



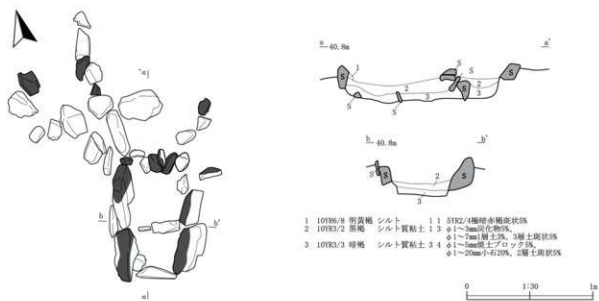
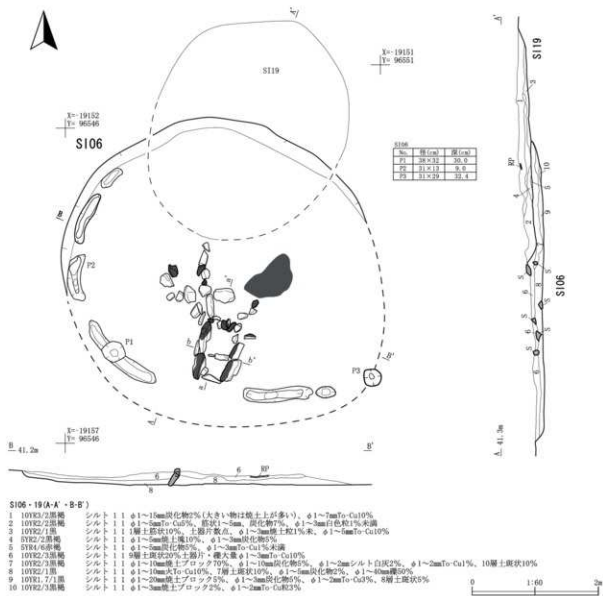
S104石圍炉 (a a')

- 1 10YR2/2黒褐色 シルト 1.1 φ1~3mm炭化物3%, 2層土炭灰10%, φ1~5mm炭粒42%
- 2 2.5YR1/4L赤い赤褐色 シルト 1.1 φ1~3mm層土10%, φ1~10mm燧土5%
- 3 10YR2/2黒褐色 シルト 1.3 φ1~3mm炭化物2%

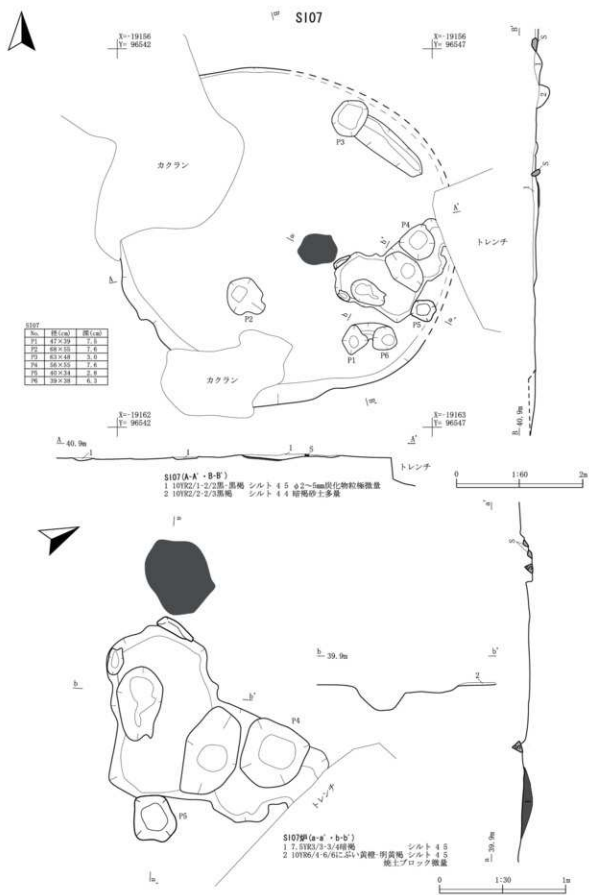
第10図 SIO4 壁穴住居跡



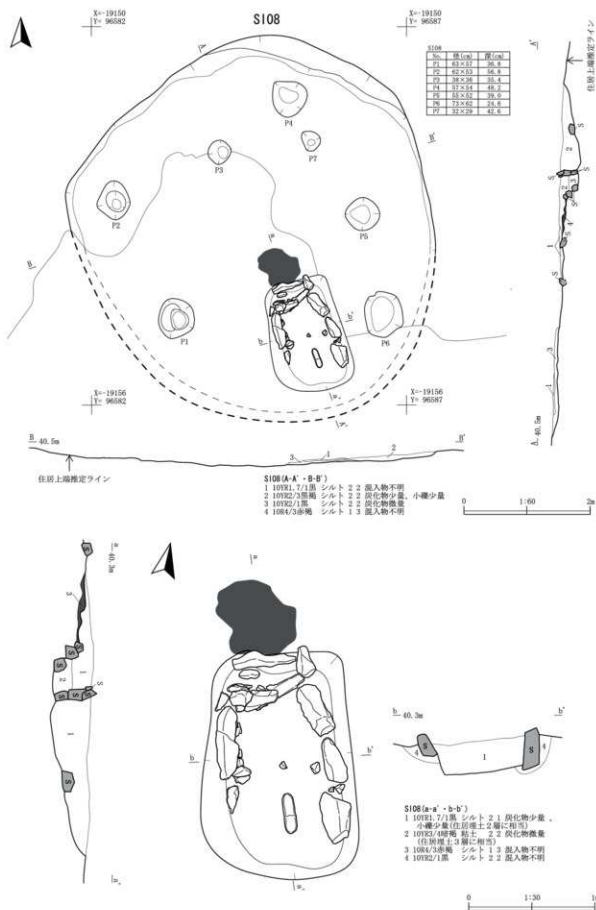
第11図 S105 壁穴住居跡



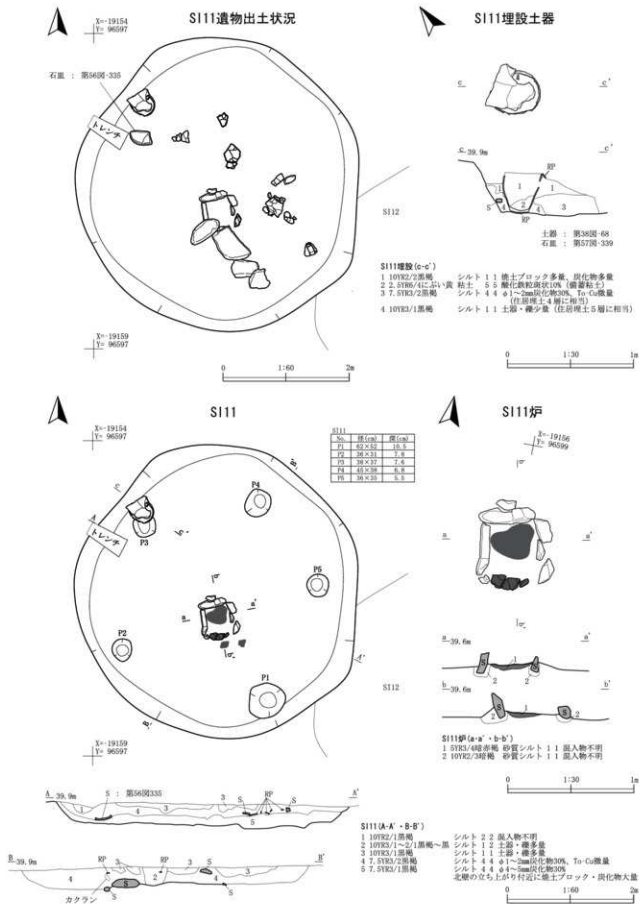
第12図 SIO6・19 壁穴住居跡



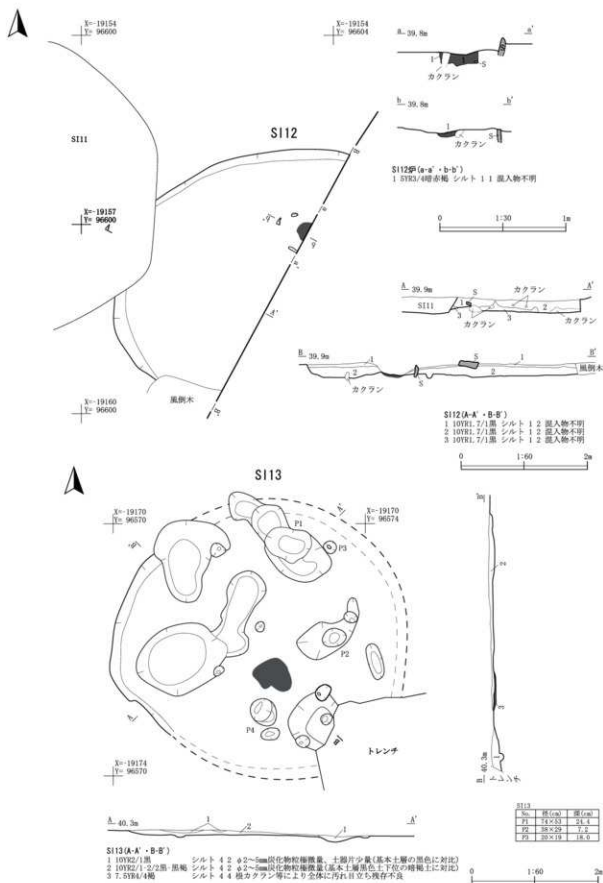
第13図 S107 竪穴住居跡



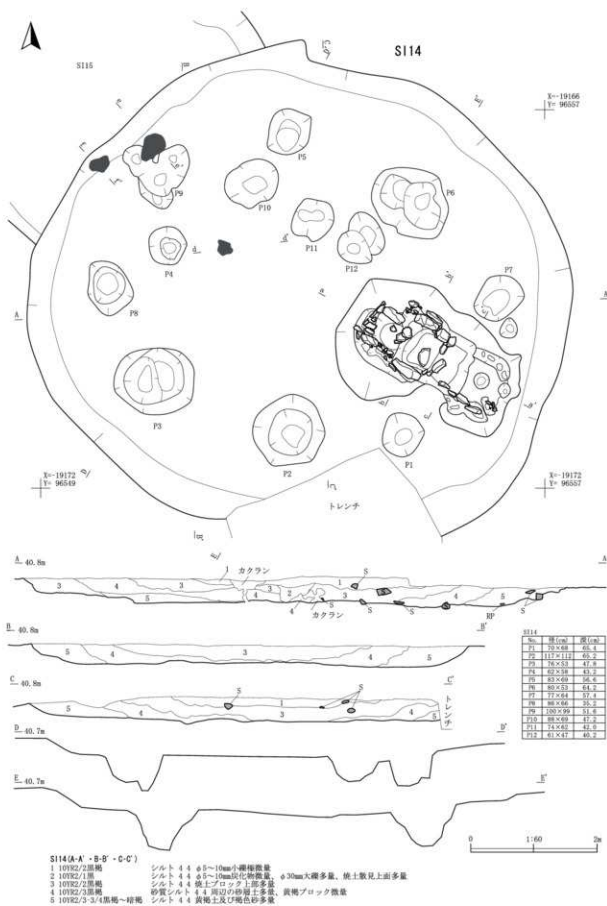
第14図 S108 壁穴住居跡



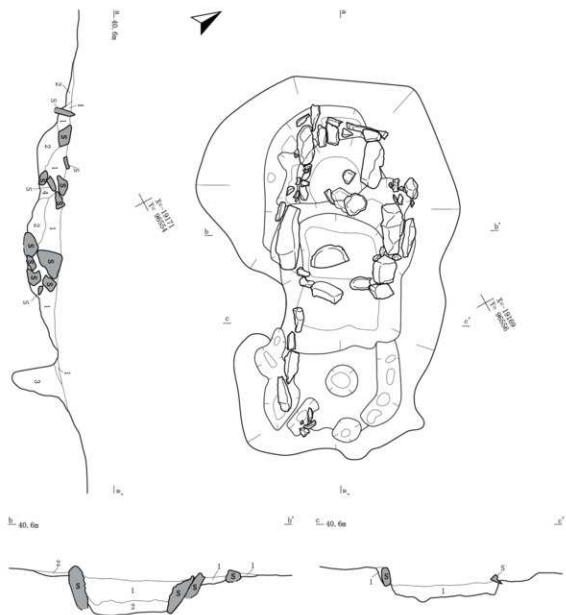
第16図 SI11 壁穴住居跡



第17図 S112・13 竪穴住居跡



第18図 S114 竪穴住居跡(1)



- S114 検出砂 (a-a'・b-b'・c-c')**
- 1 10YR2/2-2/3 黒褐色 シルト S 4 Δ 5mm 炭化物極微量、焼土粒極微量
 - 2 10YR2/2-2/3 黒褐色 シルト S 4 Δ 5mm 炭化物極微量、焼土粒極微量
 - 3 10YR2/2-2/3 黒褐色 シルト S 4 Δ 炭化物プロック状多量
 - 4 10YR2/2-4/4 黒褐色 シルト S 5 Δ 塚山褐色土微量

S114 主軸上焼土



- S114 主軸上焼土 (a-a')**
- 1 10YR3/3 赤褐色 シルト 4 4 炭入物不明
 - 2 5YR4/6 赤褐色 シルト 1 5 炭入物不明
 - 3 10YR3/3 赤褐色 シルト 5 4 炭入物不明

S114 焼土1

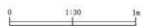


- S114 焼土1 (a-a')**
- 1 7.5YR6/4 黄褐色 シルト 4 4 炭入物不明

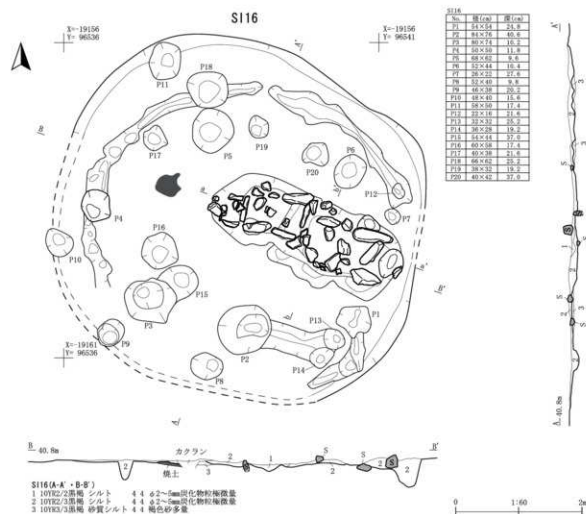
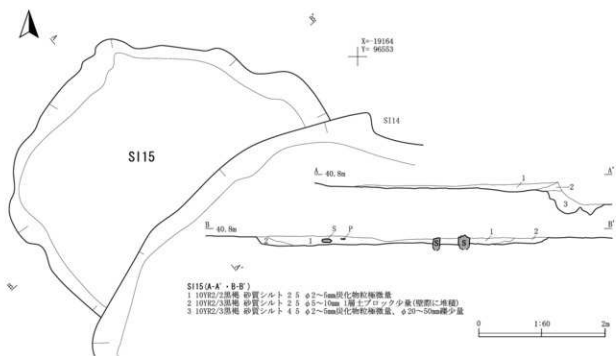
S114 焼土2



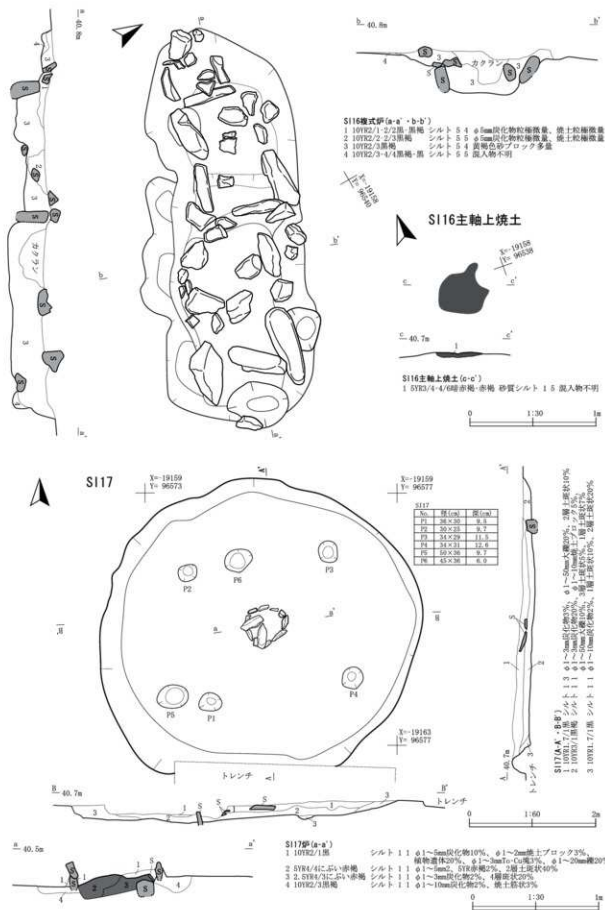
- S114 焼土2 (f-f')**
- 1 7.5YR6/4 黄褐色 シルト 4 4 炭入物不明
 - 2 10YR4/6 赤褐色 シルト 2 4 塚山砂極微量



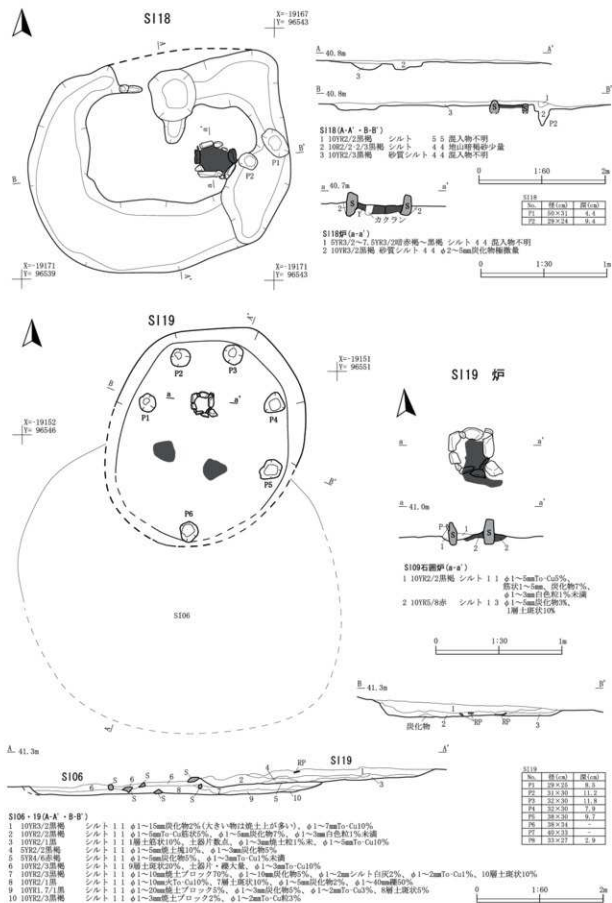
第19図 S114 竪穴住居跡 (2)



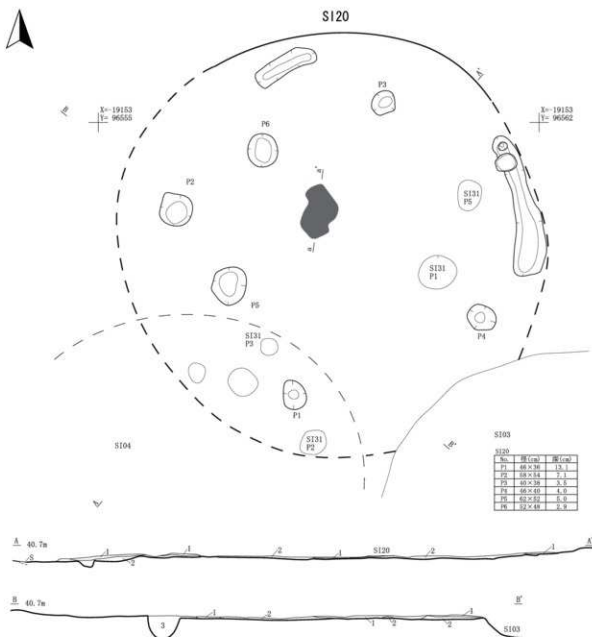
第20図 S115・16 竪穴住居跡(1)



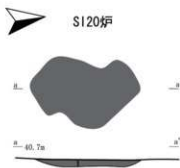
第21図 SI16 竪穴住居跡 (2)・SI17 竪穴住居跡



第22図 S118・19 竪穴住居跡



- S104・20 (A-A')
- 1 10R2/2層 シルト 1.3 ϕ 1~5mm炭化物0%, ϕ 1mmTo-Ca3%, 2層土層状10%, ϕ 1~3mm磁土ブロック1%, ϕ 1~20mm石10%
 - 2 10R2/3層 シルト 1.4 ϕ 1~5mm炭土ブロック0%, ϕ 1~5mm炭化物0%
 - 3 10R2/2層 シルト 1.1 ϕ 1~10mmTo-Ca10%, ϕ 1~3mm石2.2%, 雑多量(土山)



0 1:60 2m

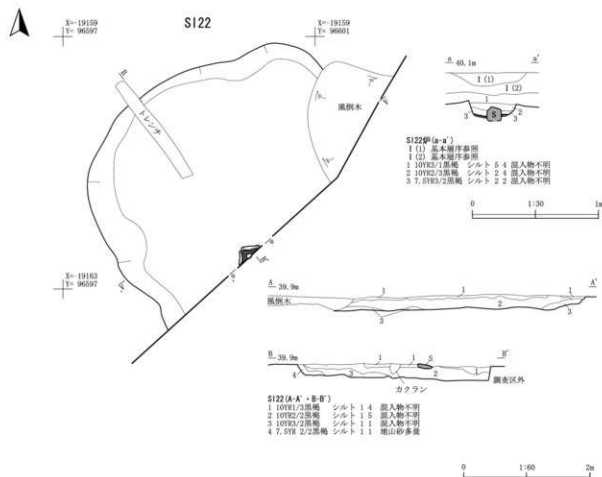
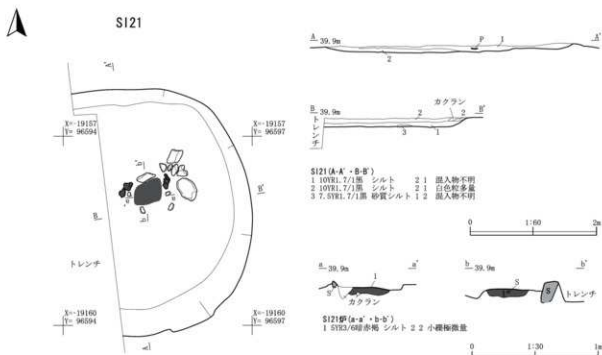
S120P (a-a')

- 1 2. 9R5/8明赤層 シルト 1.1 ϕ 1~10mm炭化物0%

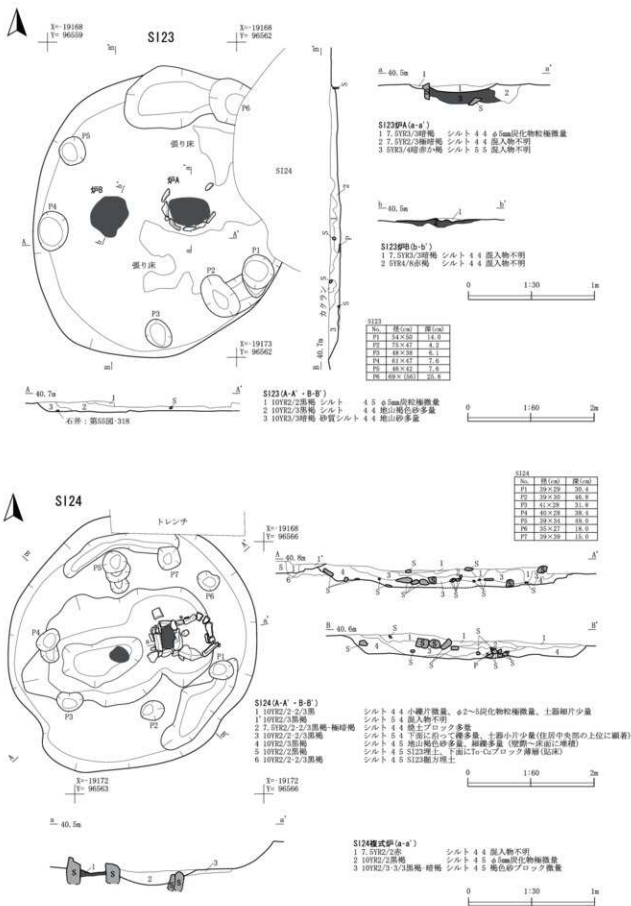
0 1:30 2m



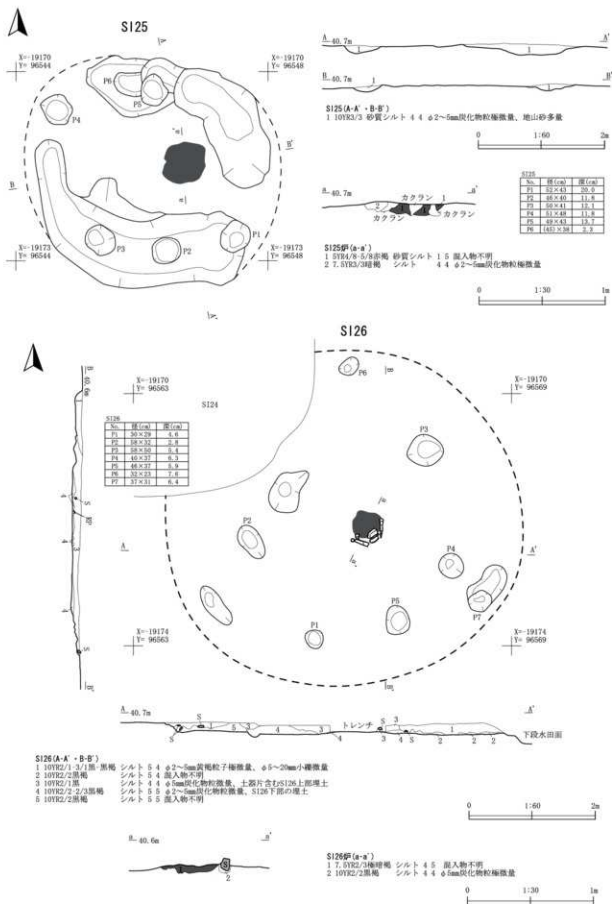
第23図 S120 竪穴住居跡



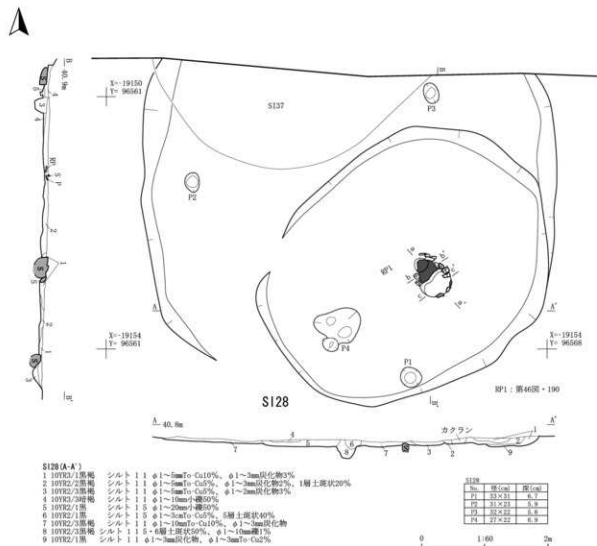
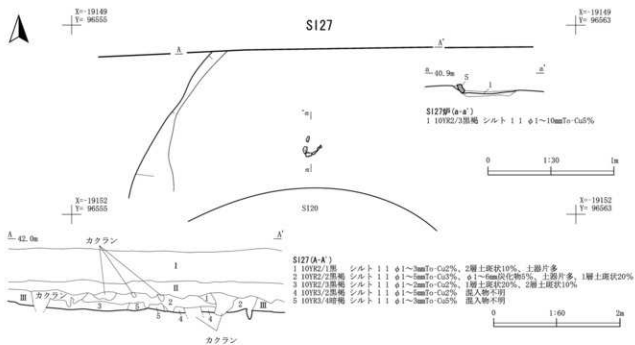
第24図 S121・22 竪穴住居跡



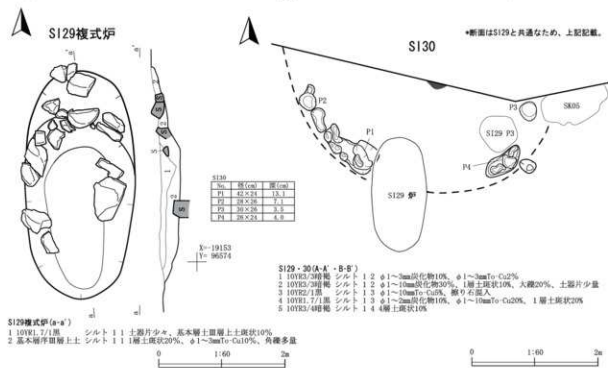
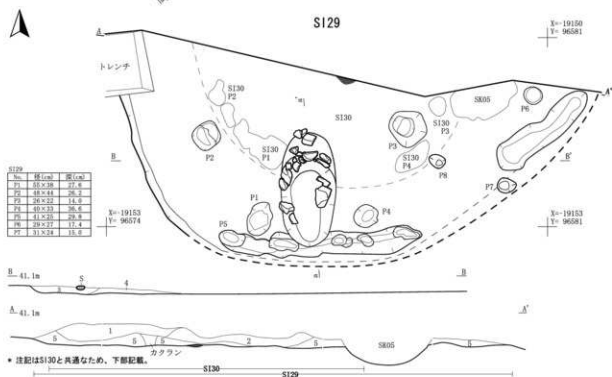
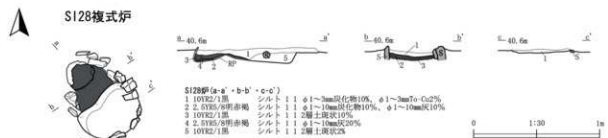
第25図 S123・24 壁穴住居跡



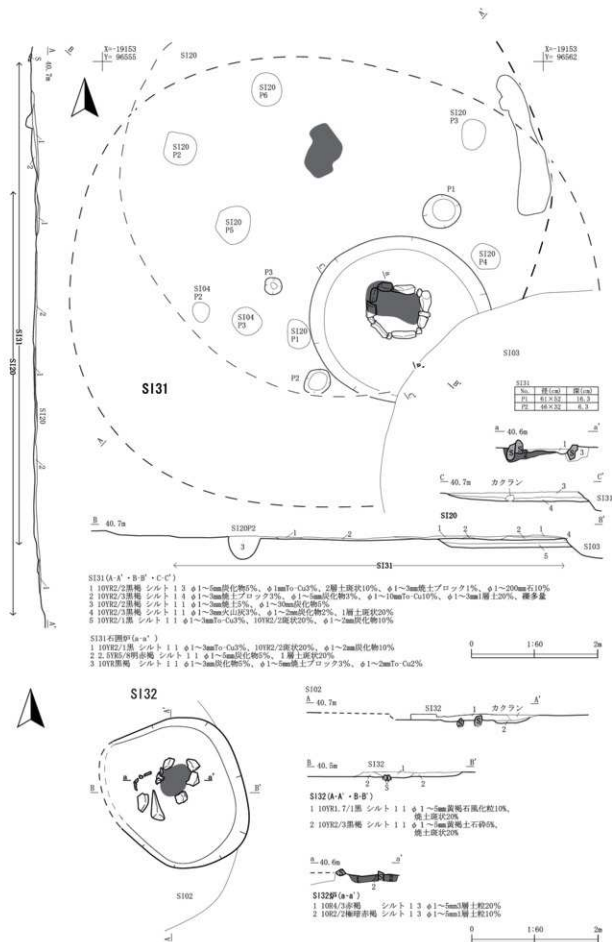
第26図 S125・26 竪穴住居跡



第27図 S127・28 壁穴住居跡 (1)

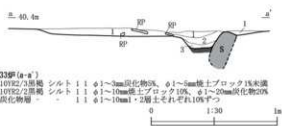
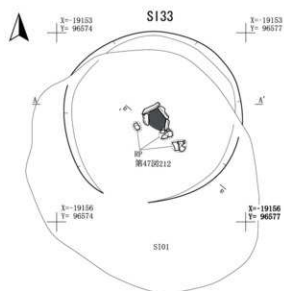


第28図 S128 (2)・29・30 竪穴住居跡



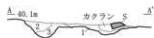
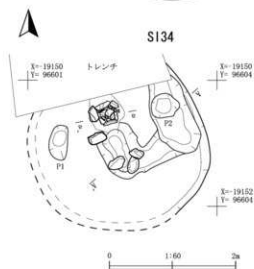
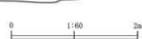
第29図 SI31・32 竪穴住居跡

2 遺構



- S133SP (a-a')**
- 1 10YR2/2黒褐色 シルト 1 1 φ1~5mm炭化物3%, φ1~5mm粘土ブロック1%未満
 - 2 10YR2/2黒褐色 シルト 1 1 φ1~10mm粘土ブロック10%, φ1~20mm炭化物20%
 - 3 炭化物層 - 1 1 φ1~10mm1・2層土それぞれ10%ずつ

*エレベーションのみ

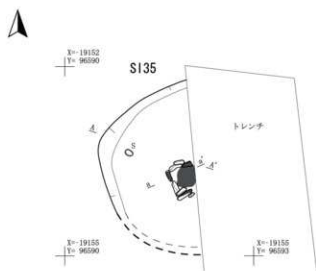


- S134 (A-A')**
- 1 10YR3/2黒褐色 シルト 4 5 全体に小礫片散在
 - 2 10YR3/2黒褐色 シルト 4 4 Te-Cuプロック散在
 - 3 10YR4/4褐色 シルト 1 2 Te-Cuプロック40%

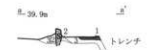
層	厚(m)	深(m)
1	3.2×3.9	4.9
2	4.1×3.9	4.3



- S134SP (a-a')**
- 1 10YR3/2黒褐色 シルト 4 1 炭入物不明
 - 2 10YR3/1黒褐色 シルト 4 4 炭入物不明



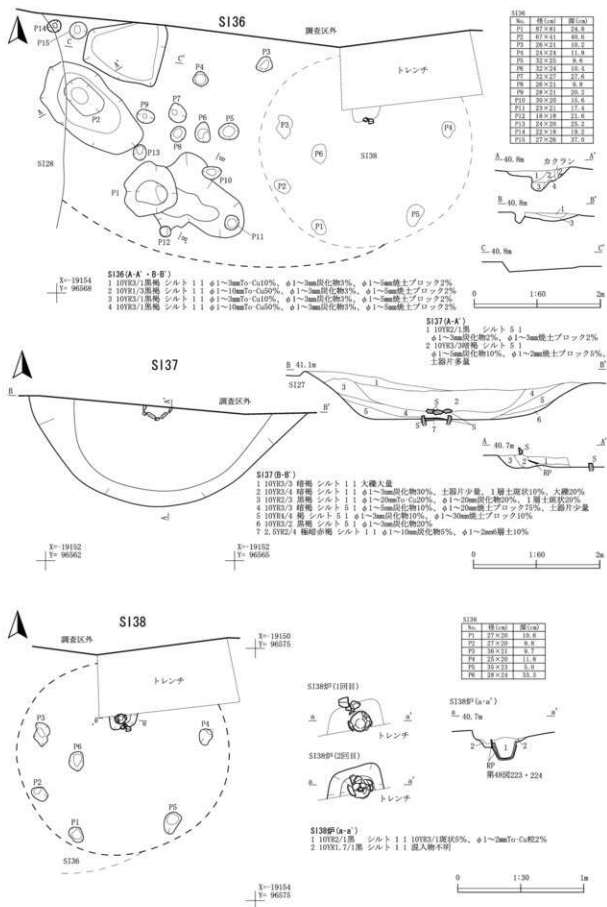
- S135 (A-A')**
- 1 10YR2/2黒褐色 シルト 2 5 炭入物不明



- S135SP (a-a')**
- 1 7.5YR3/3暗褐色 砂質シルト 1 1 炭入物不明
 - 2 10YR3/2黒褐色 砂質シルト 2 2 炭入物不明
 - 3 7.5YR3/2黒褐色 砂質シルト 1 1 炭入物不明

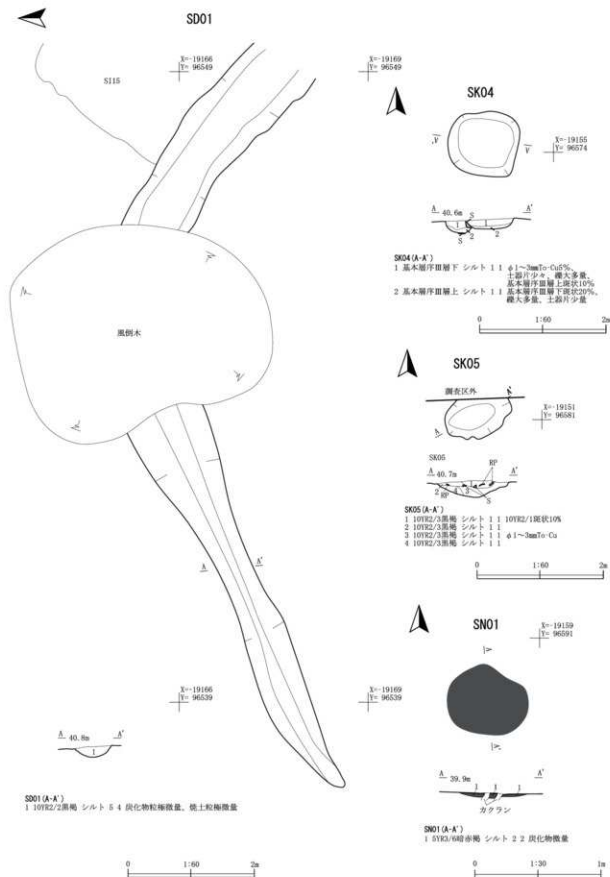


第30図 S133・34・35 竪穴住居跡



第31図 S136・37・38 竪穴住居跡

2 遺構



第32図 SK04・05土坑・SD01溝跡・SN01焼土

第2表 遺構観察表

遺構名	国号	実尺	位置・検出	遺構関係	長機方向	平面形状	母体形状 (cm)	開口部 (cm)	厚さ	形状部	付属施設	出土遺物	検出位置	時期	備考
S101 彫穴住居跡	第7区	2	3・3・46・4	S133 支柱礎	-	円	7.9	10.0 × 3.3	10	石製中	土間	大木9号	4019	縄文時代中期後葉	
S102 彫穴住居跡	第7区	3	26・23・46・1	S132 支柱礎	N-22-W	円	10.5(4)	5.1 × 4.0(5)	25	石製中	土間	大木9号	1960	縄文時代中期後葉	
S103 彫穴住居跡	第8区	4・5	47・48・34・34	S131 支柱礎	N-51-W	円	20.5	5.9 × 5.6	50	石製中	土間	大木9号	12536	縄文時代中期後葉	崖面跡部3・遺構跡部2・多面体板石・多面体板石・2行石・大木9号10号
S104 彫穴住居跡	第9区	6	166・44・64・50	S130 支柱礎	N-48-W	円	-	6.0(4) × 5.2(3)	30	石製中	土間	大木9号	1141	縄文時代中期後葉	
S105 彫穴住居跡	第10区	7・8	20・21・36・20	S129 支柱礎	N-05-W	楕円	43.3(9)	3.5 × 4.0(5)	20	石製中	土間	大木9号・10号	2029	縄文時代中期後葉	
S106 彫穴住居跡	第10区	9・10	34・36・44・46	S128 支柱礎	N-16-E	円	41.7(6)	6.0(4) × 4.6(6)	36	石製中	土間	大木9号	34169	縄文時代中期後葉	多面体板石・2行石・遺構跡部5, 大木9号, 10号
S107 彫穴住居跡	第12区	11	164・164・54・54	S127 支柱礎	N-07-W	円	49.0(8)	3.5 × 6.3(9)	30	石製中	土間	大木9号	1666	縄文時代中期後葉	
S108 彫穴住居跡	第13区	12・13	32・28・32・48・47	S126 支柱礎	N-18-W	楕円	24.0	6.1(4) × 5.4(5)	25	石製中	土間	大木9号	1350	縄文時代中期後葉	
S109 彫穴住居跡	第14区	14	86・86	S125 支柱礎	N-31-W	円	-	6.2(4) × 4.4(3)	13	石製中	土間	大木10号	1210	縄文時代中期後葉	
S110 彫穴住居跡	第14区	15	56・56・67・66	S124 支柱礎	N-85-E	円	41.2(6)	4.5(4) × 4.0(3)	12	石製中	土間	大木10号	287	縄文時代中期後葉	
S111 彫穴住居跡	第15区	16・17	30・30・46・46	S123 支柱礎	N-03-W	円	13.2	4.7 × 4.5	28	石製中	土間	大木9号	2849	縄文時代中期後葉	
S112 彫穴住居跡	第16区	18	66	S111 支柱礎	N-63-W	楕円	7.9	4.2 × 6.2(3)	20	石製中	土間	大木9号	1194	縄文時代中期後葉	
S113 彫穴住居跡	第16区	19	66・71	S110 支柱礎	N-46-W	円	13.1(4)	4.8(4) × 4.4(4)	30	石製中	土間	大木9号	965	縄文時代中期後葉	
S114 彫穴住居跡	第17・18区	20・21	46・67・74	S115 支柱礎	N-60-W	円	25.3	6.6 × 7.4	50	石製中	土間	大木9号	1335	縄文時代中期後葉	
S115 彫穴住居跡	第19区	22	39・56・64・66	S114 支柱礎	-	円	6.8	4.8 × 6.0(4)	15	石製中	土間	大木9号	3135	縄文時代中期後葉	
S116 彫穴住居跡	第20区	23	44・46・70・64	S113 支柱礎	N-61-W	円	28.3(4)	4.1 × 6.0(3)	13	石製中	土間	大木9号	2011	縄文時代中期後葉	
S117 彫穴住居跡	第20区	25	41・41・54	S112 支柱礎	N-11-W	円	15.3	5.2 × 4.9	27	石製中	土間	大木9号	8289	縄文時代中期後葉	
S118 彫穴住居跡	第21区	26	66・66・70・76	S111 支柱礎	N-68-W	円	-	4.2 × 3.4	5	石製中	土間	大木9号	224	縄文時代中期後葉	
S119 彫穴住居跡	第21区	27	34・36	S106 支柱礎	N-10-E	楕円	6.8	6.7(4) × 3.0	25	石製中	土間	大木9号	7881	縄文時代中期後葉	
S120 彫穴住居跡	第22区	28	37・36・44・46	S104 支柱礎	-	楕円?	-	-	15	地盤部	土間	大木9号	3990	縄文時代中期後葉	
S121 彫穴住居跡	第22区	29	46・46・56・56	S103 支柱礎	N-80-W	円	6.0	3.0 × 6.3(6)	14	石製中	土間	大木9号	3967	縄文時代中期後葉	
S122 彫穴住居跡	第23区	30	44・44・50・50	S102 支柱礎	N-07-W	円	6.0	4.8 × 6.0(3)	25	石製中	土間	大木9号	11261	縄文時代中期後葉	
S123 彫穴住居跡	第24区	31・32	66・71・71	S101 支柱礎	N-82-E	楕円	41.2(4)	4.8 × 4.1	17	石製中	土間	大木9号	3029	縄文時代中期後葉	
S124 彫穴住居跡	第24区	33	66・66・76	S123 支柱礎	N-81-E	円	10.3(3)	4.3 × 3.8	40	石製中	土間	大木9号	6670	縄文時代中期後葉	
S125 彫穴住居跡	第25区	34	66・66・76・76	S122 支柱礎	N-61-W	円	-	4.2(3) × 3.7	15	石製中	土間	大木9号	456	縄文時代中期後葉	
S126 彫穴住居跡	第26区	35	66・66・76・76	S121 支柱礎	-	円	-	6.5(4) × 6.5(3)	20	石製中	土間	大木9号	1109	縄文時代中期後葉	
S127 彫穴住居跡	第26区	36	21・21	S120 支柱礎	-	円	-	6.3(4) × 6.2(3)	30	石製中	土間	大木9号	-	縄文時代中期後葉	
S128 彫穴住居跡	第26・27区	37・37	28・28・36・36	S119 支柱礎	N-40-W	円	27.7	4.8 × 3.8	25	石製中	土間	大木9号・10号	13034	縄文時代中期後葉	
S129 彫穴住居跡	第27区	39	33・33・36	S118 支柱礎	N-5-W	楕円	16.8(9)	6.6(4) × 6.0(4)	35	石製中	土間	大木9号	11162	縄文時代中期後葉	
S130 彫穴住居跡	第28区	40	46・46・56・56	S117 支柱礎	-	円	6.0	4.4 × 6.0(4)	20	石製中	土間	大木9号	1147	縄文時代中期後葉	
S131 彫穴住居跡	第28区	41	34・34・44・44	S116 支柱礎	-	円	3.3	2.3 × 2.1	13	石製中	土間	大木9号	191	縄文時代中期後葉	
S132 彫穴住居跡	第29区	42	33・33・41	S115 支柱礎	N-38-W	円	5.3	2.8 × 2.7	13	石製中	土間	大木9号	606	縄文時代中期後葉	
S133 彫穴住居跡	第29区	43	20・20	S114 支柱礎	N-21-W	円	6.6	2.8 × 2.2	12	石製中	土間	大木9号	13061	縄文時代中期後葉	
S134 彫穴住居跡	第29区	44	20・20	S113 支柱礎	N-24-W	円	2.5	6.2(4) × 6.4	15	石製中	土間	大木9号	81	縄文時代中期後葉	
S135 彫穴住居跡	第30区	44	26・26	S112 支柱礎	N-79-W	楕円	-	6.0(4) × 6.8	15	石製中	土間	大木9号	184	縄文時代中期後葉	
S136 彫穴住居跡	第30区	45	28・28・36・36	S111 支柱礎	N-67-W	円	6.2(4)	4.4 × 6.0(4)	25	石製中	土間	大木9号	44	縄文時代中期後葉	
S137 彫穴住居跡	第30区	46	33	S110 支柱礎	N-38-W	円	-	4.0 × 6.0(4)	10	石製中	土間	大木9号	2112	縄文時代中期後葉	
S138 彫穴住居跡	第31区	47	66・66・66	S109 支柱礎	N-66-E	円	-	-	20	石製中	土間	大木9号	-	縄文時代中期後葉	
S139 彫穴住居跡	第32区	47	66・66・66	S108 支柱礎	N-82-W	円	-	6.6 × 6.5	20	石製中	土間	大木9号	-	縄文時代中期後葉	
S140 土上遺構	第32区	47	66	S107 支柱礎	N-83-W	楕円	-	1.1 × 1.0	25	石製中	土間	大木8号	-	縄文時代中期後葉	
S141 土上遺構	第32区	47	66	S106 支柱礎	N-61-E	不規則	-	1.1 × 0.7	25	石製中	土間	大木8号	-	縄文時代中期後葉	
S142 土上遺構	第32区	47	66	S105 支柱礎	-	不規則	-	-	25	石製中	土間	大木8号	-	縄文時代中期後葉	

3 出土遺物

出土遺物は、縄文土器が中コンテナ19箱、内訳は中期後半の大本8b～10式段階のものが主体で、他に縄文早期、前期、後期、晩期の土器がごく少量出土している。石器は中コンテナ14箱程の出土量がある。石鏃等の定型的な剥片石器の量は少なく、河川礫を素材とした敲磨器類が過半数を占める。また磨製石斧が18点含まれる。その他、黒曜石剥片2点、未加工の琥珀原石片9点出土している。

本節では縄文土器、土製品、石器についてそれぞれ遺構内出土遺物、遺構外出土遺物に分けて記載する。個々の特徴等については第3表以下遺物観察表に記載した。

(1) 縄文土器(第33～57図 写真図版48～66)

< S101 住居跡出土土器 >

No1～8を掲載した。No1は弧状沈線を含む無文の口縁部片で口唇内面側が面取りされる。No3は小型薄手の大本9式後半段階破片で、胴部上半が内湾するキャリバー形を呈する。No3 a～cの3片は同一個体だが、全体形状を推定図示するにはやや不足する。No4・5・6は地文のみの深鉢破片。

No7・8は胎土に繊維を含む前期初頭段階に相当する破片。No7は口縁部無文部に単節縄文原体を押し弧状のモチーフを作り出している。No8は非結束羽状縄文を施す小片で、器面の一部が剥落しておりその内部にも縄文施文が観察される。製作時の粘土紐積み上げ毎に縄文回転施文を行っているものと考えられる。

< S102 住居跡出土土器 >

No9の1個体を掲載した。複節RLR縄文を縦位回転する深鉢胴部片である。

< S103 住居跡出土土器 >

第33図No10～第35図No30を掲載した。No10は上半が緩く外反する平縁の深鉢。埋設土器のNo11は上半が大きく外反する深鉢で外面口縁部に横方向のミガキ調整が施される。No12の上半大きく内湾する深鉢は口縁端部が短く屈曲外反する。No13は頸部屈曲部に横長の刺突列点が施される。小型深鉢口縁部のNo14は頸部隆帯に連続した刻目が加えられる。

No15～20は沈線区画内に縄文充填の文様を持つ深鉢破片。大本9式後半段階から大本10式前半段階と考えられる。No21は幅広い隆線上面に縄文が加えられ帯縄文風となっている。No22は頸部に橋状突起を持つ壺口縁部片。

No25～28は地文のみの深鉢口縁部片。No29は小型深鉢の底部破片である。No30は細かい矢羽根状の列点が連続する押し引き沈線が施される破片で、中央の鋸歯文も同一工具を使用している。早期中葉の具段文土器に伴うものと考えられる。

< S105 住居跡出土土器 >

No31～No35を掲載した。No31は中型の深鉢下部欠損個体。推定4単位の緩い波状口縁頂部に刻目を持ち、その下に凹みの凹みと半截竹管先端による刺突列点が施される。胴部文様は沈線区画内縄文充填による横長のS字状モチーフが入り組む。No32は胴部上半が直立に近い地文のみの深鉢。No34は頸部に2段の刺突列が廻り胴部に縦位区画文が施される。

< S106 住居跡出土土器 >

第35図No36～第37図No54を掲載した。No36の小型深鉢はJ字状の無文部が展開する。No37も類似した文様だが無文部が下半で接続するモチーフと見られる。No38は頂部に刻目を持つ波状口縁

の小型深鉢で、円形の凹みと半截竹管によるD字形の刺突列が口縁部に展開する。Na 39は口縁部を欠損する大型深鉢。上半に展開するJ字形の無文部内に楕円形刺突列が巡る。沈線は細く鋭い。Na 40は3単位の波状口縁で頸部に沈線と円形刺突列を持つ。Na 50は上半が外反する大型の略完形深鉢。底面に2枚以上の木葉痕が重複している。Na 54は沈線区画の内部に貝殻腹線疋痕を持つ早期中葉の土器片である。

< SI07 住居跡出土土器 >

Na 55・56の2片を掲載した。両者とも縦長楕円形区画内に充填縄文を施す大木9式深鉢の胴部片である。

< SI08 住居跡出土土器 >

Na 57～Na 63を掲載した。Na 57は地文のみの小型壺型土器。胴部中央がくの字形に張り出す。炉埋土からはNa 58の大木9式土器片が出土している。Na 59・60は口縁部外反する地文のみの深鉢口縁部片。Na 61の内湾する口縁部片は地文を口縁部のみ横位回転する。Na 63は小型深鉢底部で残存部分は無文である。

< SI09 住居跡出土土器 >

Na 64・65の2点を掲載した。Na 64は直立気味の深鉢上半で、口縁部内削ぎで短く外反する。

< SI10 住居跡出土土器 >

Na 66・67の2片を掲載した。Na 66は小径の円形刺突列点文を持つ。

< SI11 住居跡出土土器 >

床面から埋土中、検出面にかけて比較的多数の土器が出土している。第38図Na 68～第40図Na 99までの33点を掲載した。Na 68は略完形の大木9式深鉢で平坦な口縁直下が小さく外反し、胴部には並列する逆J字状の文様が展開する。Na 69は薄手小型の深鉢で内外面に焼け弾けの痕跡が顕著に残る。Na 70～72は波状口縁頂部に隆線による大柄な渦巻文が配置される一群。Na 72は突起によって文様構成に差があるものと考えられる。Na 73は単純な文様構成の破片で平縁の可能性が高い。Na 74の隆線は上面が平坦になり断面形状を呈する。大木8b式段階に比定される。Na 76～78は突起頂部から垂下する隆線以外は胴部に沈線文が展開する。

Na 79～81は沈線による楕円形区画文様を持つ土器片。Na 87は紡錘形の器形と見られる壺胴部～底部破片で、2本平行する隆線を繋ぐ橋状突起を持つ。Na 91は大型の粗製深鉢上半。平縁で器面内外面に焼け弾けの痕跡が残る。Na 96は小型の鉢形土器。Na 99は中型の略完形深鉢で口縁部に補修孔が開けられる。

< SI12 住居跡出土土器 >

第40図Na 100、第41図Na 101の2点を掲載した。Na 100は頸部に立体的な突起が展開する球胴形の深鉢大部破片で、胴部に縦長の区画文が展開する。Na 101は中型の略完形深鉢。口縁直下が小さく外反する。

< SI14 住居跡出土土器 >

Na 102～Na 112を掲載した。Na 102～104は曲線的な文様を持つ外反する口縁部片。Na 111は縄文の上に斜行する平行沈線が加えられる。全体の文様構成は不明で時期も特定できない。Na 112は縄文晩期後葉の台付鉢破片。住居埋土中から出土している。

< SI15 住居跡出土土器 >

Na 113～Na 123の11点を掲載した。Na 114は立体的な隆線による渦巻文が施文された突起部分破片。Na 116・117は縦位楕円形文が並列する。Na 121は小型の鉢胴部で頸部に刺突列点文が施される。

< SI16 住居跡出土土器 >

No 124～No 127の4点を掲載した。いずれも沈線区画に充填縄文文様を持つ破片である。No 127は無文部が盛り上がる隆沈線が用いられる。

< SI17 住居跡出土土器 >

No 128・129の2点を掲載した。No 128は曲線的な無文部からなる文様が施される。

< SI19 住居跡出土土器 >

第42図No 130～第43図No 143を掲載した。No 130は幅広い隆線で縁取られた文様が展開し頸部に刺突列点が巡る。No 131はほぼ完形に復元された深鉢。無文の口縁が急角度で外反する。底面には笹の葉の圧痕が見られる。No 132は大型深鉢上半で、縄文原体末端の回転圧痕が顕著に縦走する。No 133は折り返しにより一定の幅で口縁部に無文部が巡る。No 138は屈曲する壺形土器の肩部破片と判断した。鋭い突起状の隆線を持つ。No 143は口縁部に山形突起を持つ貝殻文土器。沈線と貝殻腹縁圧痕による文様構成で物見台式に比定される。

< SI20 住居跡出土土器 >

No 144～No 151の8点を掲載した。No 144は小型の開く深鉢破片で波状口縁頂部から隆線渦巻文が垂下し間に縦長の楕円形区画文が配置される。No 150は大きく内湾する深鉢上半。平縁で口唇部は角張る。なお、No 151の底部破片と同一個体と判断したが因上復元が困難なため別個に掲載した。

< SI21 住居跡出土土器 >

No 152～No 160の9点11片を掲載した。No 155は頸部が屈曲し2段に内湾する器形の大型深鉢。口縁突起部に配置される大柄な渦巻文中央に貫通孔を持つ。口縁部文様は隆線区画楕円形文の中間に沈線区画が配置される。No 158の小型深鉢体部片は2段の刺突列点文が巡り、下部に縦位沈線文が垂下する。No 160は縄文原体圧痕による波状、菱形の文様が展開する口縁部破片。胎土には繊維を含む前期前葉段階の土器と判断される。

< SI22 住居跡出土土器 >

No 161～No 164の4点を掲載した。隆線、沈線文を持つ中期後半段階の破片である。

< SI23 住居跡出土土器 >

第44図No 165～第45図No 170の6点を掲載した。No 167～169は縦位長楕円形区画文の一部が見える体部破片。No 170は大型の粗製深鉢体部破片である。

< SI24 住居跡出土土器 >

No 171～No 183の13点を掲載した。No 171は器面の摩滅が進み胴部の文様構成が判別しがたいが、隆線文様が展開すると見られる。No 175は橋状突起を持つ壺胴部破片である。No 180は小型で直線的に開く深鉢破片。No 183はミニチュア土器の底部である。

< SI25 住居跡出土土器 >

No 184の1点を掲載した。沈線文様を持つ胴部破片である。

< SI26 住居跡出土土器 >

No 185・186の2点を掲載した。No 185は半裁竹管による円形刺突列点が施される口縁部片。No 186は幅広い隆線文が施文される。

< SI28 住居跡出土土器 >

床面および埋土中から比較的多量の土器が出土している。第45図No 187～第47図No 208を掲載した。No 187は推定6単位の突起を持つ波状口縁深鉢上半で、縦位に区画された沈線文が配置される。No 190は炬理設土器に設置された大型深鉢下半。底面に敷物圧痕を持つが一部はナデ消されている。No

204は口縁部が急に窄まる器形の深鉢。頸部は内面に大きく屈曲する。No.206はSI21住居跡出土No.160と同一個体の前期初頭破片。内面に横方向の条痕を持つ。No.207は繊維を含む非結束羽状縄文が施された前期初頭破片である。

< SI29 住居跡出土土器 >

No.209・210の2点を掲載した。No.210は横位に取り付け橋状突起を持つ胴部破片。縦方向の沈線文が施文される。

< SI31 住居跡出土土器 >

No.211の1点を掲載した。口縁部が緩く外反する粗製深鉢口縁部片である。

< SI33 住居跡出土土器 >

No.212の1点を掲載した。中型の粗製深鉢で胴部上半はわずかに外反して立ち上がる。地文には原体末端の結節部圧痕が等間隔に並ぶ。

< SI34 住居跡出土土器 >

No.213・214の2点を掲載した。No.213は直線的に開く粗製深鉢口縁部片。No.214は比較的大型の粗製深鉢胴部片である。

< SI35 住居跡出土土器 >

No.215～No.217の3点を掲載した。No.215は口縁部文様の隆線が緩く外反する突起部に連続している。No.216・217は薄手小型の口縁部でいずれも複節縄文のみが施される。

< SI37 住居跡出土土器 >

第47図No.218～第48図No.221の4点を掲載した。No.218は略完形の壺形土器。胴部側面に上下2対の橋状突起が2単位施される。中間には上下2段にわたり楕円形モチーフを中心とした文様が展開する。No.219は完形の小型深鉢。単純に内湾して開く器形で底面に敷物圧痕が残る。No.220は口縁部が短く外反する大型の深鉢片。No.221は深鉢胴部片である。

< SI38 住居跡出土土器 >

No.222～No.225の4点を掲載した。No.222は緩く外反して立ち上がる口縁部片。No.223の底部破片は底面に敷物圧痕が残る。No.224は処理設土器に使用されていた深鉢下半で、底面に敷物圧痕を持つ。

< SK05 土坑出土土器 >

No.226～No.228の略完形個体3点が出土している。No.226はキャリバー形の中型深鉢で、口縁部に横位のクランク状モチーフとなる隆線文様が展開し、胴部には縦位回転の地文が施される。No.227も中型のキャリバー形に近い器形の深鉢で、屈曲気味に内湾する口縁部に立体的な突起がつく。突起上部は欠損により形状不明だが中央に貫通孔を持つ。胴部地文は上部横位回転、下部縦位回転となっている。No.228は大きく単純に開く鉢型土器。

< 遺構外出土土器 >

遺構外では6gグリッド付近を中心に黒褐色土層等からの土器片出土が見られる。小破片が主体となっているが凡その時期判定が可能なものを中心に選抜し図示している。掲載は出土地点、層位とは別に型式学的な配列とした。

No.229～236は口縁部に施される隆線文や楕円形の沈線文が施文される大木9式土器片。No.237～245は横位に展開する磨消縄文文様が主体となり刺突列も加えられる大木10式前半段階の土器片。No.246の壺型土器頭部片は幅広く調整された隆帯が巡る。No.247は小型の鉢型土器で胴部に波頭状の磨消縄文と頸部に突起を持つ。No.248～255は縄文中期後葉に比定される地文のみ施文される粗製土器片。口縁部の無文部が外反するものが主体である。No.259は外面に摺糸文が施され内面に縦横の条

痕を持つ縄文前期初頭の土器片。No.260は縄文後期前葉の外反する口縁部片。沈線間に縄文が充填される施文手法が取られる。No.261・262は縄文中期後葉に比定されるミニチュア土器。器形は異なるが両者とも安定した底部を持ち地文のみ施される。

(2) 土 製 品 (第50図 写真図版57)

No.261は縄文時代中期後葉土器片を利用した円盤状土製品。側縁は研磨され円形に仕上げられる。今回の調査で出土した土製品はこの1点のみである。

(3) 石 器 (第51～57図 写真図版67～73)

石器は器種ごとの掲載とした。

< SI01 住居跡出土石器 >

No.331の垂飾を掲載した。縦長で上部に孔を穿った痕跡が残るが、未貫通である。表裏両方から穿孔され、孔径は約5mmである。孔は擦痕が円を描くように残り、穿孔具の回転によって穿孔されている。中央部で最大厚となり、上下端部に向かって緩やかに薄くなる。全面を磨き、表面は滑らかである。石質は蛇紋岩である。他、敲磨器類が1点出土している。

< SI02 住居跡出土石器 >

No.285、297の敲磨器類、No.312の磨製石斧を掲載した。No.285、297はともに多面に磨面、敲打痕がみられる。No.312の磨製石斧は全面を磨いている。

< SI03 住居跡出土石器 >

No.287、296、302、307、311、337、340、343を掲載した。No.287、296は側面に使用痕のある磨石である。また、わずかに上下側面に敲打痕がみられる。No.302は全面に敲打痕がある多面体敲石である。No.307は側面に敲打痕がみられる。No.311は石斧である。自然面を残し、打点に使用痕がみられる。No.337は床面直上から出土し、皿状磨面を下にした状態で出土した(第9図)。表裏両面に磨面が認められ、出土した状態では溝状磨面が上になって出土した。側面の一部を除き敲打痕がほぼ全面にみられる。No.340も石皿である。床面から磨面が上向きで出土した。No.343は台石である。床面の複式埴輪から出土した。

< SI04 住居跡出土石器 >

No.336、339を掲載した。いずれも石皿で同一個体である。両者とも被熱しており、表裏両面に磨面が認められる。No.336は裏面に溝状磨面を持つ。

< SI05 住居跡出土石器 >

No.310の敲磨器類1点を掲載した。側面に敲打痕がみられる。

< SI06 住居跡出土石器 >

No.286、288、293、298、305、324を掲載した。No.286、288、293、298は側面に磨面を持つ。No.305は表に敲打痕がみられる。No.314、324は磨製石斧である。No.319は最大厚を下にもち、使用による剥離の痕跡がある。No.324は最大厚を上にもち、下部は欠損している。

< SI11 住居跡出土石器 >

No.267、268、270、282、284、290、309、313、314、316、321、322、334、335、339を掲載した。No.267は石匙である。握み部のくびれは浅い。先端は欠損している。No.268は石筥である。No.270はスクレイパーである。No.282はほぼ全面に磨面を持つが、表裏は滑らかであり、側面はざらざらとした磨面である。No.290は表裏両面に敲打痕をもち、側面に磨面がみられる。No.309は礫器である。

No.313、314、316、321、322は磨製石斧である。No.313は最大厚を中央に持ち、使用痕が認められる。No.314は最大厚を下部に持つ。No.316、322は下部を欠損している。No.321は上部を欠損している。No.334は垂飾である。楕円形で上部に貫通孔がある。裏面は剥離により欠損しているため不明である。孔径約7mmである。孔は、穿孔具の回転によって穿孔されている。石質は蛇紋岩である。No.335は石皿である。上面全面に磨面が認められ、裏面は溝状磨面がみられる。No.339は石皿である。両面に磨面があり、土器No.68(第38図)上部に乗った状態で出土した。

< SI12 住居跡出土石器 >

No.306の敲磨器類1点を掲載した。表裏両面と側面に敲打痕がみられる。

< SI14 住居跡出土石器 >

No.273、280、291、325、327を掲載した。No.273はスクレイパーである。No.280は表面に敲打痕、全面に磨面をもつ。痕No.291は側面に磨面と敲打痕がみられる。No.325、327は磨製石斧である。No.325は使用痕が認められる。また、上部が欠損している。No.327は上部のみであるが、下部に二次調整がみられる。

< SI15 住居跡出土石器 >

No.266、299、310の3点を掲載した。No.266は石錐である。No.299は扁平気味の円形多面体磨石である。No.310は石斧で、下部が欠損している。

< SI16 住居跡出土石器 >

No.292、312の2点を掲載した。No.292は側面に使用痕のある磨石である。

< SI17 住居跡出土石器 >

No.269、278、315、329、330、332の6点を掲載した。No.269は上部が欠損しているが、二次加工の痕跡がある。No.278は全面に磨面、裏面を除いて敲打痕のある敲磨器類である。No.315は上部を敲打によって整形した石斧である。最大厚を下部に持つ。No.329は方形の垂飾である。一部欠損している。表裏に擦痕が横位、斜位に残り、上下の中央よりやや片側に2つ穿孔されている。孔径約3mmである。孔は、穿孔具の回転によって穿孔されている。下部の孔には紐を通した痕跡がみられる。No.330は貫通孔のない未加工の垂飾である。全面に擦痕がみとめられる。一部欠損している。No.332は三角形の垂飾である。表裏両面から穿孔されているが、裏面には穿孔の失敗と推定される未貫通の穿孔痕が1か所みられる。No.329、332ともに石質は蛇紋岩である。垂飾の出土量は本遺跡中、最多の3点である。

< SI18 住居跡出土石器 >

No.265の不定形石器1点の掲載である。

< SI19 住居跡出土石器 >

No.272、301、338、341、342の5点を掲載した。No.272はスクレイパーである。No.301は扁平気味の円形敲磨器類である。側面に敲打痕がみられる。No.338は側面の一部が敲打整形された石皿である。表裏両面に溝状磨面をもつ。大部分が欠損している。No.341、342は両面に磨面のある石皿片である。

< SI20 住居跡出土石器 >

No.264、271、279、283、300の5点を掲載した。No.264は異形石器で、一部欠損している。No.271はスクレイパーである。No.279は円形で全面に磨面がみられ、側面に敲打痕を残す。No.283は側面に一部敲打痕が見られる。No.300は当初3fグリッドでの出土であったが、遺構精査結果、位置と層位から本遺構のものであると判断した。扁平気味の円形多面体磨石である。

< SI23 住居跡出土石器 >

No.275、277、303、318、320の5点を掲載した。No.275、277は表裏両面と側面に磨面をもつ。またNo.275は裏面に敲打痕も見られる。No.303は表裏、側面に敲打痕を持つ多面体敲石である。No.318は本遺跡最大の磨製石斧である。縦位、横位、斜位と擦痕が前面に認められる。住居の壁際から出土した(写真図版32)。使用痕は認められない。No.320は上部を欠損した磨製石斧である。

< SI24 住居跡出土石器 >

No.276、289、294、308、326、328、333の7点を掲載した。No.276は表裏、側面に磨面をもち、裏面に敲打痕のある敲磨器類である。No.289、294は側面片面に磨面のある磨石である。No.308は表面に2か所敲打痕がみられる。No.326は使用痕の認められる磨製石斧である。上部は欠損している。No.328は本遺跡では唯一の出土であるミニチュアの磨製石斧である。下部が欠損している。実測図は原寸である。No.333は蛇紋岩の垂飾である。縦位に擦痕が認められる。楕円形で上部に貫通孔がある。孔径約7mmである。孔は、穿孔具の回転によって穿孔されている。

< SI25 住居跡出土石器 >

No.304の1点を掲載した。側面に敲打痕が認められる。

< SI28 住居跡出土石器 >

No.263の石鏃1点のみの掲載である。

< SI29・30 住居跡出土石器 >

No.274、295の2点を掲載した。SI29、30は重複の為、当初、遺構ごとに取り上げることができなかったため、出土遺構は両遺構のどちらかのものとして掲載することとした。No.274は表裏両面と片面側面に磨面があり、また裏面に敲打痕が認められる。No.295は側面に磨面をもつ磨石である。

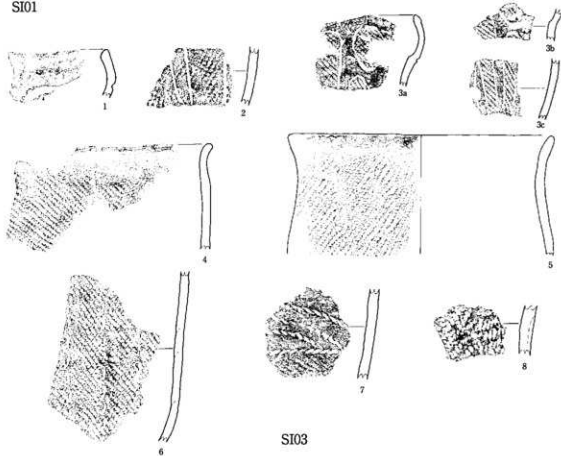
< SI31 住居跡出土石器 >

No.281の1点を掲載した。全面に磨面があり裏面に敲打痕がみられる。

< 遺構外出土石器 >

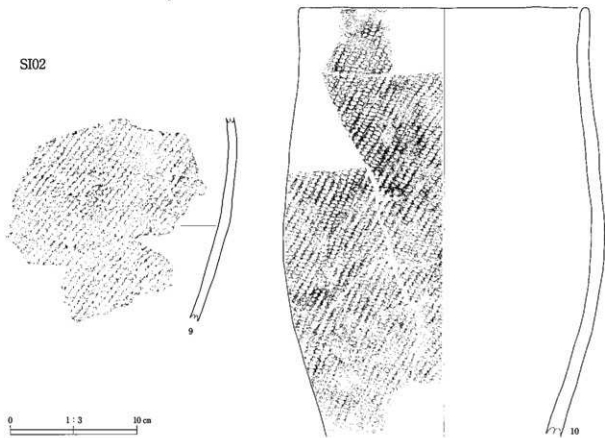
No.262、317の2点を掲載した。No.262は石鏃である。No.317は使用痕跡の残る磨製石斧である。上部を欠損している。

SI01

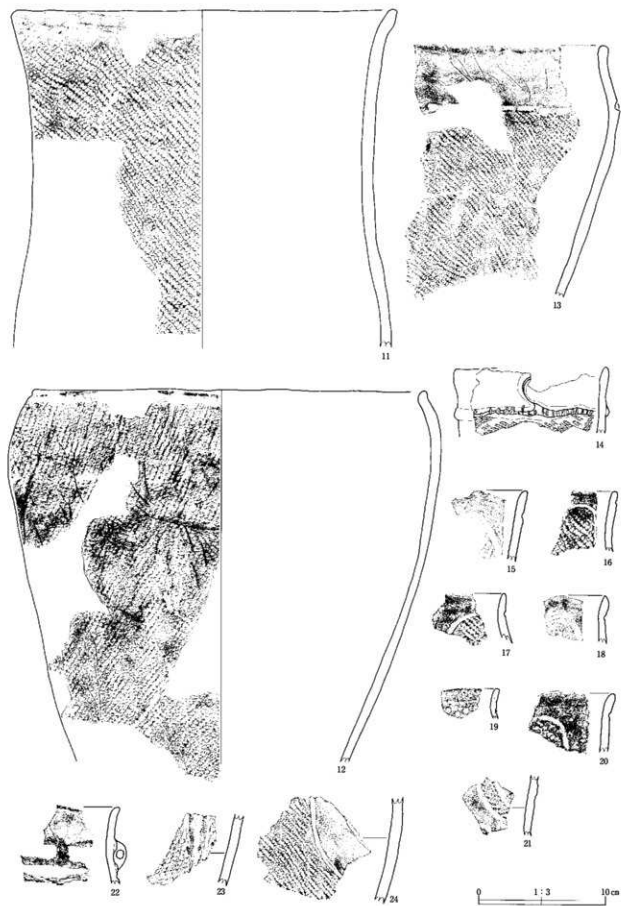


SI03

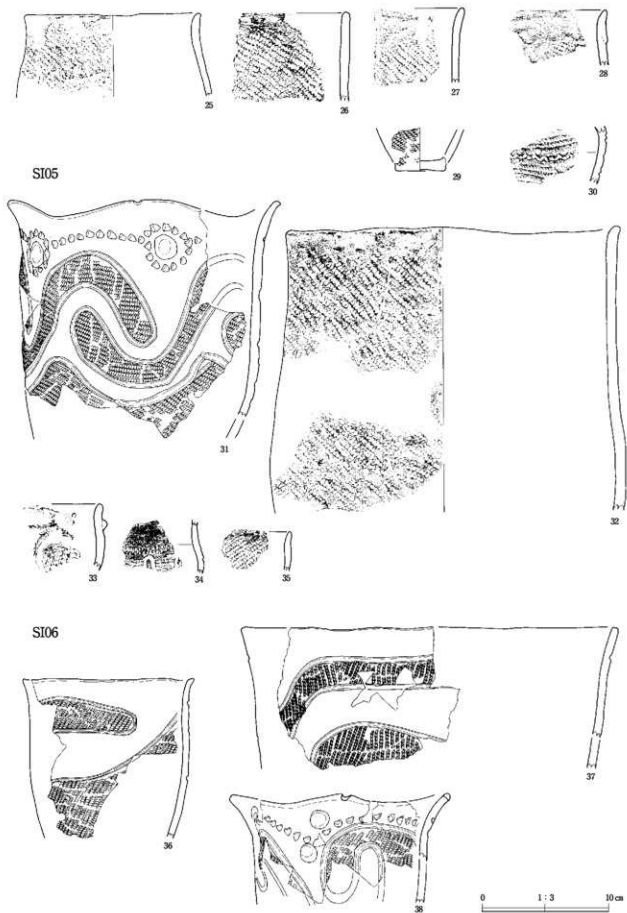
SI02



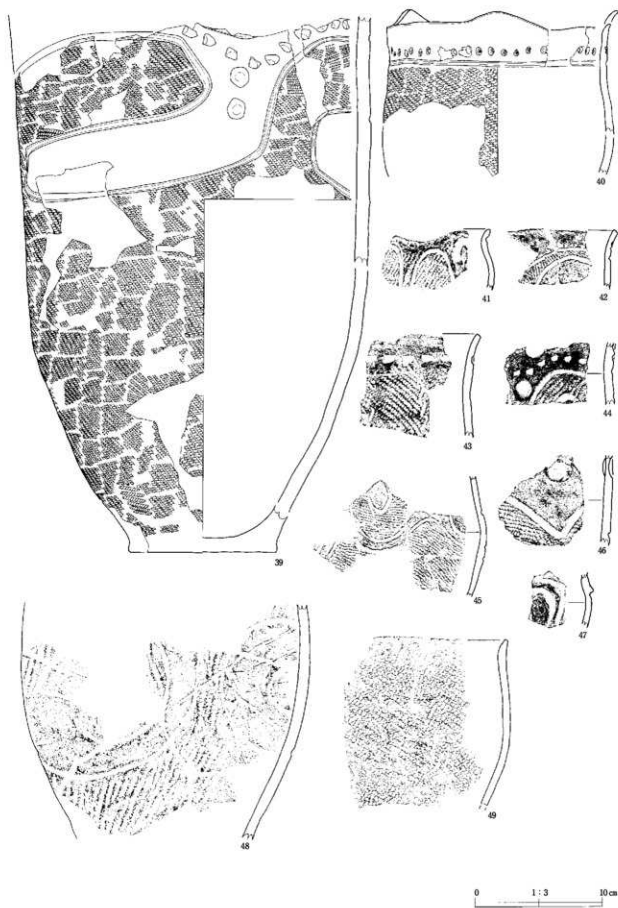
第33図 出土遺物 縄文土器(1)



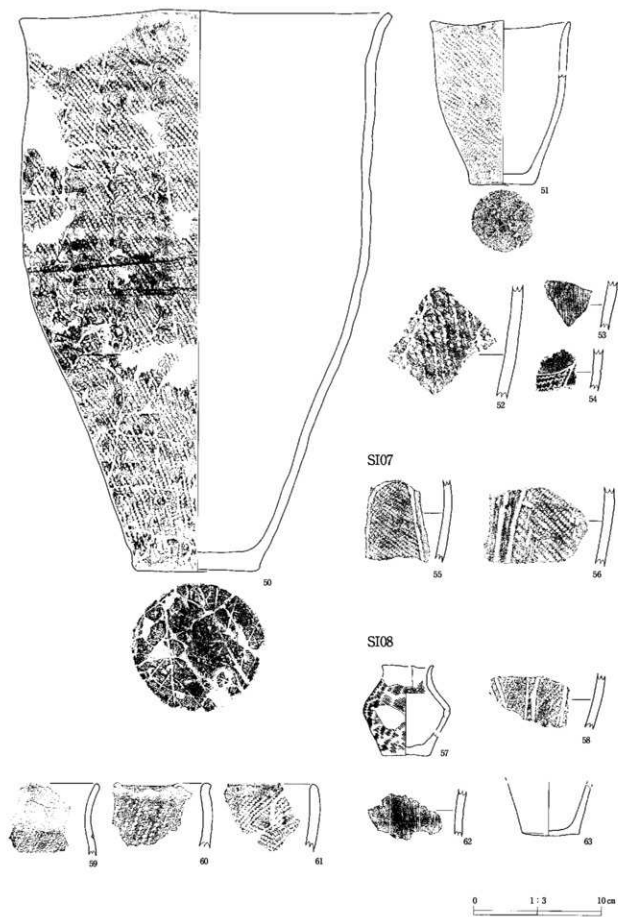
第34図 出土遺物 縄文土器（2）



第35図 出土遺物 縄文土器 (3)

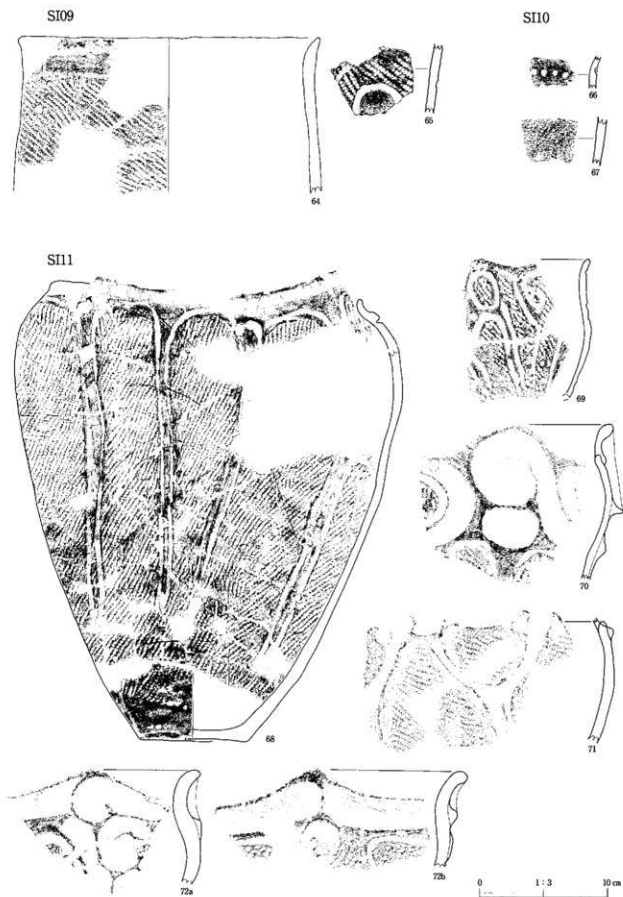


第36図 出土遺物 縄文土器 (4)

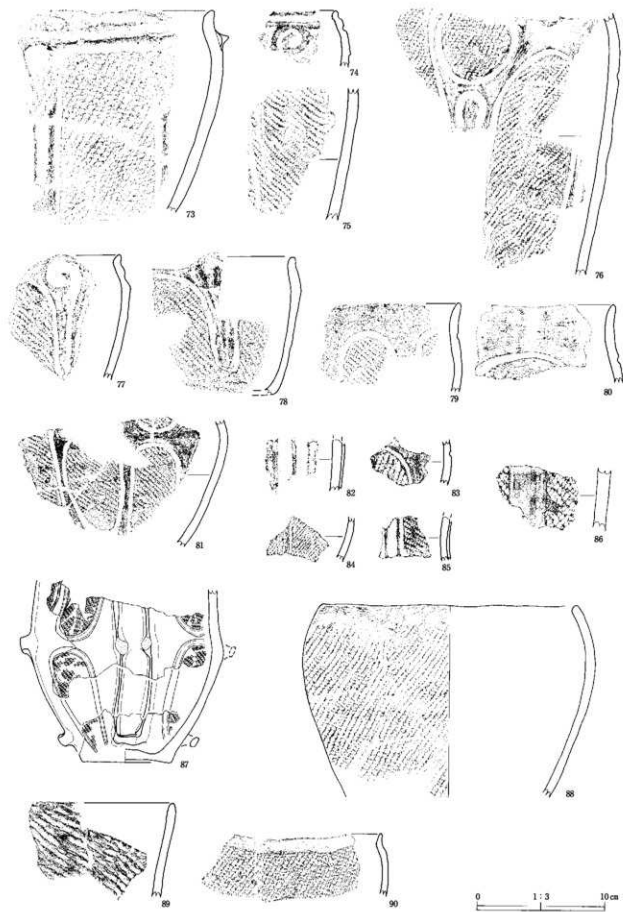


第37図 出土遺物 縄文土器 (5)

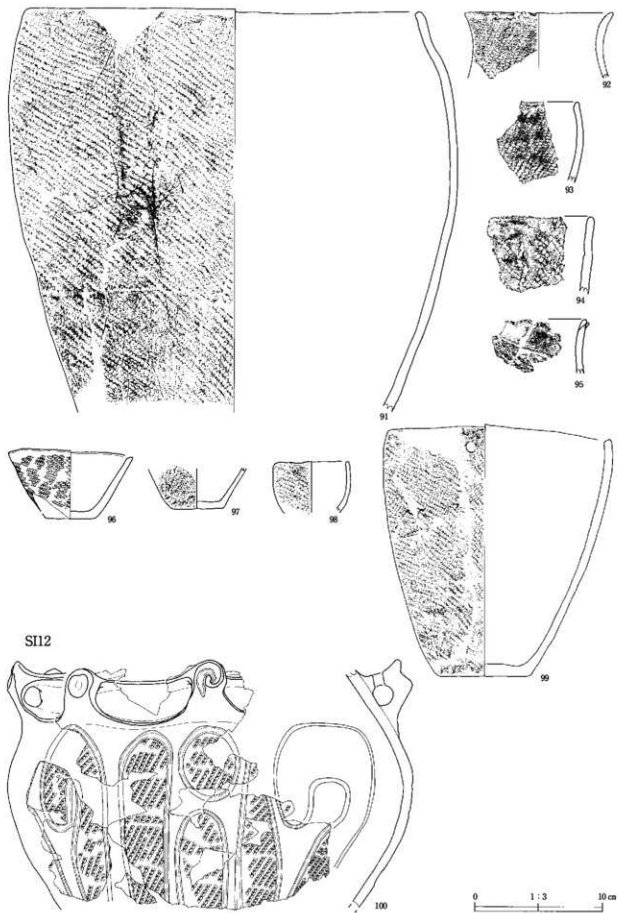
3 出土遺物



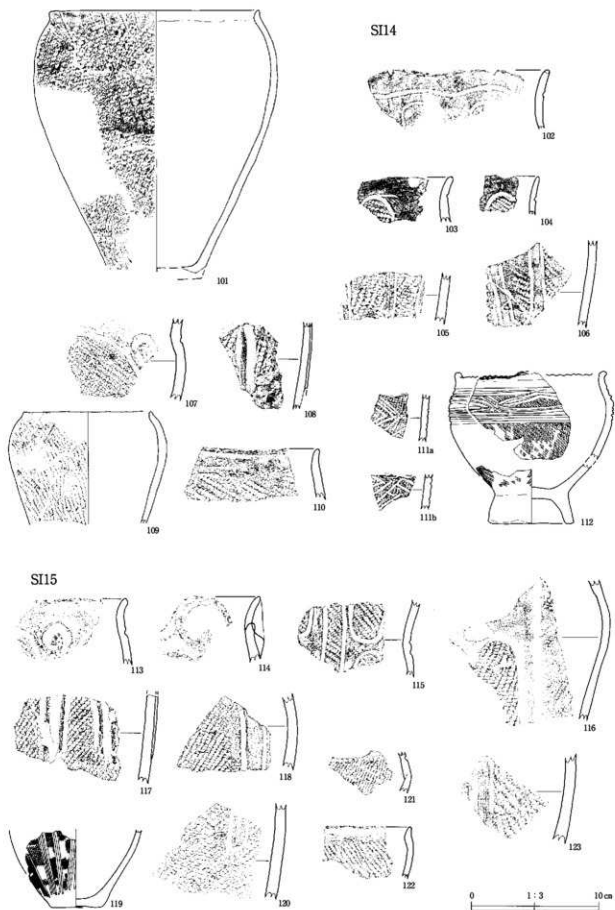
第38図 出土遺物 縄文土器 (6)



第39図 出土遺物 縄文土器 (7)

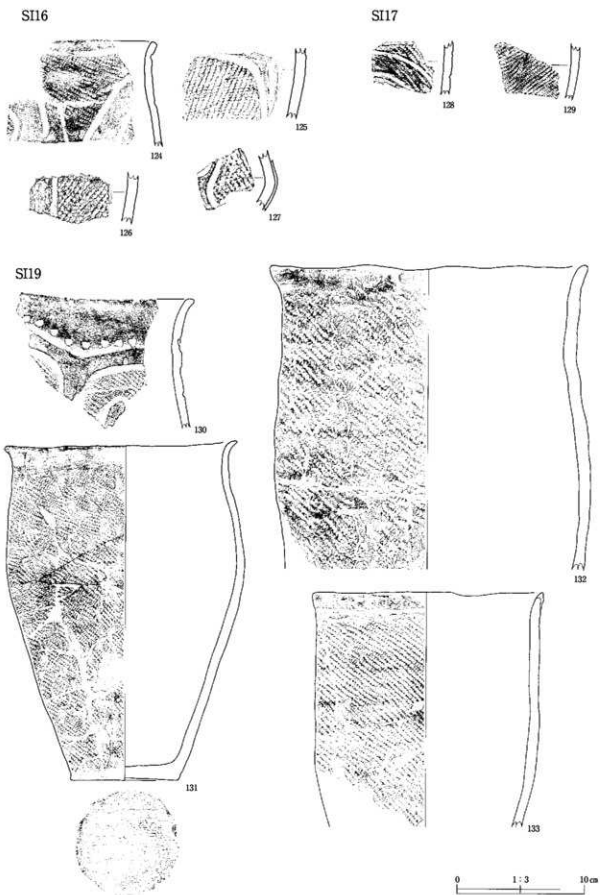


第40図 出土遺物 縄文土器(8)

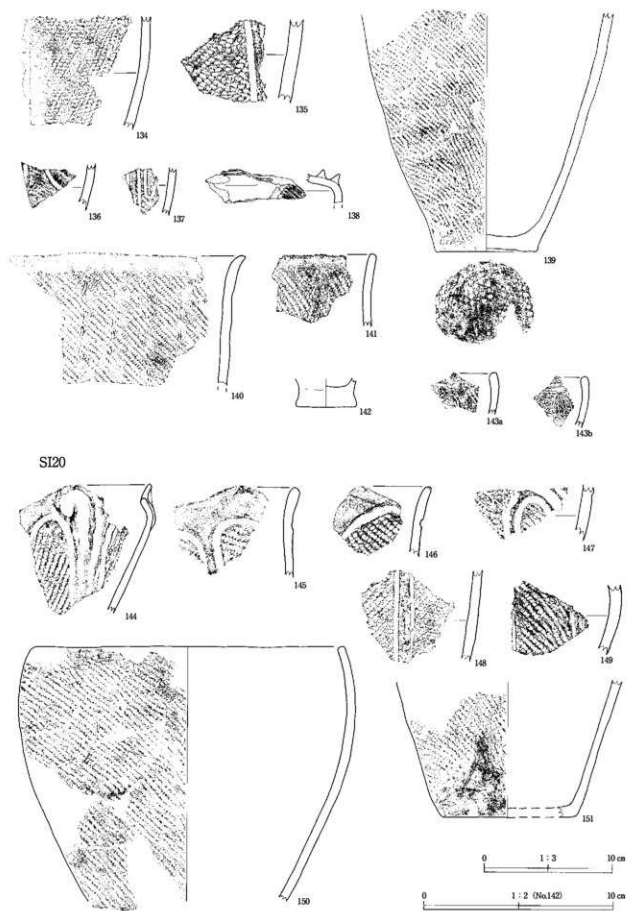


第41図 出土遺物 縄文土器(9)

3 出土遺物

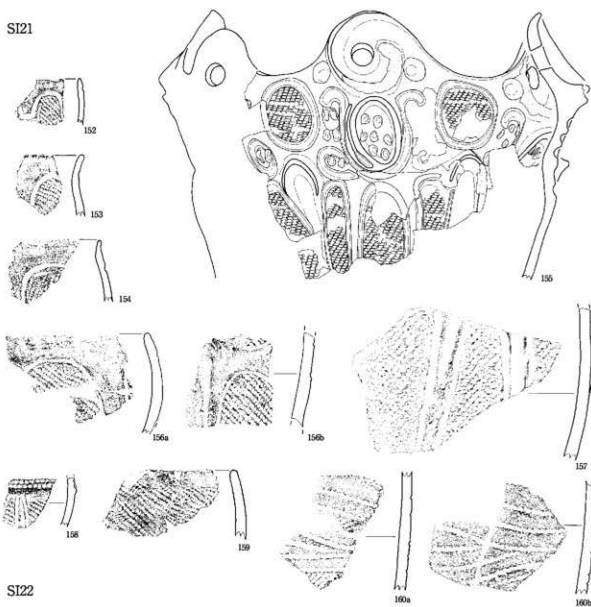


第42図 出土遺物 縄文土器 (10)

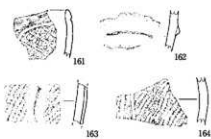


第43図 出土遺物 縄文土器 (11)

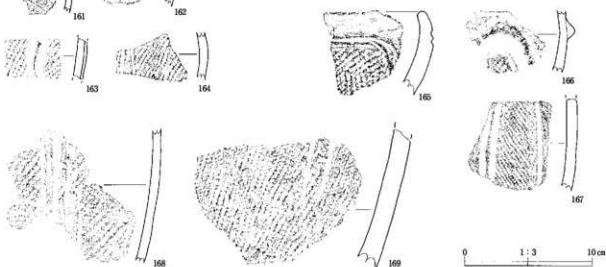
SI21



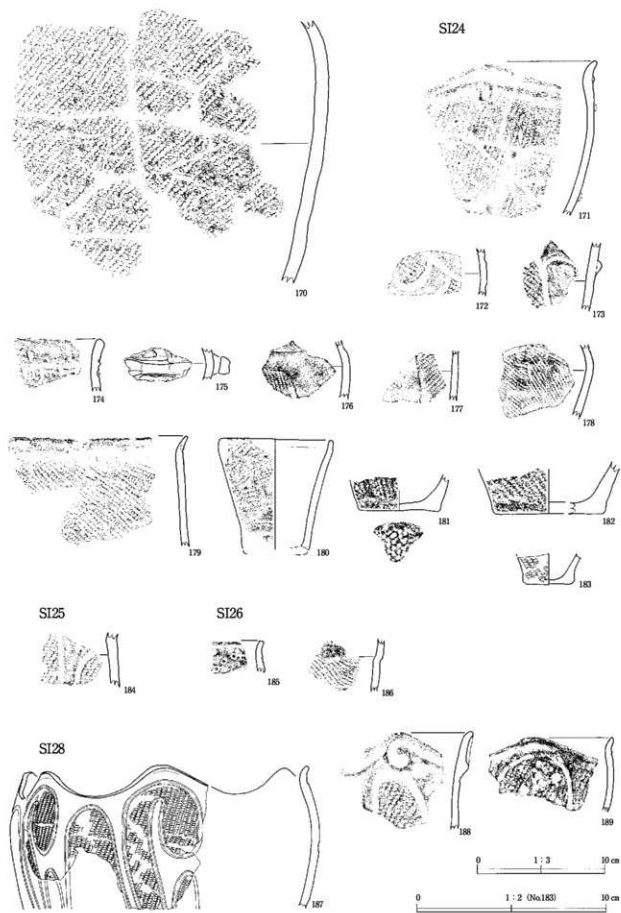
SI22



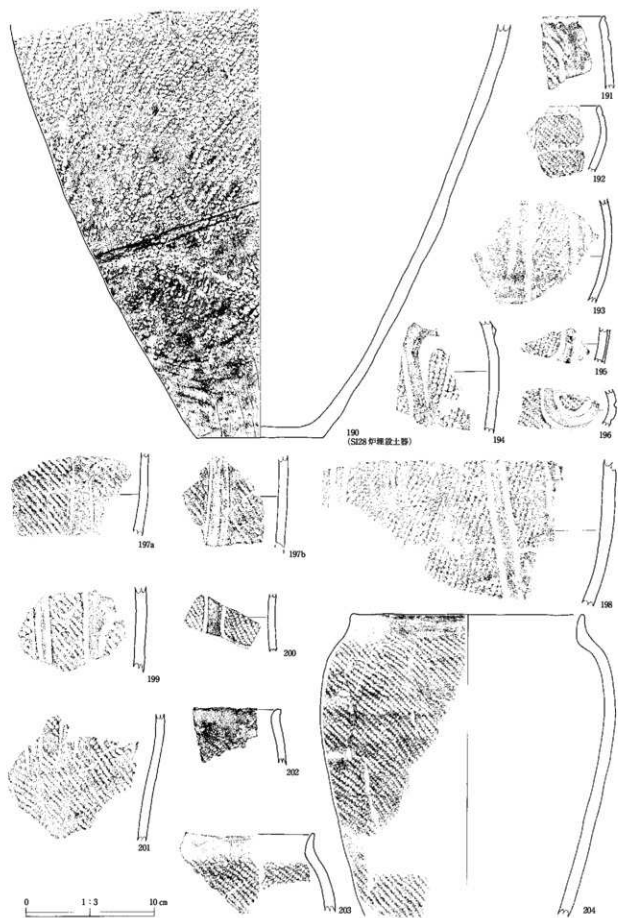
SI23



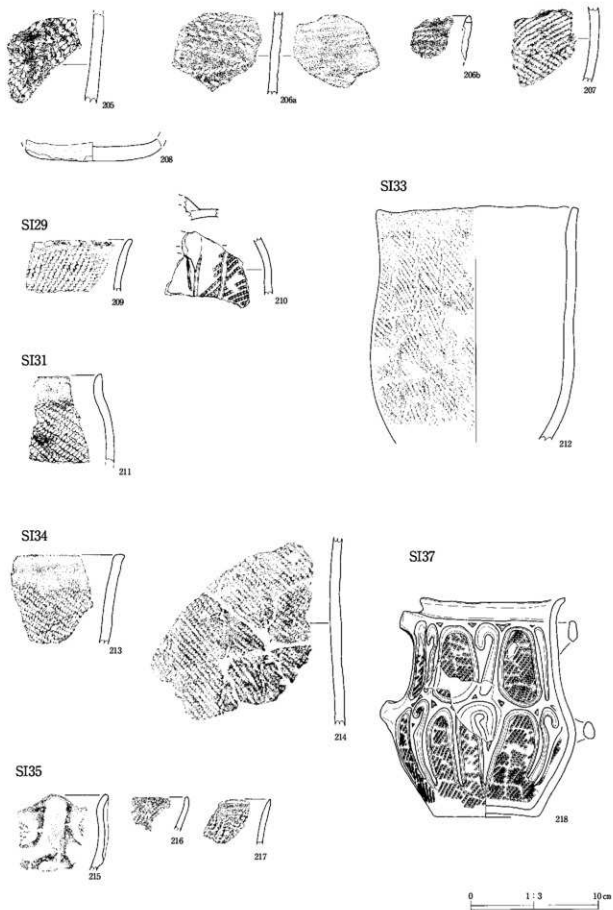
第44図 出土遺物 縄文土器 (12)



第45図 出土遺物 縄文土器 (13)



第46図 出土遺物 縄文土器 (14)



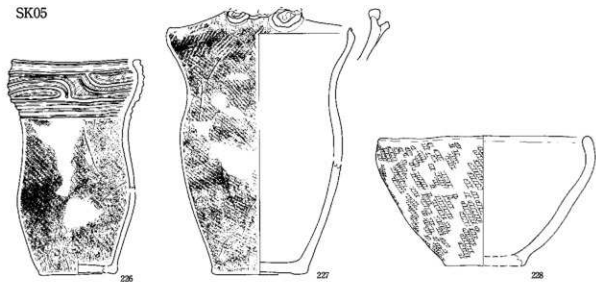
第47図 出土遺物 縄文土器 (15)

3 出土遺物

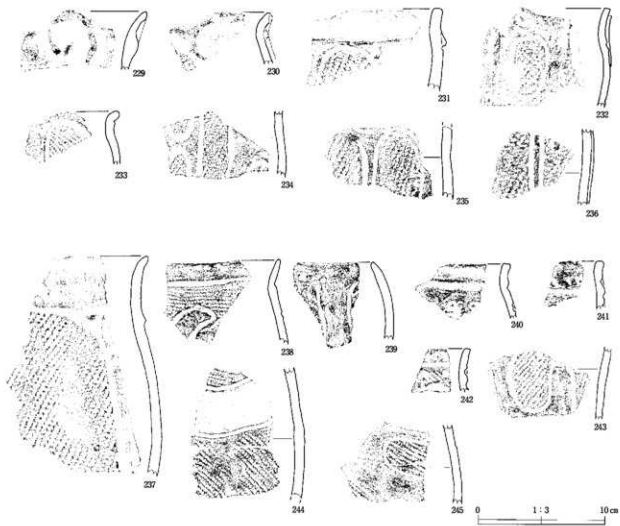


第48図 出土遺物 縄文土器 (16)

SK05

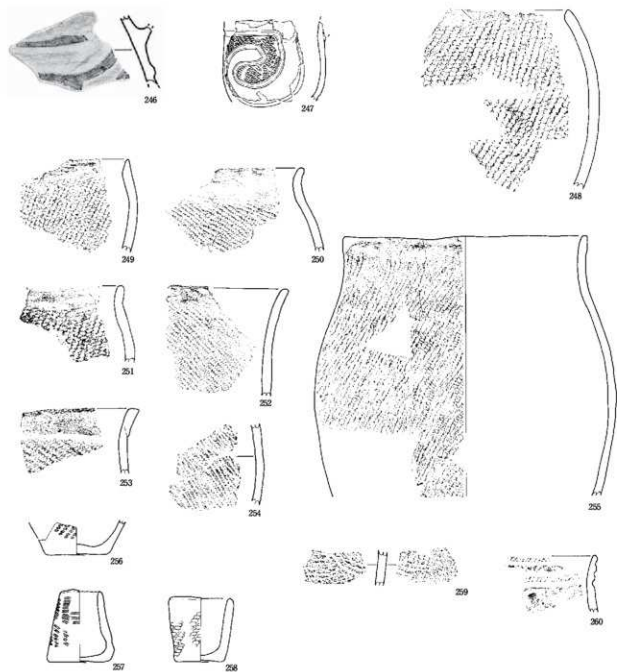


遺構外



第49図 出土遺物 縄文土器 (17)

3 出土遺物



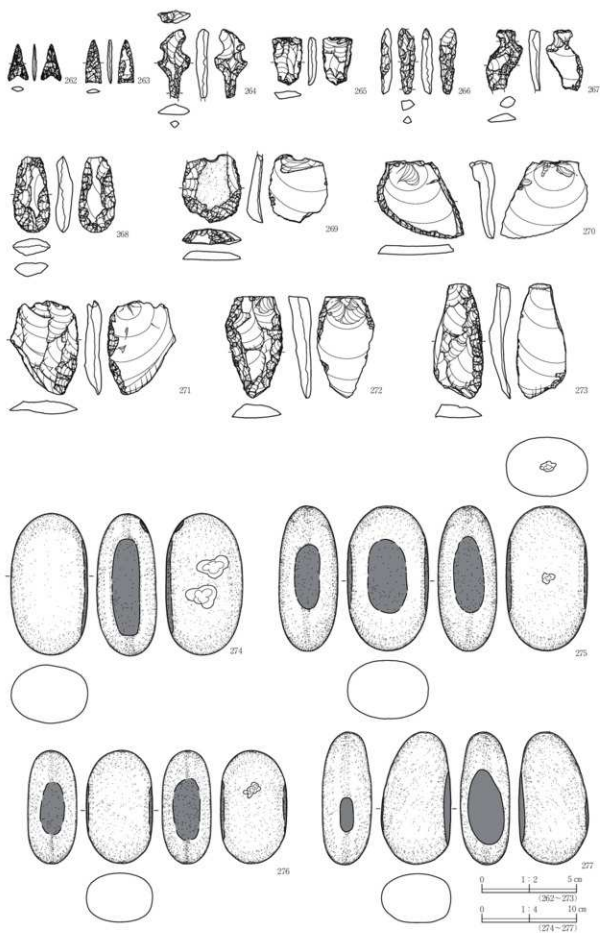
土製品



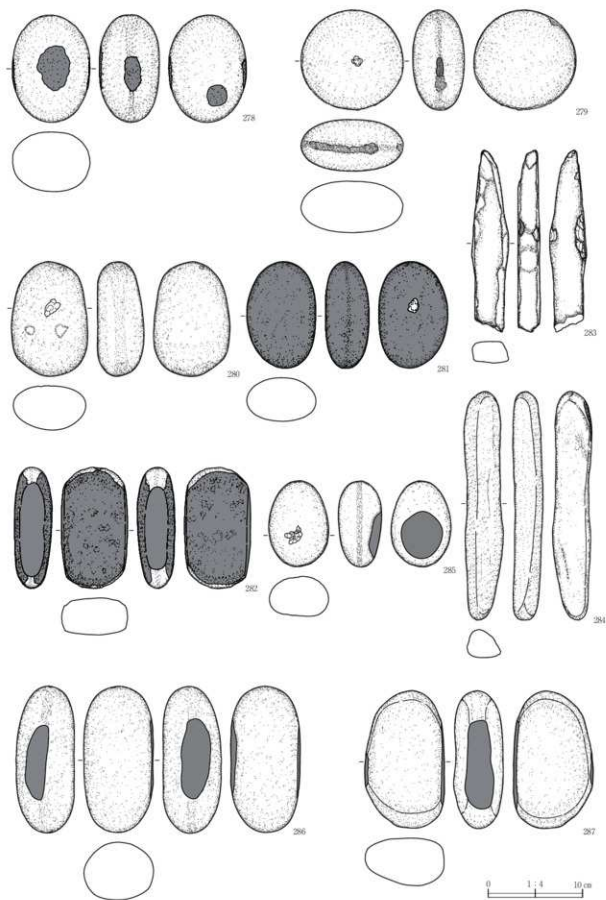
0 1:3 10 cm

0 1:2 (No.257・258・261) 10 cm

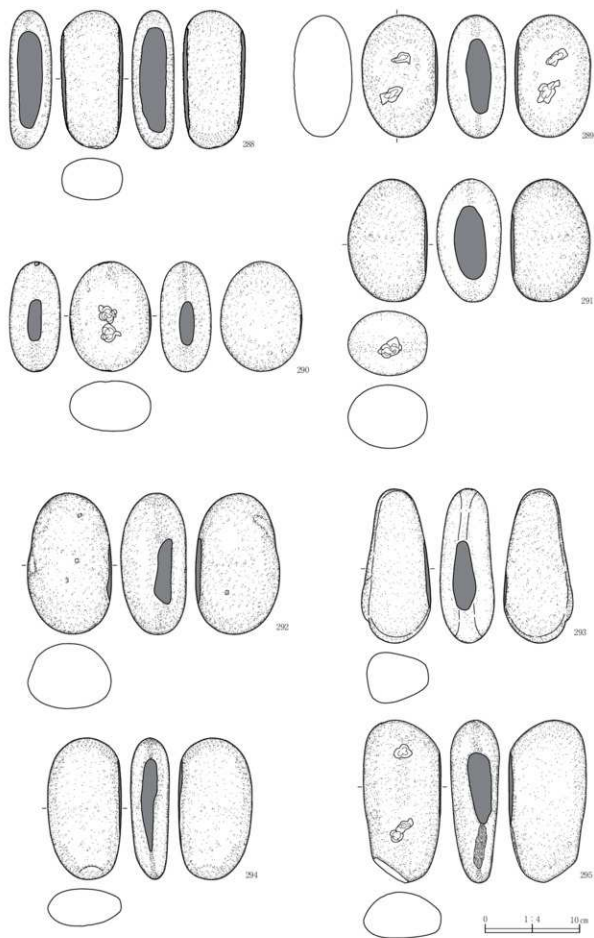
第50図 出土遺物 縄文土器 (18)・土製品



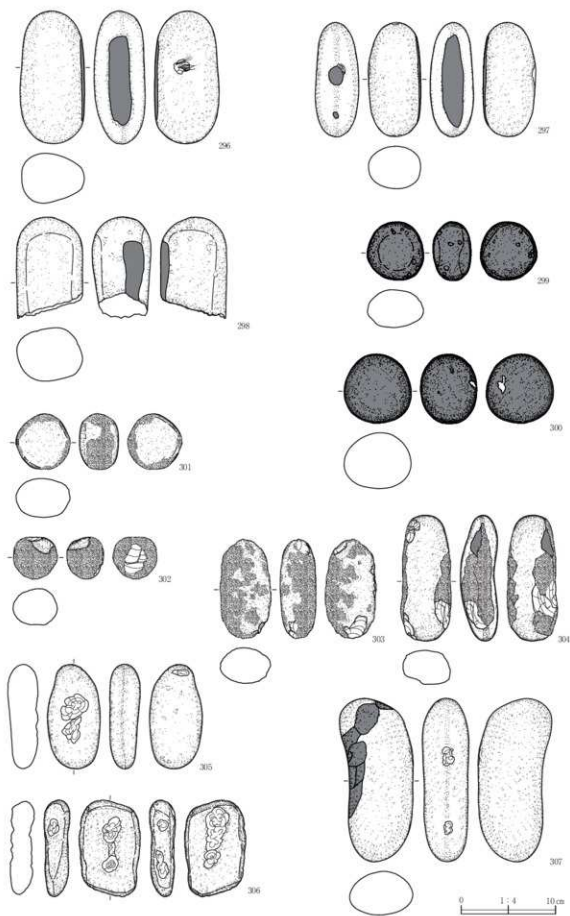
第51図 出土遺物 剥片石器・敲磨器類(1)



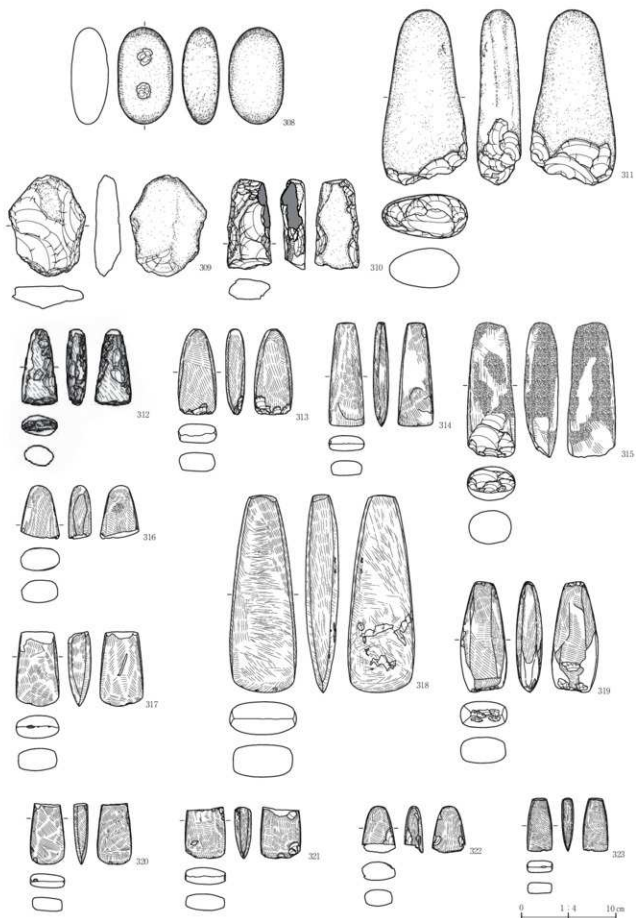
第52図 出土遺物 磨器類(2)



第53図 出土遺物 磨石器類 (3)

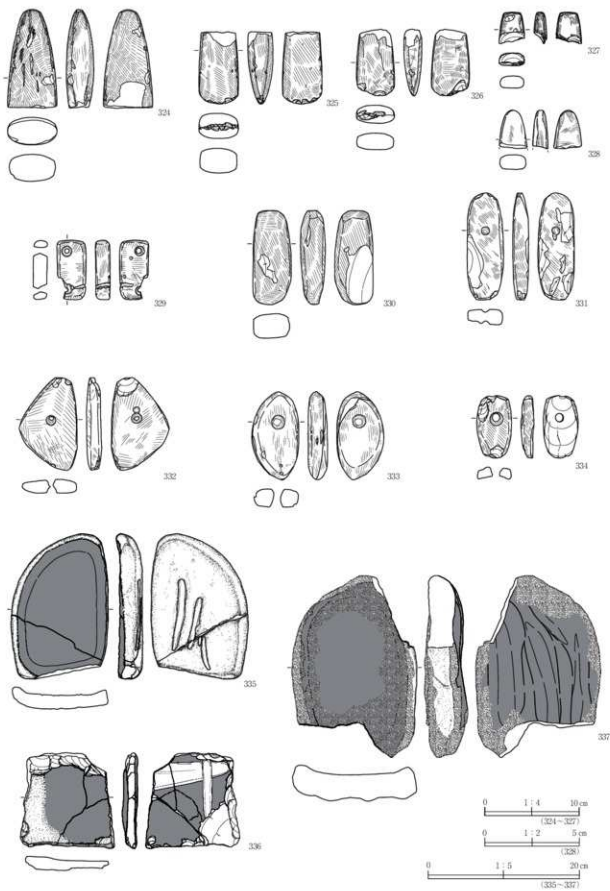


第54図 出土遺物 磨石器類(4)

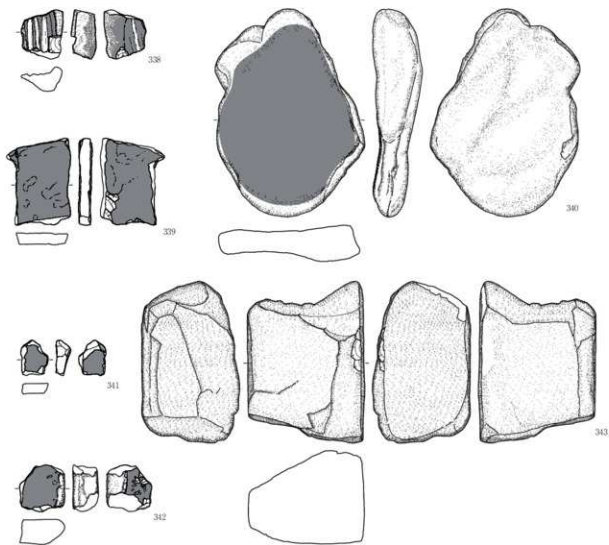


第55図 出土遺物 敲磨器類 (5)・磨製石斧 (1)

3 出土遺物



第56図 出土遺物 磨製石斧(2)・垂飾・石皿(1)



第57図 出土遺物 石皿(2)

第4表 土器製器表(2)

品名	出土遺構	品名	製法・部位	口縁・部位	口縁寸面	口径	高さ	出土層(cm)	出土層(層位)	出土層(年代)	出土層(土質)	出土層(形状)	出土層(色)	出土層(備考)
37	S06	輪削土上段、腹土	口縁30	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
38	S06	口縁上	口縁・口縁・胴部	口縁17	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
39	S06	輪削土上段、腹土、口縁	口縁115	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
40	S06	輪削土上段、腹土、口縁	口縁175	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
41	S06	口縁	口縁・口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
42	S06	口縁	口縁・口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
43	S06	腹土	口縁・口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
44	S06	腹土	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
45	S06	腹土、口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
46	S06	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
47	S06	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
48	S06	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
49	S06	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
50	S06	輪削土上段、口縁	口縁305	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
51	S06	腹土	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
52	S06	腹土	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
53	S06	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
54	S06	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
55	S07	腹土	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
56	S07	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
57	S08	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
58	S08	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
59	S08	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
60	S08	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
61	S08	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
62	S08	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
63	S08	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
64	S09	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
65	S09	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
66	S10	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
67	S10	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
68	S11	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
69	S11	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
70	S11	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
71	S11	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
72a	S11	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
72b	S11	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
72c	S11	口縁	口縁・胴部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁

第5表 土器製器表(3)

品名	出土遺物	編号	製法	器種・部位	出埋層(cm)	口径(φ)	底径(φ)	高	重量	胎土	内装物	出土	時期	備考
73	SH1	1層穴	素土	口縁下部	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
74	SH1	素土(56号)	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
75	SH1	素土(56号)	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
76	SH1	素土(56号)	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
77	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
78	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
79	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
80	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
81	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
82	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
83	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
84	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
85	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
86	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
87	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
88	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
89	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
90	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
91	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
92	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
93	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
94	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
95	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
96	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
97	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
98	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
99	SH1	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
100	SH2	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
101	SH2	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
102	SH4	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
103	SH4	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
104	SH4	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
105	SH4	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
106	SH4	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
107	SH4	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	
108	SH4	素土	素土	口縁	平縁	平縁	底縁	沈没		子土		子土	大木9	

第 6 表 土器製器表 (4)

品名	出土遺構	編号	製法・部位	口縁高 (cm)	口縁直径 (cm)	口縁形状	土縁	胎体	胎土	胎色	胎質	備考
309	SI44	素土	器鉢・口縁	口縁 50	平縁	平縁	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
310	SI44	素土	器鉢・口縁		平縁	平縁	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
311	SI44	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
312	SI44	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 不明
313	SI44	素土	器鉢・口縁		平縁	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
314	SI45	素土	器鉢・口縁		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
315	SI45	SI15 複製部	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
316	SI45	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
317	SI45	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
318	SI45	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
319	SI45	素土+粘り土	器鉢・底足	底足 4	片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
320	SI45	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
321	SI45	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
322	SI45	素土	器鉢・口縁		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
323	SI45	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
324	SI46	素土	器鉢・口縁		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 10
325	SI46	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
326	SI46	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
327	SI46	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
328	SI47	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 10
329	SI47	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
330	SI49	RP5	器鉢・口縁		平縁	平縁	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 10
331	SI49	RP5	器鉢・胴部		平縁	平縁	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 10
332	SI49	素土+粘り土	器鉢・口縁・胴部	口縁 25	平縁	平縁	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
333	SI49	素土・RP4	器鉢・口縁・胴部	口縁 18	平縁	平縁	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
334	SI49	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
335	SI49	RP4	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
336	SI49	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 10
337	SI49	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 9
338	SI49	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 大木 10
339	SI49	RP4	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
340	SI49	素土	器鉢・口縁		平縁	平縁	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
341	SI49	素土	器鉢・口縁		平縁	平縁	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
342	SI49	素土	器鉢・胴部		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
343	SI49	素土	器鉢・口縁		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産
344	SI49	素土	器鉢・口縁		片状	片状	片状	L.R. 光塩	・	・	・	・ 中国産

第7表 土器製器表(5)

品名	出土遺物	地点	製法・部位	出埋層(㎝)	口縁上面	底縁	胎体	胎体	内面	付着物	胎土	備考
144	S20	伊集	器底・底縁	-	滑沢	滑沢・沈澱	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
145	S20	伊集	器底・口縁	-	滑沢	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
146	S20	伊集	器底・口縁	-	滑沢	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
147	S20	伊集	器底・胴部	-	不明	不明	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
148	S20	伊集	器底・胴部	-	滑沢	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
149	S20	伊集	器底・胴部	-	滑沢	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
150	S20	伊集	器底・口縁・胴部	口縁20	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
151	S20	伊集	器底・胴部・底縁	底縁11	-	-	LR・光塩	-	子午線	-	-	中期後葉
152	S21	伊集	器底・口縁	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
153	S21	伊集	器底・口縁	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
154	S21	伊集	器底・口縁	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
155	S21	伊集	胴土一帯、1層中位、口縁	20	滑沢	滑沢・底縁・滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
156a	S21	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
156b	S21	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
157	S21	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
158	S21	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
159	S21	伊集	器底・口縁	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
160a	S21	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
160b	S21	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
161	S22	伊集	器底・胴部	-	滑沢	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	中期後葉
162	S22	伊集	器底・胴部	-	滑沢	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	中期後葉
163	S22	伊集	器底・胴部	-	滑沢	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
164	S22	伊集	器底・胴部	-	滑沢	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
165	S23	伊集	器底・口縁	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
166	S23	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
167	S23	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
168	S23	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
169	S23	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
170	S23	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
171	S24	伊集	器底・口縁	-	滑沢	滑沢(滑沢)	LR・光塩	-	子午線	-	-	中期後葉 内面設計滑沢
172	S24	伊集	器底・胴部	-	滑沢	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
173	S24	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
174	S24	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
175	S24	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	中期後葉
176	S24	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	中期後葉
177	S24	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	中期後葉
178	S24	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	大木9
179	S24	伊集	器底・口縁	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	中期後葉
180	S24	伊集	器底・口縁	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	中期後葉
181	S24	伊集	器底・胴部	-	平縁	滑沢	LR・光塩	-	子午線	-	-	中期後葉

第9表 土器製煉表(7)

品名	出土遺物	焼土	製煉方法	製煉温度(°C)	口縁上面	口縁下面	底面	内面	外面	胎土	胎質	備考
315	灰土遺物	灰土	口縁・底面	-	滑沢	滑沢	-	ミ字水筒	-	ミ字水筒	灰土	大木9
316	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	-	ミ字水筒	-	ミ字水筒	灰土	中野屋敷 小型土器
317	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	-	ミ字水筒	-	ミ字水筒	灰土	中野屋敷
318	灰土	灰土	口縁	115	滑沢	滑沢	滑沢	ミ字水筒	ミ字水筒	ミ字水筒	灰土	大木9
319	灰土	灰土	口縁	15	滑沢	滑沢	滑沢	動物皮膚一層・ミ字水筒	ミ字水筒	ミ字水筒	灰土	中野屋敷
320	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	ミ字水筒	外周灰化物	ミ字水筒	中野屋敷 内周灰化物	
321	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	ミ字水筒	ミ字水筒	ミ字水筒	中野屋敷	
322	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	外周灰化物	外周灰化物	外周灰化物	中野屋敷	
323	灰土	灰土	口縁	11	滑沢	滑沢	滑沢	動物皮膚一層・ミ字水筒	ミ字水筒	ミ字水筒	中野屋敷 内周灰化物	
324	灰土	灰土	口縁	11	滑沢	滑沢	滑沢	動物皮膚一層・ミ字水筒	ミ字水筒	ミ字水筒	中野屋敷 内周灰化物	
325	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	ミ字水筒	ミ字水筒	ミ字水筒	大木9	
326	灰土	灰土	口縁	10	滑沢	滑沢	滑沢	ミ字水筒	外周灰化物	ミ字水筒	大木9	
327	灰土	灰土	口縁	24.5	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
328	灰土	灰土	口縁	24.5	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
329	灰土	灰土	口縁	6.5	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
330	灰土	灰土	口縁	6.5	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
331	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
332	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
333	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
334	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
335	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
336	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
337	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
338	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
339	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
340	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
341	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
342	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
343	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
344	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
345	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
346	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
347	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
348	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	
349	灰土	灰土	口縁	-	滑沢	滑沢	滑沢	口縁・底面	口縁・底面	口縁・底面	大木9	

第10表 土器観察表 (8)

図号	出土遺構	集点	期層・部位	出層深(㎝)	口縁形状	注	出土層	出土物	出土	検出	備考	
250	36 (S302付表)	検出層	部縁・口縁	・	平縁	・	ⅠB ⅡB	・	Ⅰ字片	・	・	中層遺物
251	36 (S302付表)	検出層	部縁・口縁	・	平縁	・	ⅠB ⅡB	・	Ⅰ字片	・	・	中層遺物
252	36 ヲワナド	検出層	部縁・口縁	・	平縁	・	ⅠB ⅡB	・	Ⅰ字片	・	・	中層遺物
253	36 ヲワナド	検出層	部縁・口縁	・	平縁	・	ⅠB ⅡB	・	Ⅰ字片	・	・	中層遺物
254	75 ヲワナド	Ⅱ層色土層	部縁・胴部	・	平縁	・	ⅠB ⅡB	・	Ⅰ字片	・	・	中層遺物
255	66 ヲワナド	Ⅱ層色土層	部縁・口縁・胴部	口厚19	平縁	・	ⅠB ⅡB	・	Ⅰ字片	・	・	中層遺物
256	74 ヲワナド	Ⅱ層色土層	部縁・底部	底厚46	平縁	・	ⅠB ⅡB	・	Ⅰ字片	・	・	中層遺物
257	市土集点不明	市土集点不明	底 (小型) 底部	口縁3底径4.7 部高5.6	平縁	・	ⅠB ⅡB	・	Ⅰ字片	・	・	中層遺物
258	66 ヲワナド	検出層	胴・(小型) 口縁・底部	口縁3A底径2.5 部高3.5	平縁	・	ⅠB ⅡB	・	Ⅰ字片	・	・	中層遺物
259	57 ヲワナド	Ⅱ層色土層	部縁・胴部	・	・	・	単輪鉢全体(Ⅰ層色) 方向不定	・	・	・	・	Ⅱ層色土層
260	66 ヲワナド	Ⅰ字層土層, Ⅱ層色土層	部縁・口縁	・	浅鉢	・	ⅠB ⅡB	・	Ⅰ字片	・	・	Ⅱ層色土層

3 出土遺物

第11表 石器計測値一覧表

№	品種	遺構名	地点・層位	石器(単位: mm)		石質	産地帯	形成時期	図説番号		
				最大長	最大幅						
362	石鏃	出土地点不明	-	16.2	14.2	2.6	埴原頁岩	北上山地	中生代前期	第50図	
363	石鏃	S296	埋土(ベルト内)	20.0	8.1	2.0	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図	
364	磨石	S296	埋土	35.5	16.6	5.4	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図	
365	不定形石鏃	S118	埋土一括	34.9	15.2	4.1	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図	
366	石鏃	S115	床面直上	33.9	8.3	5.9	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図	
367	石鏃	S111	埋土(ベルト内)	30.9	15.8	5.8	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図	
368	石鏃	S111	埋土	29.1	19.0	7.1	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図	
369	スクレイパー	S117	-	24.5	30.6	7.1	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図	
370	スクレイパー	S111	埋土	38.8	80.0	11.6	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図	
371	スクレイパー	S114	埋土一括	40.0	35.5	8.0	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図	
372	スクレイパー	S119	埋土	53.5	29.4	10.0	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図	
373	スクレイパー	S14	埋土一括	30.1	25.8	7.9	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図	
374	刮削器類	S299_30	床面直上(重載)	149.9	80.9	62.6	テイサイト	北上山地	中生代白亜紀	第50図	
375	刮削器類	S228(アイザリット)	埋土	133.0	85.7	61.8	礫岩	北上山地	中生代前期	第50図	
376	刮削器類	S24	埋土	119.4	69.9	51.7	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	第50図	
377	刮削器類	S228(アイザリット)	埋土	130.3	73.5	51.9	礫岩	北上山地	中生代前期	第50図	
378	刮削器類	S117	埋土(ベルト内)	113.5	82.0	63.2	-	-	-	第51図	
379	刮削器類	S20	床面直上	105.4	107.9	54.1	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	第51図	
380	刮削器類	S14	S1	130.8	80.7	49.2	テイサイト	北上山地	中生代白亜紀	第51図	
381	刮削器類	S10	床面直上	112.5	73.2	23.7	頁岩	北上山地	中生代前期	第51図	
382	刮削器類	S111	埋土(ベルト内)	127.8	69.7	39.6	テイサイト	北上山地	中生代白亜紀	第51図	
383	刮削器類	S20	柱状埋土	106.2	26.5	23.8	頁岩	北上山地	中生代前期	第51図	
384	刮削器類	S106	床面直上	239.9	40.1	30.2	頁岩	北上山地	中生代前期	第51図	
385	刮削器類	S102	検出直上	90.6	63.4	45.7	-	-	-	第51図	
386	刮削器類	S106	埋土	104.2	73.6	61.4	礫岩	北上山地	中生代前期	第51図	
387	刮削器類	S103	埋土	84.1	32.2	3.2	頁岩	北上山地	中生代前期	第51図	
388	刮削器類	S106	埋土	145.7	64.9	44.0	頁岩	北上山地	中生代前期	第52図	
389	刮削器類	S124	埋土	129.2	80.0	61.6	テイサイト	北上山地	中生代白亜紀	第52図	
390	刮削器類	S111	埋土	115.6	85.9	53.3	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	第52図	
391	刮削器類	S114	埋土	129.1	83.8	67.1	-	-	-	第52図	
392	刮削器類	S116	北壁部体直上	148.2	88.7	68.9	テイサイト	北上山地	中生代白亜紀	第52図	
393	刮削器類	S106	埋土直上	163.7	72.8	56.6	-	-	-	第52図	
394	刮削器類	S10	埋土(ベルト内)	119.2	77.0	40.1	-	-	-	第52図	
395	刮削器類	S129_30	床面直上(重載)	170.2	81.9	51.3	-	-	-	第52図	
396	刮削器類	S103	S202	140.3	68.2	53.1	礫岩	北上山地	中生代前期	第52図	
397	刮削器類	S102	検出直上	120.7	53.1	45.7	礫岩	北上山地	中生代前期	第52図	
398	刮削器類	S106	検出直上	109.9	69.8	61.3	礫岩	北上山地	中生代前期	第52図	
399	多面体礫石	S115	重載部S101	61.7	59.6	40.0	テイサイト	北上山地	中生代白亜紀	第52図	
400	多面体礫石	S129S10	検出直上	72.9	71.0	32.7	礫岩	北上山地	中生代前期	第53図	
401	多面体礫石	S119	中埋土	58.2	57.0	41.1	-	-	-	第53図	
402	多面体礫石	S103	埋土	44.0	28.5	10.0	頁岩	北上山地	中生代前期	第53図	
403	多面体礫石	S120	埋土	104.4	53.4	37.5	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	第53図	
404	刮削器類	S125	埋土	132.8	52.7	36.5	凝灰岩	北上山地	中生代前期	第53図	
405	刮削器類	S106	埋土	109.8	55.8	20.1	-	-	-	第53図	
406	刮削器類	S112	埋土一括	98.4	64.6	29.8	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	第53図	
407	刮削器類	S200	埋土	171.1	71.2	48.7	-	-	-	第53図	
408	刮削器類	S124	埋土(ベルト内)	101.9	57.7	29.1	-	-	-	第54図	
409	磨石	S111	埋土	100.4	80.2	27.3	頁岩	北上山地	中生代前期	第54図	
410	刮削器類	S110	埋土一括	94.7	86.4	20.5	-	-	-	第54図	
411	磨石	S103	埋土	179.5	90.2	46.2	礫岩	北上山地	中生代前期	第54図	
412	磨石	S116	床面直上	7.9	3.7	2.1	-	-	-	第54図	
413	磨石	S111	床面直上	94.3	81.2	39.1	凝灰岩	北上山地	中生代前期	第54図	
414	磨石	S111	床面直上	109.2	36.8	15.7	頁岩	北上山地	中生代前期	第54図	
415	磨石	S117	埋土	141.0	60.1	35.5	礫岩	北上山地	中生代前期	第54図	
416	磨石	S114	埋土	54.6	39.2	25.5	頁岩	北上山地	中生代前期	第54図	
417	磨石	S111	西壁直上	29.5	28.1	22.3	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	第54図	
418	磨石	S123	西壁直上 S1	208.3	70.1	31.5	頁岩	北上山地	中生代前期	第54図	
419	磨石	S106	埋土	116.1	48.1	27.2	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	第54図	
420	磨石	S123	埋土直上 S1	63.4	33.9	14.6	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	第54図	
421	磨石	S111	埋土(ベルト内)	92.5	42.8	37.4	凝灰岩	北上山地	中生代前期	第54図	
422	磨石	S111	1層下壁	68.8	34.3	18.8	凝灰岩	北上山地	中生代前期	第54図	
423	磨石	S102	検出直上	55.8	26.6	12.2	頁岩	北上山地	中生代前期	第54図	
424	磨石	S106	埋土	103.9	52.3	28.7	頁岩	北上山地	中生代前期	第55図	
425	磨石	S14	埋土	75.6	41.7	29.1	凝灰岩	北上山地	中生代白亜紀	第55図	
426	磨石	S124	埋土	70.1	30.9	18.7	凝灰岩	北上山地	宮古群	中生代白亜紀	第55図
427	磨石	S14	埋土	31.1	26.5	13.0	-	-	-	第55図	
428	磨石	S124	埋土下部	14.3	7.7	-	-	-	-	第55図	
429	磨石	S111	埋土	31.1	15.1	7.5	凝灰岩	北上山地	宮古群	中生代白亜紀	第55図
430	磨石	S117	埋土	49.4	20.2	12.9	-	-	-	第55図	
431	磨石	S117	埋土	56.2	19.2	8.1	-	-	-	第55図	
432	磨石	S117	埋土	48.2	20.1	7.6	-	-	-	第55図	
433	磨石	S24	S1 埋土中位	45.7	24.6	10.0	凝灰岩	北上山地	早稲峠山一宮守	古生代ワシドノ紀	第55図
434	磨石	S101	埋土	32.7	18.2	6.8	-	-	-	第55図	
435	石鏃	S111	S3	287.8	205.2	200	凝灰岩	北上山地	宮古群	中生代白亜紀	第55図
436	石鏃	S104	床面直上	192.8	197.1	30.6	-	-	-	第55図	
437	石鏃	S103	床面直上 RS6	354.6	264.2	26.8	礫岩	北上山地	宮古群	中生代白亜紀	第55図
438	石鏃	S111	床面の下	311.3	130.1	25.1	礫岩	北上山地	宮古群	中生代白亜紀	第56図
439	石鏃	S111	S4	176.6	135.5	29.1	-	-	-	第56図	
440	石鏃	S103	床面直上 RS7	439.0	312.4	98.2	花崗閃緑岩	北上山地	小成西方宮古群の一部	中生代白亜紀	第56図
441	石鏃	S119	埋土	71.2	55.2	20.2	-	-	-	第56図	
442	石鏃	S119	埋土	53.7	36.6	16.1	-	-	-	第56図	
443	台石	S103	S52	330.5	246.0	205.0	花崗閃緑岩	北上山地	小成西方宮古群の一部	中生代白亜紀	第56図

第12表 出土遺構別石器数量

遺構名	石鏃	石錐	石砦	石距	スクレイパー	不定形石器	使用痕ある剥片	両端剥片	剥片	磨製石斧	礫器	石皿台類	磨石磨器類	石製品	その他
SI01													1	1	
SI02									1	1					2
SI03									1	1		4	7		
SI04												1			
SI05													1		
SI06							1		1	2			12		
SI07						1									
SI08									1				2		2
SI09							1								
SI10							2	1							
SI11			1	1	2	1	3	1	4	5	1	2	8	1	
SI12															
SI13									1				2		
SI14					1	1							4		1
SI15		1				1			1	2			6		
SI16									1				2		
SI17					1	1	1		2	1			5	3	
SI18						1							2		
SI19					1	1		1				3	1		
SI20													3		1
SI21								1	1				2		
SI22															
SI23										2			4		
SI24										2			8	1	
SI25													2		
SI26															
SI27															
SI28	1						1		5						1
SI29									1				2		
SI30															
SI31													4		
SI32															
SI33															
SI34															
SI35													2		
SI36															
SI37															
SI38															
遺構外									2	1	1		6		
合計	2	1	1	1	5	7	9	4	22	17	2	10	88	6	5

V 自然科学分析

1 黒曜石の産地同定

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県岩泉町小成Ⅱ遺跡では、縄文時代中期末葉とされる黒曜石製石器が出土している。今回の分析調査では、これらの石器について元素分析を行い、原産地の同定を行う。

1. 試料

試料は、小成Ⅱ遺跡から出土した黒曜石製石器2点である。試料には、試料番号1、試料番号2が付されている。試料番号1はSI11の1層下位から出土し、試料番号2は6gグリッドの黒色土層から出土したものである。試料の外観を図版1に示す。

2. 分析方法

(1) 試料の測定

本分析調査では、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(セイコーインスツルメンツ社製SEA2110Lシリーズ卓上型蛍光X線分析計)を用いて元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素である。試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それらを産地の特定のための指標とした。ここでは、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zr、Al/K、Si/Kの値を求め、産地を区別する指標として用いる。

なお、黒曜石製遺物の蛍光X線分析においては、試料の表面の風化程度、試料の厚さおよび試料の形状によって分析値に影響が及ぶ。表面が曇っているほどの風化がある場合には、カリウムの分析値が大きくなるため、Ca/K、Ti/Kの両軽元素比を除いて産地判定をする。試料の厚さが1.5mm以下の場合には、重い元素は小さく測定されるため、分析値に実験で求めた厚さ補正値を乗じて産地判定をする。厚さ0.3mm以下の試料については補正困難なため、産地判定はできない。試料の形状については、厚さの薄い部分を含んでいたり、極端な曲面しかないものなどを測定した場合に、分析値は変動し、産地判定結果は一定しない。そのような場合には、分析場所を変えて多数の分析値により産地を判定し、最も多く判定された産地を選択する。

(2) 産地判定

a) 黒曜石原石の分析

黒曜石の原産地は、北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に分布している。調査を終えている原産地の一部を図1に示す。これら原石について、上述した測定を行い、上記の元素比を求め、分類した。ここでは分類の単位を「群」とよび、例えばその地名を付して「和田峠第1群」などとする。現時点では、日本および近隣国(ロシア、北朝鮮、台湾など)の原石群と、原石産地が不明の遺物で作った遺物群を加えると、合計331個の原石群・遺物群を得ている。産地判定は、試料の元素比とこれら331群の元素比とを比較し、必要条件と十分条件を求めて行う。

b) 産地の判定

上述した各元素比を変量とし、それらの相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT²乗検定を、試料と331個の原石群・遺物群との間で行い、各群に帰属する確率を求めて産地を判定する(東村,1976,1990)。ただし、低い確率(0.1%未満)で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略する。なお本分析法では、低い確率の原産地も確認しているということが重要である。すなわち、低い確率とされた原産地の原石が使用された可能性を考える必要がないという結果でもあるからである。

次に、ホテリングのT²乗検定の定量的な同定結果から、石材の成分組成以外の各産地特有の原石の特徴を考慮して、遺物の原石産地を判定する。石材の成分組成以外の特徴としては、肉眼観察においてキラキラ光る鉱物が多いか少ないか、また光る鉱物は輝石か雲母か、さらに表面の光沢の状況や角礫あるいは円礫の特徴が認められるなどがあげられる。

なお本分析は、遺物材料研究所の協力を得て行ったものである。

3. 結果

各試料の元素比分析結果を表1に示し、ホテリングのT²乗検定結果による原産地とその帰属確率、および検定結果に成分組成以外の特徴などを加えて判定した産地を、表2に示す。2点の試料は、ともに出来島群、鶴ヶ坂群の2群に同定された。出来島群は、青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群である。鶴ヶ坂群は、青森市西部の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴喰地区より採取された原石による群である。原石の産状(採取のし易さや産出量)などから、今回の試料については2点ともに産地判定は出来島としたが、原石採取の可能性は森田村から青森市西部までの広い範囲を考慮する必要がある。

表1. 黒曜石試料の元素比分析結果

試料番号	遺跡名	遺構名・地点名	層位	分析番号	元 素 比									
					Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
1	KN II-13	SI11	1層下位	120575	0.349	0.134	0.234	2.266	0.852	1.032	0.388	0.152	0.036	0.476
2	KN II-13	6gグリット	黒褐色土層	120576	0.360	0.121	0.210	2.017	0.770	1.041	0.333	0.179	0.030	0.421
	JG-1				0.780	0.208	0.072	4.113	0.969	1.260	0.310	0.047	0.031	0.317

JG-1: 標準試料-Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T.& Takeda,E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192 (1974)

表2. 黒曜石試料の産地分析結果

試料番号	遺構名・地点名	分析番号	ホテリングのT ² 検定結果	判定
1	SI11	120575	鶴ヶ坂(94%), 出来島(68%)	出来島
2	6gグリット	120576	出来島(41%), 鶴ヶ坂(41%)	出来島

引用文献

- 東村武信,1976,産地推定における統計的手法,考古学と自然科学,9,77-90.
東村武信,1990,考古学と物理化学,学生社,212p.

図版1 黒曜石試料



1.試料番号1 KN II-13 SI11 1層下位(1)

1cm



2.試料番号1 KN II-13 SI11 1層下位(2)

1cm



3.試料番号2 KN II-13 6gグリット 黒褐色土層(1)

1cm



4.試料番号2 KN II-13 6gグリット 黒褐色土層(2)

1cm

2 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

小成Ⅱ遺跡は、岩手県下閉伊郡岩泉町小本字小成 4-36 他に所在する。測定対象試料は、堅穴住居跡から出土した炭化物 4 点である (表 1)。

2 測定の意義

調査区内から見つかった堅穴住居跡群は、重複関係、土器編年、炉の形態から 4 時期に分けられる。これらのどの時期か明確でない住居跡もあるため、年代測定によって時期決定の手がかりを得る。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸・アルカリ・酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシウウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。

pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を使い、OxCal v4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

試料 4 点の ^{14}C 年代は、4110 \pm 20yrBP (No.3) から 4030 \pm 30yrBP (No.1, 4) の狭い幅に収まり、誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で一致するものも含まれる。暦年較正年代 (1σ) は、古い方から順に No.3 が縄文時代中期中葉から後葉頃、No.2 が中期後葉から末葉頃、No.1、4 が中期末葉から後期初頭頃に相当する (小林編 2008)。

試料の炭素含有率はすべて 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon 19(3), 355-363

表 1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

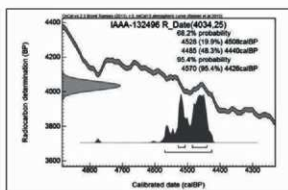
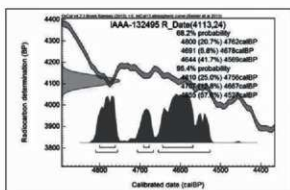
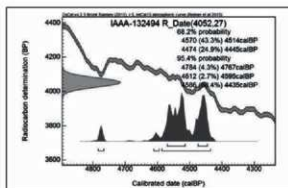
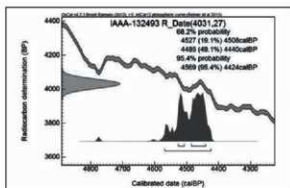
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-132493	No.1	SI04 炉内 下層	炭化物	AAA	-32.72 \pm 0.45	4.030 \pm 30	60.54 \pm 0.21
IAAA-132494	No.2	SI06 炉内 中位層	炭化物	AAA	-23.96 \pm 0.42	4.050 \pm 30	60.38 \pm 0.21
IAAA-132495	No.3	SI11 床面	炭化物	AAA	-26.52 \pm 0.30	4.110 \pm 20	59.93 \pm 0.18
IAAA-132496	No.4	SI19 床面	炭化物	AAA	-27.52 \pm 0.42	4.030 \pm 30	60.52 \pm 0.19

[#6280]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-132493	4,160 \pm 30	59.58 \pm 0.19	4,031 \pm 27	4527calBP - 4508calBP (19.1%) 4485calBP - 4440calBP (49.1%)	4569calBP - 4424calBP (95.4%)
IAAA-132494	4,040 \pm 30	60.51 \pm 0.20	4,052 \pm 27	4570calBP - 4514calBP (43.3%) 4474calBP - 4445calBP (24.9%)	4784calBP - 4767calBP (4.3%) 4612calBP - 4595calBP (2.7%) 4586calBP - 4435calBP (88.4%)
IAAA-132495	4,140 \pm 20	59.74 \pm 0.18	4,113 \pm 24	4800calBP - 4763calBP (20.7%) 4691calBP - 4678calBP (5.8%) 4644calBP - 4569calBP (41.7%)	4810calBP - 4756calBP (25.0%) 4707calBP - 4667calBP (12.8%) 4655calBP - 4527calBP (57.6%)
IAAA-132496	4,080 \pm 20	60.20 \pm 0.18	4,034 \pm 25	4528calBP - 4508calBP (19.9%) 4485calBP - 4440calBP (48.3%)	4570calBP - 4426calBP (95.4%)

[参考値]



[図版] 曆年較正年代グラフ (参考)

VI 総 括

今回の小成Ⅱ遺跡の調査は、「三陸沿岸道路（田老岩泉線）」事業に伴う発掘調査である。対象面積1,900㎡のうち、縄文時代中期後葉を中心とする集落跡が見つかった。

本遺跡が所在する岩手県下関伊都岩泉町小本字小成付近は、山側斜面南側端部に位置し、小成川によって形成された谷底平野及び氾濫平野である。調査で角礫と円礫が混在する礫層が確認され、その上部にT₀-Cuテフラ二次堆積層を確認した。開田時の削平により遺跡の南側は消失していた。南西から南に向かって小成川が流れ、水資源は豊富である。

1 縄文土器

今回の小成Ⅱ遺跡調査で出土した遺物の大半は堅穴住居跡をはじめとする遺構に伴っている。出土土器は縄文時代中期後葉大木9式～大木10式段階が主体である。これ以外の時期に比定されるものでは縄文時代早期中葉の貝殻沈線文土器（Na 30・50・143）、同前期初頭～前葉の織維土器（Na 7・8・160・206・207・259）、同中期後葉大木8b式土器（Na 74・226・227）、同後期前葉の帯縄文文様を持つ土器（Na 260）、同晩期中葉の大洞C₂式土器（Na 112）が出土している。いずれも少量であるためこれらの時期における遺跡の内容は判然としない。ここでは縄文時代中期後葉土器群を対象に若干の検討を加える。既往の編年研究成果として主に丹羽（1981・1991）、森（2008）を参照した。

<大木9式古段階>

大木9式土器がまとまって出土している遺構としてSI01・SI11・SI12・SI15・SI20・SI21・SI28の各住居跡が挙げられる。このうち、断面三角形に調整された隆線を用いて口縁部突起直下の渦巻文を中心とした横位に展開する文様構成をとるSI11 - Na 70・72・77、SI21 - Na 155、SI35 - Na 215等が大木9式古段階に相当すると考えられる。また、SI12 - Na 100、SI21 - Na 155では胴部の主文様は並列する沈線による長楕円形区画であり大木9式新段階の文様構成に近いが、口縁部から頸部に見られる立体的な突起を伴う隆線文様の要素から古段階に含まれると考えられる。これらに加えて、2本平行する隆線、あるいは隆沈線による縦長区画文が施されるSI11 - Na 73・87、SI15 - Na 117、SI21 - Na 157、SI22 - Na 168等も破片資料という制約はあるが、大木8b式から続く施文手法を継承していると考えられ古段階の土器と判断される。

<大木9式新段階>

基本的には沈線文による並列する長楕円形区画が主たる文様要素となり、横位に連続する文様構成をとらないものがこの段階に相当すると判断した。このうち長楕円形区画文が並列しその隙間にステッキ状の沈線文が加えられる文様の土器はSI11 - Na 68・69・76、SI20 - Na 144、SI28 - Na 187、SI37 - Na 218等比較的多く見られる。また比較的小型で単純な器形の鉢ないし深鉢形で、波状口縁頂部から垂下する無文部に渦巻文を伴うステッキ状の文様が加えられるもの（SI11 - Na 77・78、SI20 - Na 144等）もこの段階に伴うものと考えられる。

<大木10式古段階>

SI05・SI06に良好なまとまりがある。充填縄文手法を用いて横位に入り組む波頭状、横長のS字状文様が展開する。SI06 - Na 38・39のように口縁部の無文部や文様図形内の無文部に刺突列点が含まれるものを含む。刺突は半裁竹管先端を使用したD字形のものである。無文部の交点等に比較的

大きめの浅い円形刺突が伴う例がある（SI05 - Na.31、SI06 - Na.38・39等）。文様構成の全体が判明しない破片資料も概ねこの段階に含まれるものと考えられる。また、地文のみの深鉢のうち上半が緩く外反し縄文縦位回転が施されたSI03 - Na.10・11、SI05 - Na.32、SI06 - Na.50・51、SI19 - Na.131～133、SI33 - Na.212等は当該段階に伴う可能性が高い。

<大木10式新段階>

出土数は少なく頸部に刻みを加えた隆帯が巡るもの（SI03 - Na.14）、頸部沈線に沿って刺突列が巡るもの（SI06 - Na.40）等数点が見られるに過ぎない。文様の一部しか判明しない破片資料にこの段階に該当するものが含まれる可能性はあるが、絶対数から見る限り僅少であると考えられる。

以上からまとめると、大木9式古段階から大木10式古段階にかけてが遺跡の主要な時期であることは確実である。住居跡等個々の遺構に対する時期比定は、埋設土器、床面出土一括資料といった良好な出土状態に恵まれていない面はあるものの、概ね以下のように判断される。小片のみの出土で根拠が弱いものには疑問符を付している。また不明とした遺構は遺物出土がほとんどない等根拠に乏しい遺構だが、周辺状況から見る限り上記段階のいずれかに含まれる可能性が高い。

大木9式古段階	SI11・SI21・SI28
＊ ?	SI12・SI24・SI35
大木9式新段階	SI01・SI15・SI37
＊ ?	SI07・SI08・SI14・SI20・SI22・SI23・SI25
大木10式古段階	SI03・SI05・SI06・SI19
＊ ?	SI09・SI10・SI16・SI17・SI26・SI33・SI38
不明	SI02・SI04・SI13・SI18・SI27・SI29・SI30・SI31・SI32・SI34・SI36

引用・参考文献

- 丹羽茂 1981「大木式土器」『縄文文化の研究』第4巻 pp.43-60
 丹羽茂 1991「中期大木土器様式」『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』pp.346-352
 森幸彦 2008「大木9・10式土器」『総覧 縄文土器』pp.360-357

2 石 器

遺跡全体を見ると、剥片石器の出土量は住居数に対して極端に少なく、対して敲磨器類の出土量が異様に多い。また、遺跡内には角礫・亜角礫が広範囲にわたり分布している。にも関わらず、まとまった量の円礫が多数出土している。これら円礫は、角礫・亜角礫の多い当該遺跡において、明らかに外部から持ち込まれたものであると判断される。出土場所は住居壁際立ち上がり面が最も多く、住居内に人為的に持ち込まれたものである可能性が高い。円礫の存在は当該遺跡に住む人々が小成川等円礫の形成される場所に頻繁に行き来し、居住区内に持ち込んでいたことを示している。

黒曜石の山地同定では、青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部出来島群と青森市西部の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴喰地区産との結果であった。2点とも原石採取は森田村から青森市西部までである。小成川遺跡と同じく、三陸沿岸に所在する岩手県普代村力持遺跡（星 2008）では黒曜石が11点出土しており、産地同定から出来島産であることが確認されている。この事実は、本遺跡を含む三陸沿岸と青森県西津軽地域に交易が存在していたことを示す貴重な資料といえる。

3 遺 構

竪穴住居跡 38 棟、溝跡 1 条、焼土遺構 1 基、土坑 2 基を検出した。前々項で述べたように、遺構からはいずれも大木 8 b ~ 10 式、縄文中期中葉~中期末葉を主体とする土器が出土した。検出された住居には縄文中期中葉~後葉にかけて出現する複式炉が伴う。各住居に大きな時期差はないが、重複関係、出土土器を細かく精査すると若干の時期差が認められる。これらのことから集落は縄文時代中期中葉~後葉にかけて継続的に営まれてきたが集落の存続時期は極めて短いことが明らかとなった。中でも大木 8 b 式が出土している SK05・SI11 は共に遺跡内で最も古い時期に相当する。また、遺物を伴わない住居、もしくは年代特定の根拠に欠ける住居から出土し、且つ出土状態の良い炭化物を自然科学分析試料とした。結果、SI11 < SI06 < SI04・SI19 (試料 1 = SI04 炉内、2 = SI06 炉内、3 = SI11 床面、4 = SI19 床面) の順に縄文時代中期中葉~後葉、中期後葉~末葉、中期末葉~後期初頭の結果となった。これは SI06 と SI19 の重複関係と一致するが、各々から出土した土器型式はいずれも大木 10 式古段階であり、両遺構に新旧関係はあるものの大きな時期差はないものと推測される。さらに、遺物点数が少量である SI04 も分析結果から同時期であると判断される。

全体の分布をみると調査区南東は開田時の削平による消失が著しいため、住居の検出は西側より少ない。よって、検出数の割合差が南北によって大きい。このため、分布状況で概ね把握することはできない。しかし、概ね南北グリッドライン¹を境に西側に複式炉の分布が多く、また同じグリッドラインを境に東側からは石囲炉をもつ住居の分布がみられる。前述の時期差を考慮すると、当初は調査区北側の比較的標高の高い位置に住居を構築し、次時期には前面に広がりを見せる。最終期になると、調査区西側にやや偏る。

検出された住居中、壁面がわずかに残存するものは 38 棟中 23 棟で、残り 15 棟は炉跡、柱穴配置、掘方、壁溝等からの推測範囲にとどまる。

住居に伴う炉形態は 38 棟のうち地床炉、石囲炉、複式炉の 3 形態である。炉形態を分類したのが第 58 ~ 61 図である。遺跡内で地床炉を持つ住居は 6 棟で全体の 16% である。石囲炉を持つ住居は 18 棟で全体の 47%、複式炉を持つ住居は 13 棟で 35% である。不明は 1 棟で 2% である。

住居炉形態では、東北地方南部に見られる石組み部底面に敷石を施す複式炉は当該遺跡では 1 基もみられず、検出されたのは東北地方北部に多いとされる縁石のみの簡素な石組み部 + 石組み部、もしくは石組み部 + 掘方前庭部 (特殊ビットを有するものもある) の複式炉のみである。また、石組み部壁面に扁平礫を用い、積み石状にするもの、長方形の石囲部を扁平礫で区画するのみの簡素なものがみられる。

複式炉長軸方向をみると風向き等、自然環境が同一状況下におかれていた場合に一定になる可能性が高く、これらを分類すると以下のようになる。

長軸方向北西向き	SI03・SI05・SI07・SI13・SI14・SI16・SI28
長軸方向北北西向き	SI01・SI08
長軸方向北向き	SI09・SI29

うち出土した土器型式を踏まえると、SI14・SI07、SI03・SI05 はそれぞれ大木 9 式新段階、大木 10 式古段階に属し、4 棟の住居配置は位置、距離とも規格外をもつ。

また、本遺跡の北に位置する田野畑村浜岩泉Ⅰ遺跡（金子・高橋 1998）では、この時期特有の方形の石囲炉が検出されており、これは今回確認された SI11、SI19、SI22、SI31、SI35 と同様である。

4 三陸沿岸北部の縄文中期後葉集落の消長性について

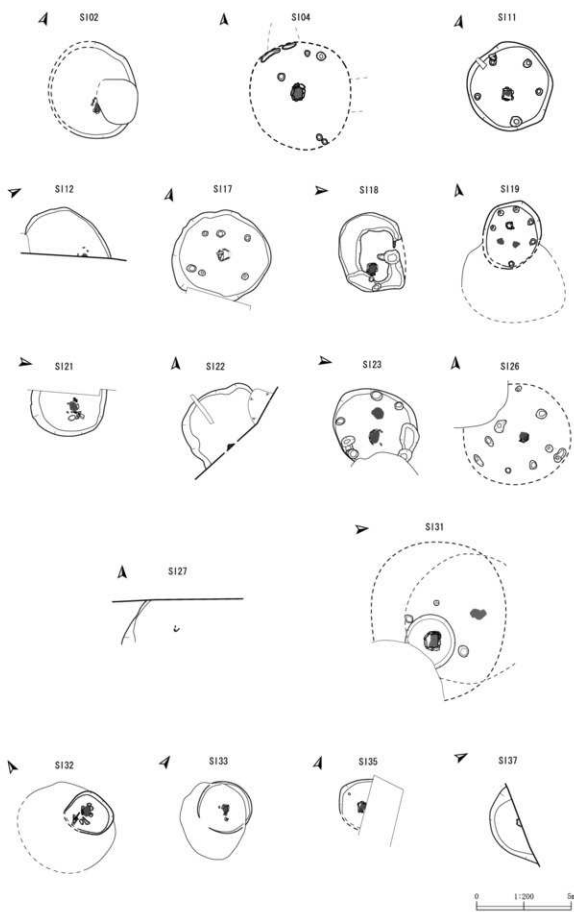
地床炉、石囲炉、複式炉を伴う竪穴住居跡 38 棟が検出され、いずれも大木 9 式古段階～10 式古段階を主体とする縄文土器が出土した小成Ⅱ遺跡は、極短時期に構築され、継続期間も極めて短期間であった。

ちょうど遺跡の西側を南流し、南東で曲折、太平洋へ流れ出る河岸段丘上に立地する当該遺跡は、遺物の出土量、見つかった住居の棟数からこの地域の拠点集落であった可能性が高い。

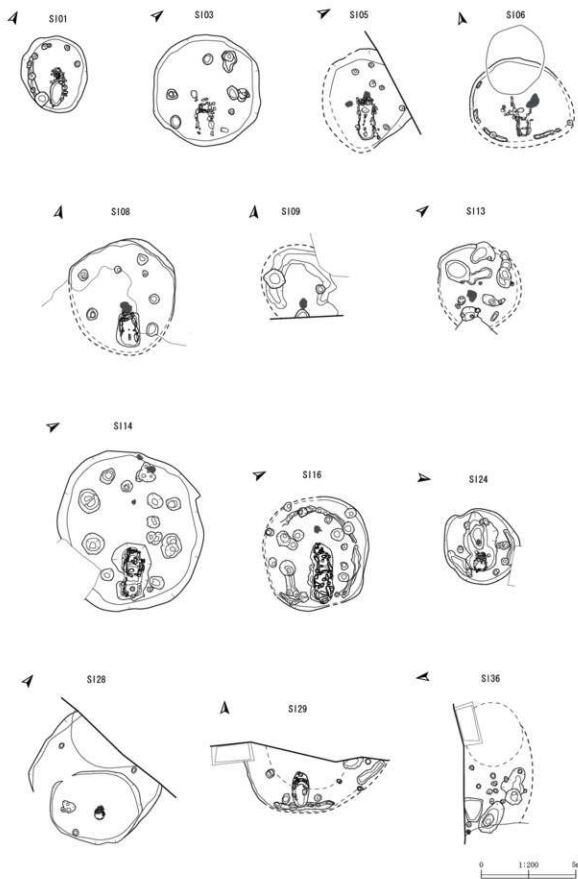
縄文時代中期になると、北緯 40° 以南はそれまで客体的に見て取れた円筒式土器文化が大木式土器文化に集約されていく。小成Ⅱ遺跡も同様の大木式土器の文化要素を持つ。また、8 b 式以降の岩手県三陸沿岸同時期集落をみると、久慈市宇部町の三崎Ⅲ遺跡（大木 8 b 式）、普代村堀内の堀内机遺跡（大木 8 式）、同じく普代村天拝板の力持遺跡（大木 2～10 式）、田野畑村島越立石野Ⅰ遺跡（大木 1～4・8 a～10 式）、同じく田野畑村浜岩泉Ⅰ遺跡（大木 8 b～9 式）、岩泉町安家の大平Ⅰ遺跡（大木 7 b～8 式）、岩泉町岩泉森の越遺跡（大木 7 b～10 式）等があげられる。

小成Ⅱ遺跡は田野畑村に位置する浜岩泉Ⅰ遺跡から直線距離で約 16Km、岩泉町森の越遺跡から約 28Km、乙茂Ⅰ遺跡から約 18Km である。力持遺跡発掘調査報告書（星 2008）内で筆者が述べているように、三陸沿岸部には縄文時代前期からの拠点集落が点在し、中には力持遺跡のように長時期にわたり集落が存続していく長期的なもの、小成Ⅱ遺跡のように短期的なものと 2 パターン存在する。各遺跡間の位置関係は 2～11Km 圏内に分布していることが指摘されているが、今回の調査で明らかになった小成Ⅱ遺跡は前述の近隣同時期遺跡からやや離れた位置に立地する。しかし、当該遺跡と浜岩泉Ⅰ遺跡はほぼ同時期の遺跡であり、間の小本川河口近辺、もしくは河岸段丘上に同様拠点集落が存在する可能性があげられる。いずれにせよ、今回の調査結果から、以前から指摘されていたこの地域の拠点集落の分布における、一部の空白部分を埋める成果を上げることができたことは確かである。

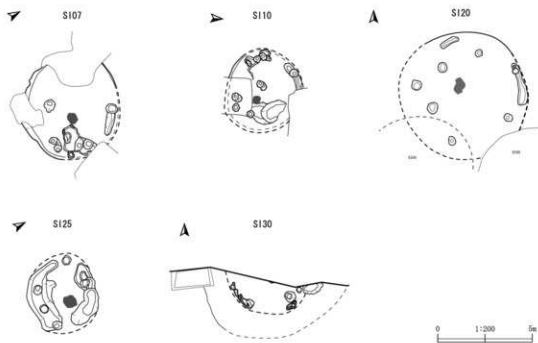
今回の小成Ⅱ遺跡調査成果を概観した。縄文時代中期後葉の集落遺跡は岩泉町内沿岸部では希少な事例だが、近隣に接する北部田野畑村と南部宮古市沿岸部では近年の発掘調査により同時期集落遺跡が多数見つかっている。今後、さらに同沿岸地域の実態を解明する上で、より詳細にかつ広域に比較検討する必要がある。



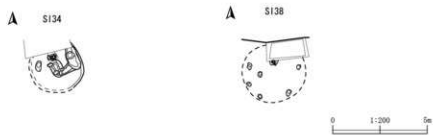
第58图 住居集成图1 (石圈炉)



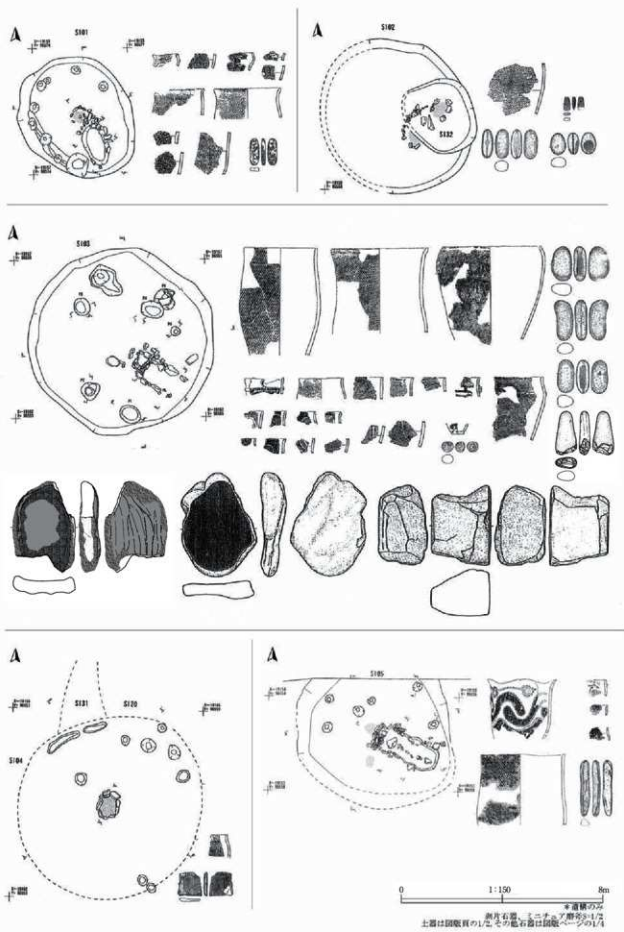
第59圖 住居集成圖2 (複式戶)

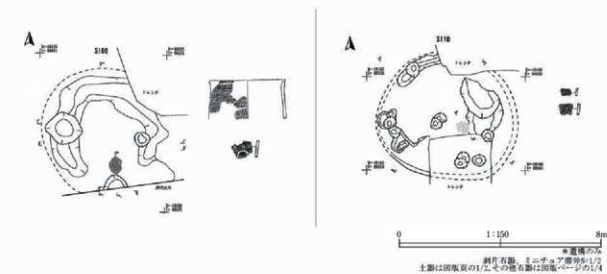
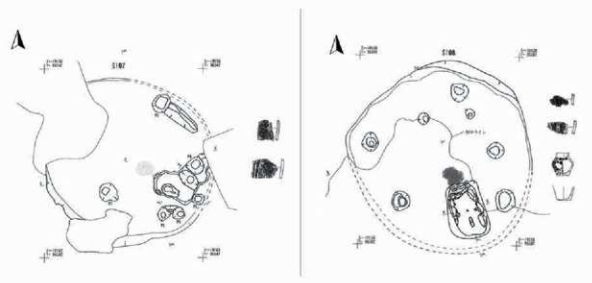
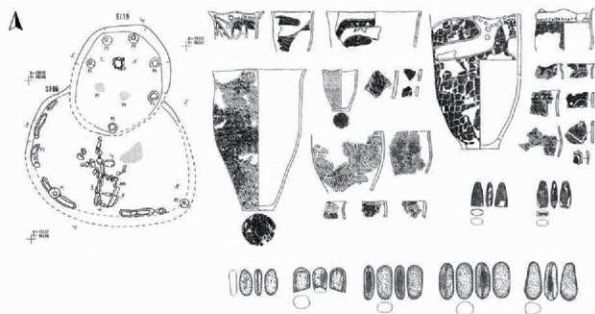


第60図 住居集成図3 (地床炉)

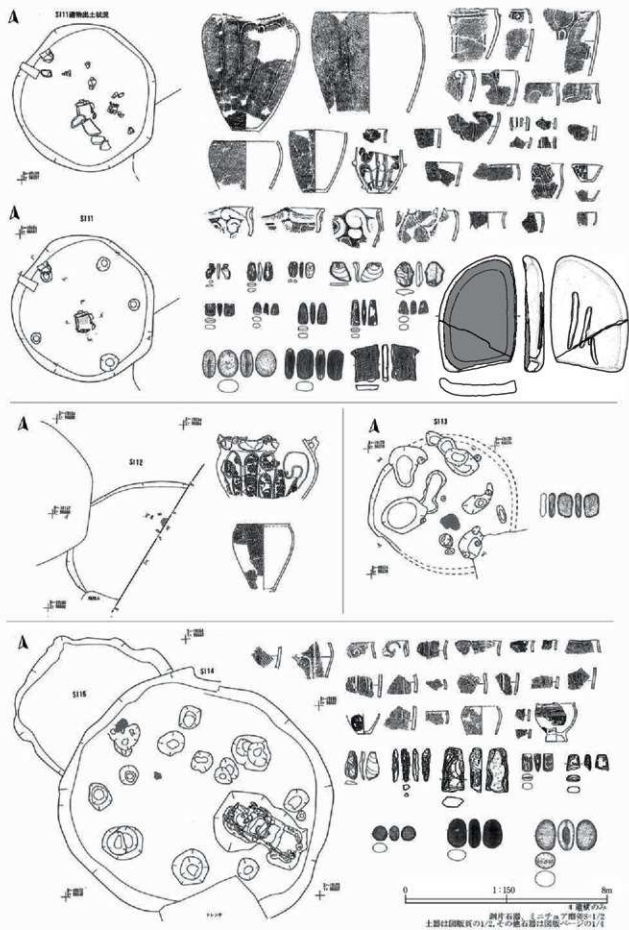


第61図 住居集成図4 (土器埋設)

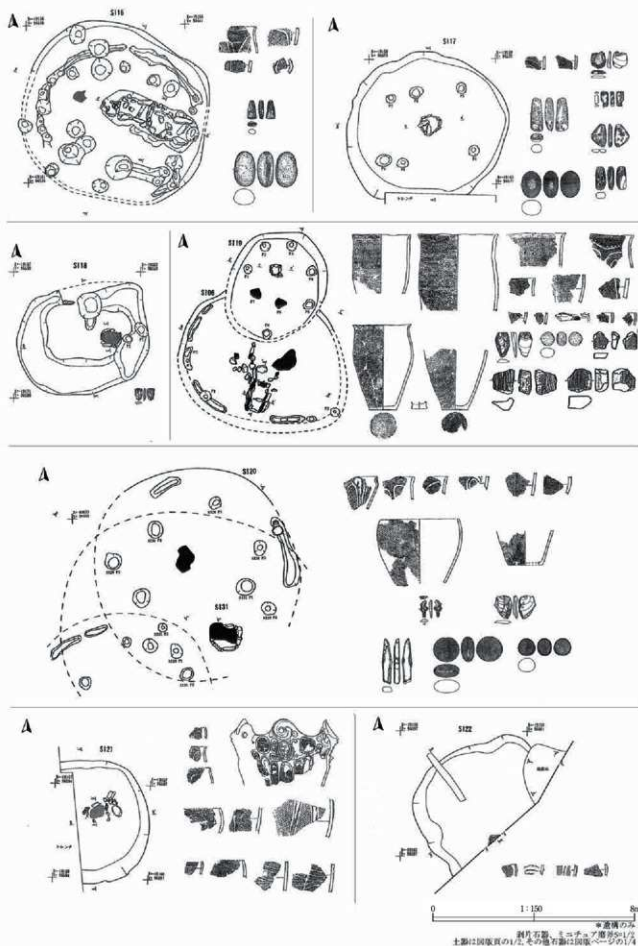




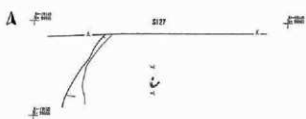
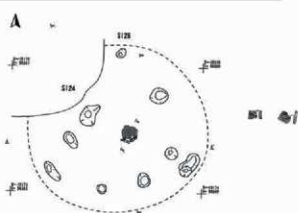
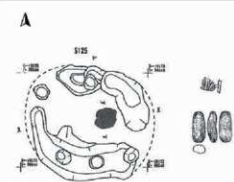
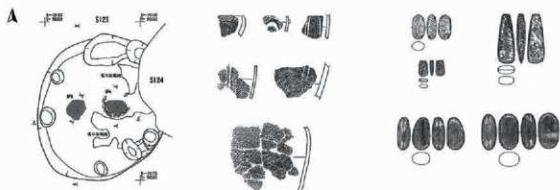
第63図 遺構内出土遺物集成2



第64図 遺構内出土遺物集成3



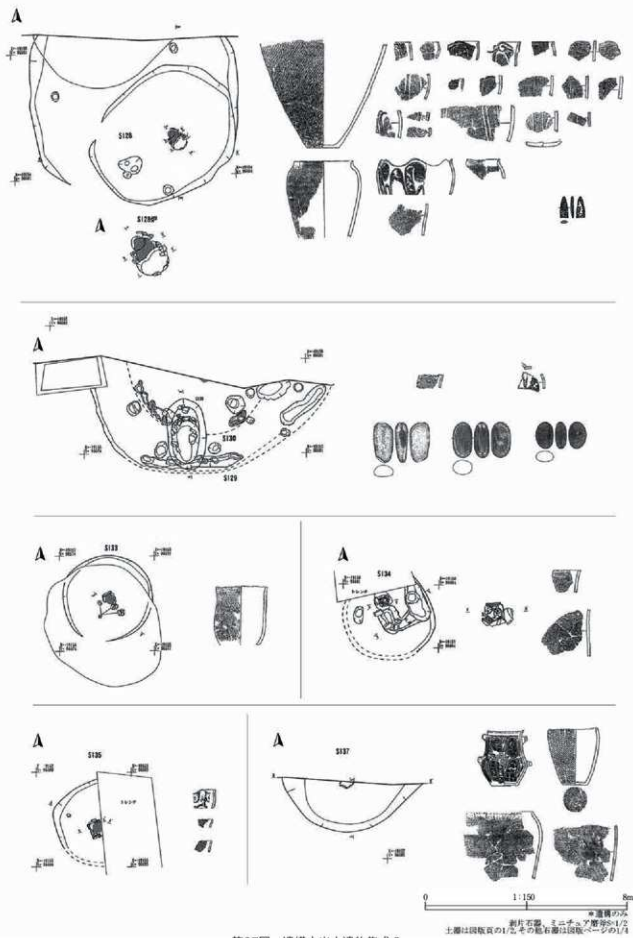
第65図 遺構内出土遺物集4



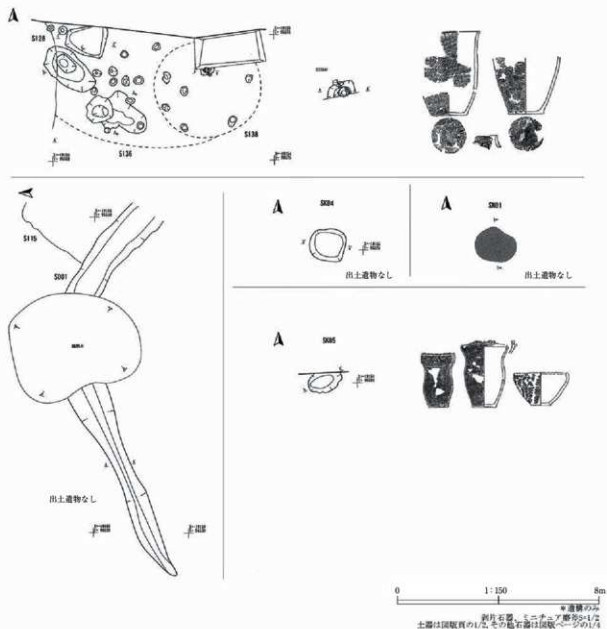
出土遺物なし

0 1:150 5m
 *遺構のみ
 斜線区画、ミニチュア表示のものは
 土師は図版頁の1/4、その他の遺物は図版ページの1/4

第66図 遺構内出土遺物集成 5



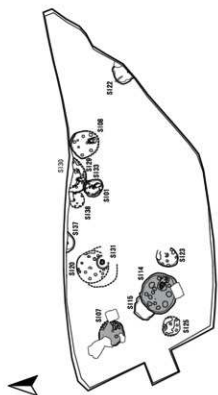
第67図 遺構内出土遺物集成6



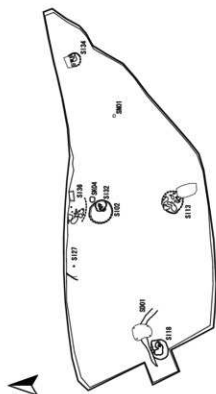
第68図 遺構内出土遺物集成7

引用・参考文献

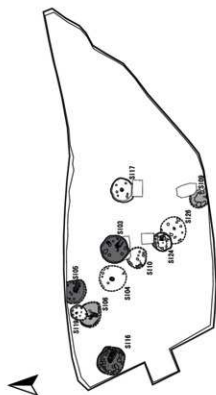
- 高木 晃 2013「VI総括」『大畑遺跡発掘調査報告書』pp148-154 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第606集
金子昭彦・高橋興右衛門 1998「IVまとめ」『浜岩泉1発掘調査報告書』pp173-174 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第276集
星 雅之 2008「VII総括」『力持遺跡発掘調査報告書』pp592-598 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第510集
星 雅之・須原 拓 2011「岩手県内における縄文時代中期後葉から後期初頭にかけての変化について」『東北地方における中期/後期変動期：4・3ka イベントに関する考古学現象①』pp43-57
菅野智則 2005「複式印を有する縄文集落の分布」『日本考古学協会2005年度福高大会シンポジウム』資料集
柳澤清一 1990「大木9-10式土器論（上）」『先史考古学研究』pp45-71 阿佐ヶ谷先史学研究会



大木9式新段階



大木9式古段階

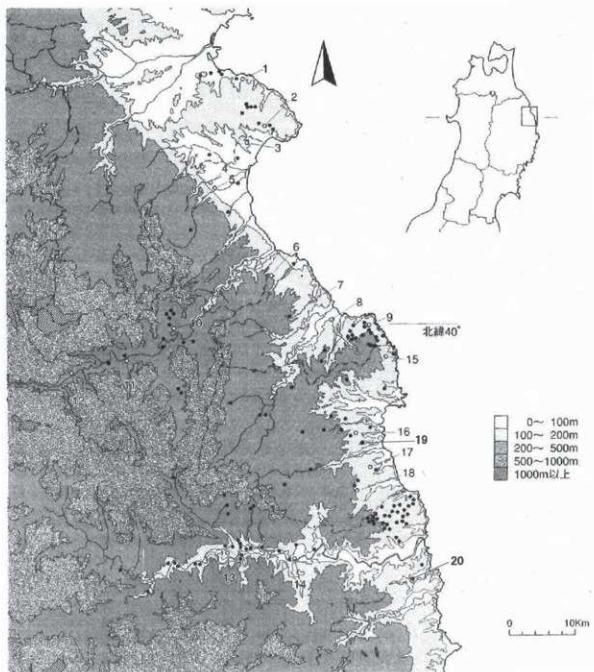


大木10式古段階

縄文時代中期後半段階不明



第69図 時期別変遷図



第13表 三陸沿岸北部遺跡表

遺跡No.	遺跡名	所在地	遺跡種別	時代	調査内容・調査方法・調査時期
1	五虎子遺跡	九龍村五虎子	土壇・土器	縄文(中)・弥生	円筒式土壇土器式土壇に、土中から土器
2	三輪遺跡	九龍村中洲村	土壇・土器	縄文(中)・弥生	円筒式土壇・土壇式土壇、丸木式・丸木式
3	武内遺跡	碧山村碧山	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
4	早島遺跡	碧山村碧山	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
5	上内遺跡	碧山村碧山	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
6	鹿内遺跡	碧山村碧山	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
7	方井遺跡	碧山村方井	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
8	丸石遺跡	碧山村丸石	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
9	下内遺跡	碧山村下内	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
10	河内遺跡	碧山村河内	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
11	柳井遺跡	碧山村柳井	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
12	丸平遺跡	碧山村丸平	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
13	藤中遺跡	碧山村藤中	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
14	乙茂子遺跡	碧山村乙茂	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
15	丸事子遺跡	碧山村丸事	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
16	丸事子遺跡	碧山村丸事	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
17	丸事子遺跡	碧山村丸事	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
18	丸事子遺跡	碧山村丸事	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
19	丸事子遺跡	碧山村丸事	土壇	縄文(中)	円筒式土壇
20	小成遺跡	碧山村小成	土壇	縄文(中)	円筒式土壇

『力持遺跡発掘調査報告書』より転載。一部加筆

『力持遺跡発掘調査報告書』より転載。一部加筆

第70図 三陸沿岸北部遺跡

- 酒井宗孝 1987 「岩手県北部における縄文時代中期後葉から後期前葉の住居跡」『紀要Ⅷ』p.45～70
 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 岩泉町教育委員会 1983『森の越道跡』岩泉町文化財報告第5集
 1984『森の越道跡』岩泉町文化財報告第7集
 1985『森の越道跡』岩泉町文化財報告第9集
 1986『森の越道跡』岩泉町文化財報告第11集
 1987『森の越道跡-第13次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第13集
 1988『森の越道跡-第14次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第15集
 1988『森の越道跡-第15次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第16集
 1989『森の越道跡-第16次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第17週
 1989『森の越道跡-第17次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第19集
 1991『岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅰ』岩泉町文化財調査報告第23集
 1992『岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅱ』岩泉町文化財調査報告第24集
 1993『岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅲ』岩泉町文化財調査報告第25集
 1994『岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅳ』岩泉町文化財調査報告第26集
 1994『森の越道跡-第20次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第27集
 1995『茂師貝塚発掘調査報告書』岩泉町文化財調査報告第29集
 1997『森の越道跡-第22次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第29集
 1998『森の越道跡-第22・23次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第31集
 1999『森の越道跡-第25次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第33集
 2000『森の越道跡-第27次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第34集
 2001『森の越道跡-第28次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第36集
 2002『中瀬Ⅰ遺跡』岩泉町文化財報告第39集
 2003『森の越道跡-第31次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第40集
 2005『沢廻遺跡・森の越道跡発掘調査報告書』岩泉町文化財報告第42集
 2006『豊岡Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩泉町文化財調査報告第43集
 2007『森の越道跡-第33次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第44集
 2007『森の越道跡-第34次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第45集
 2010『森の越道跡-第35次発掘調査報告書-』岩泉町文化財報告第46集
- (財) 岩手県埋蔵文化財センター 1983『小堀内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第52集
 2004『和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第466集
 2004『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第452集
- 田野畑村教育委員会 1990『南大戸Ⅲ・Ⅳ遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第1集
 1998『切牛Ⅱ遺跡・真木沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第3集
 2000『大戸赤空遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第5集
 2001『田野畑村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』田野畑村文化財調査報告書第6集
 2001『立石野Ⅰ遺跡 縄文時代後期の列石遺構の調査』田野畑村文化財調査報告書第7集
 2002『田野畑村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』田野畑村文化財調査報告書第8集
 2002『立石野Ⅰ遺跡 縄文時代後期の列石遺構の調査』田野畑村文化財調査報告書第9集
 2007『立石野Ⅰ遺跡 第9～14次調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第14集
 2008『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第15集
 2008『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書 第4次調査の概要』田野畑村文化財調査報告書第16集
 2010『和野新稲神社遺跡 第2次発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第17集
 2013『机道跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第19集
- 宮古市教育委員会 1989『千鶴遺跡発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財報告書第16集

鈴木克彦・鈴木保彦 2009 『集落の変遷と地域』

長坂一雄 1982 『縄文文化の研究』

早稲田大学文学部考古学研究室 1997 『館石野1遺跡発掘調査報告書』

写 真 图 版





調査前風景（西から）



基本層序 1（北西から）



基本層序 4（北西から）



基本層序 2（北西から）



基本層序 3（北西から）

写真図版 1 調査前風景・基本層序



SI01 竪穴住居全景 (南から)



SI01 竪穴住居 B-B' 断面 (西から)



SI01 複式炉 a-a' 断面 (東から)



SI01 複式炉燃焼部 a-a' 裁ち割り (西から)

写真図版2 SI01 竪穴住居跡



SI02 竪穴住居全景（東から）



SI02 石囲炉敷ち割り（南から）



SI02 石囲炉敷ち割り（南から）



SI02 竪穴住居 A-A' 断面（南から）



SI32 竪穴住居 A-A' 断面（北から）



SI03 竪穴住居全景（南東から）



SI03 竪穴住居 B-B' 断面（東から）



SI03 竪穴住居 A-A' 断面（南から）

写真図版 4 SI03 竪穴住居跡（1）



SI03 複式炉断面 (東から)



SI03 柱穴 P 1 断面 (南西から)



SI03 埋設土器検出状況 (北から)



SI03 断面 (北西から)



SI03 柱穴 P 3 断面 (北西から)



SI03 柱穴 P7 断面 (北東から)



SI03 柱穴 P 2 断面 (東から)



SI03 柱穴 P 5 断面 (南東から)

写真図版 5 SI03 竪穴住居跡 (2)



SI04 竪穴住居全景 (南から)



SI04 竪穴住居 A-A' 断面 (南東から)



SI04 竪穴住居 B-B' 断面 (南西から)



SI04 石囲炉断面 (北西から)

写真図版 6 SI04 竪穴住居跡



SI05 竪穴住居全景（南東から）



SI05 竪穴住居 A-A' 断面（西から）



SI05 竪穴住居 B-B' 断面（北から）

写真図版 7 SI05 竪穴住居跡（1）



SI05 竪穴住居様式炉崩落石あり (南東から)



SI05 竪穴住居様式炉完備 (南東から)



SI05 竪穴住居跡検土検出状況 (南東から)



SI05 柱穴上土器出土状況 (南東から)



SI05 竪穴住居土器出土状況 (東から)



SI05 壁際柱穴剥片出土状況 (東から)



SI05 柱穴 1 断面 (東から)



SI05 柱穴 2 断面 (東から)

写真図版 8 SI05 竪穴住居跡 (2)



SI06・19 竪穴住居全景（南から）



SI06・19 竪穴住居 A-A' 断面（東から）



SI06・19 竪穴住居 B-B' 断面（南から）

写真図版9 SI06 竪穴住居跡（1）



SI06 複式炉全景 (南から)



SI06 複式炉 a-a' 断面1 (東から)



SI06 複式炉 b-b' 断面2 (南から)



SI06 複式炉上遺物出土状況 (南東から)



SI06 焼土検出状況 (南西から)



SI06 焼土敷り割り (南西から)



SI06 燼出土状況 (南から)



SI06 竪穴住居完掘 (南西から)

写真図版10 SI06 竪穴住居跡 (2)



SI07 竪穴住居全景 (南東から)



SI07 竪穴住居 A-A' 断面 (南から)



SI07 焼土裁ち割り (南西から)



SI07 様式炉完掘 (南東から)

写真図版11 SI07 竪穴住居跡



SI08 竪穴住居全景（南から）



SI08 竪穴住居 A-A' 断面（西から）



SI08 竪穴住居 B-B' 断面（南から）

写真図版12 SI08 竪穴住居跡（1）



SIO8 複式炉全景 (南から)



SIO8 複式炉断面 (西から)



SIO8 複式炉 b-b' 断面 (南から)



SIO8 複式炉出土撤ち割り (西から)



SIO8 複式炉完掘 (南から)



SIO8 掘出土状況 (南から)



作業風景 (南東から)



SI09 竪穴住居全景 (南から)



SI09 複式炉全景 (南から)



SI09 炉惣縁部截ち割り (南西から)



SI09 炉前底部土器出土状況 (南から)

写真図版14 SI09 竪穴住居跡



SI10 竪穴住居全景 (南東から)



SI10 竪穴住居 A-A' 断面 (南から)



SI10 竪穴住居 B-B' 断面 (南東から)



SI10 地床炉 (南東から)



SI10 地床炉載ち割り (南西から)

写真図版15 SI10 竪穴住居跡



SI11 竪穴住居全景（南から）



SI11 竪穴住居 A-A' 断面（南西から）



SI11 竪穴住居 B-B' 断面（南東から）

写真図版16 SI11 竪穴住居跡（1）



SI11 竪穴住居 c-c' 断面 (南西から)



SI11 石囲炉全景 (南から)



SI11 石囲炉 a-a' 截ち割り (南から)



SI11 石囲炉 b-b' 截ち割り (西から)



SI11 遺物出土状況1 (南西から)



SI11 遺物出土状況2 (北東から)



遺物出土状況 (北東から)



遺物出土状況 (東から)



SI12 竪穴住居全景（北西から）



SI12 竪穴住居 A-A' 断面（西から）



SI12 竪穴住居 B-B' 断面（北西から）

写真図版18 SI12 竪穴住居跡



SI13 竪穴住居全景 (南東から)



SI13 竪穴住居 A-A' 断面 (南東から)



SI13 竪穴住居 B-B' 断面 (北東から)

写真図版19 SI13 竪穴住居跡



SI14 雙穴住居全景 (南東から)



SI14 雙穴住居 A-A' 断面 (南から)



SI14 雙穴住居 B-B'・C-C' 断面 (東から)

写真図版20 SI14 雙穴住居跡 (1)



SI14 複式炉全景 (南東から)



SI14 複式炉完掘 (北東から)



SI14 複式炉断面 (南東から)



SI14 複式炉 a-a' 断面 (南西から)



SI14 主軸上焼土1 (北東から)



SI14 主軸上焼土1 藪ち割り (東から)



SI14・15 竪穴住居全景（北西から）



SI15 竪穴住居 A-A' 断面（南西から）



SI14・15 焼土2 裁ち割り（西から）



SI14・15 焼土裁ち割り（南西から）



作業風景

写真図版22 SI14（3）・15 竪穴住居跡



SI16 雙穴住居全景 (南東から)



SI16 雙穴住居 A-A' 断面 (南東から)



SI16 雙穴住居 B-B' 断面 (南西から)

写真図版23 SI16 雙穴住居跡 (1)



SI16 複式炉全景 (南東から)



SI16 複式炉完掘 (南東から)



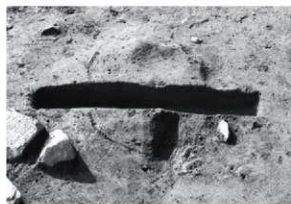
SI16 複式炉 b-b' 断面 (南東から)



SI16 複式炉 a-a' 断面 (南から)



SI16 焼土全景 (南東から)



SI16 焼土 藪ち割り (南東から)

写真図版24 SI16 竪穴住居跡 (2)



SI17 竪穴住居全景（北から）



SI17 竪穴住居 B-B' 断面（北から）



SI17 竪穴住居 A-A' 断面（東から）



SI17 石囲炉検出状況（北から）



SI17 石囲炉掘ち割り（北から）

写真図版25 SI17 竪穴住居跡



SI18 竪穴住居全景 (南東から)



SI18 竪穴住居 A-A' 断面 (西から)



SI18 竪穴住居 B-B' 断面 (南から)



SI18 石囲炉敷ち割り (東から)

写真図版26 SI18 竪穴住居跡



SI19 竪穴住居完掘 (北から)



SI19 竪穴住居 A-A' 断面 (南東から)



SI19 竪穴住居 C-C' 断面 (南から)



SI19 竪穴住居 c-c' 断面 (南から)



遺物出土状況 (北から)

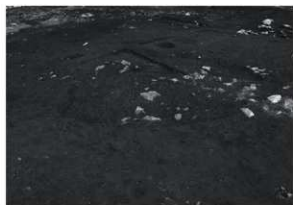
写真図版27 SI19 竪穴住居跡



SI20 竪穴住居全景 (南から)



SI20 竪穴住居 B-B' 断面 (南西から)



SI20 竪穴住居 A-A' 断面 (南東から)



SI20 柱穴 P 2 断面 (西から)



SI20 柱穴 P 4 完掘 (南東から)

写真図版28 SI20 竪穴住居跡



SI21 竪穴住居全景（東から）



SI21 竪穴住居 B-B' 断面（北から）



SI21 石囲炉 b-b' 裁ち割り（東から）



SI21 竪穴住居 A-A' 断面（東から）

写真図版29 SI21 竪穴住居跡



SI22 竪穴住居全景（北から）



SI22 竪穴住居 A-A' 断面（北から）



SI22 竪穴住居 B-B' 断面（南西から）



SI22 石囲炉全景（北西から）

写真図版30 SI22 竪穴住居跡



SI23 雙穴住居全景 (南から)



SI23 雙穴住居 B-B' 断面 (東から)



SI23 雙穴住居 A-A' 断面 (南から)

写真図版31 SI23 雙穴住居跡 (1)



SI23 竪穴住居磨製石斧出土状況（北東から）



SI23 竪穴住居石囲炉敷ち割り（東から）



SI23 竪穴住居焼土検出状況（南から）



SI23 竪穴住居焼土敷ち割り（南東から）



6K～6N グリッド以南終了範囲（北西から）

写真図版32 SI23 竪穴住居跡（2）



SI24 竪穴住居全景 (東から)



SI24 竪穴住居 A-A' 断面 (南東から)



SI24 竪穴住居 B-B' 断面 (南西から)



SI24 複式炉 a-a' 断面 (南から)

写真図版33 SI24 竪穴住居跡



SI25 竪穴住居全景（東から）



SI25 竪穴住居 A-A' 断面（西から）



SI25 竪穴住居 B-B' 断面（南から）



SI25 地床炉全景（東から）



SI25 地床炉載ち割り（東から）

写真図版34 SI25 竪穴住居跡



SI26 竪穴住居全景 (南から)



SI26 竪穴住居 B-B' 断面 (西から)



SI26 竪穴住居 A-A' 断面 (南西から)



SI26 石面炉載ち割り (北西から)

写真図版35 SI26 竪穴住居跡



SI27 竪穴住居全景（北から）



SI27 竪穴住居 A-A' 断面（南から）



SI27 石囲炉敷ち割り（東から）



作業風景（北から）



作業風景（南東から）

写真図版36 SI27 竪穴住居跡



SI28 竪穴住居全景 (南東から)



SI28 竪穴住居 A-A' 断面 (南から)



SI28 竪穴住居 B-B' 断面 (南西から)



SI28 竪穴住居 C-C' 断面 (南から)

写真図版37 SI28 竪穴住居跡 (1)



SI28 竪穴住居様式伊全景 (南東から)



SI28 竪穴住居 a-a' 断面 (南西から)



SI28 竪穴住居様式伊 b-b'・c-c' 断面 (南東から)



調査区東側 (北西から)

写真図版38 SI28 竪穴住居跡 (2)



SI29・30 竪穴住居全景（南から）



SI29 複式炉 a-a' 断面（東から）



SI29 壁溝断面（西から）



SI29 竪穴住居 A-A' 断面（南から）



調査区中央南部終了（南西から）

写真図版39 SI29・30 竪穴住居跡



SI31 竪穴住居全景 (南から)



SI31 竪穴住居 C-C' 断面追加 (南から)



SI31 竪穴住居 C-C' 断面 (南から)



SI31 石囲炉敷ち割り (南西から)



作業風景 (西から)

写真図版40 SI31 竪穴住居跡



SI33 竪穴住居全景（北西から）



SI33 竪穴住居 A-A' 断面（北東から）



SI33 石囲炉全景（北西から）



6K～6N グリッドトレンチ断面（北西から）



作業風景（東南から）

写真図版41 SI33 竪穴住居跡



SI34 竪穴住居全景（南から）



SI34 竪穴住居 A-A' 断面（北から）



SI34 石囲炉全景（北から）



作業風景（南東から）

写真図版42 SI34 竪穴住居跡



SI35 竪穴住居全景 (南から)



SI35 竪穴住居 A-A' 断面 (南から)



SI35 石囲炉全景 (南から)



SI35 石囲炉載ち割り (南から)

写真図版43 SI35 竪穴住居跡



SI36 竪穴住居全景（北西から）



SI36 複式炉断面（南から）



SI36 竪穴住居掘方 B-B' 断面（西から）



SI36 竪穴住居掘方 A-A' 断面（南東から）



調査区南西終了（北東から）

写真図版44 SI36 竪穴住居跡



SI37 竪穴住居全景（南から）



SI37 竪穴住居 B-B' 断面（南から）



SI37 竪穴住居 A-A' 断面（東から）

写真図版45 SI37 竪穴住居跡



SI38 竪穴住居全景（北から）



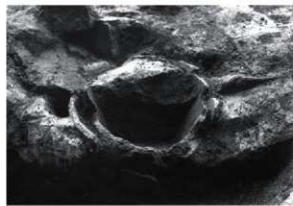
SI38 土器埋設炉①（北から）



SI38 土器埋設炉②（北から）



SI38 土器除去後（北から）



SI38 土器埋設炉断面（北から）

写真図版46 SI38 竪穴住居跡



SD01 溝全景 (西から)



SD01 溝断面 (西から)



SN01 焼土検出状況 (南から)



SN01 焼土断面 (西から)



SK04 土坑全景 (北から)



SK04 土坑断面 (北から)



SK05 土坑全景 (南から)



SK05 土坑断面 (南から)

写真図版47 SD01 溝跡、SN01 焼土遺構、SK04・05 土坑跡



4(2)



5(1)

S101



25



10



12

S102

写真図版48 縄文土器(1)



S103

14



29



S105

31



32



36



38



39

S106

写真図版49 縄文土器（2）



S108



S109

S106

写真図版50 縄文土器（3）



68



S111

87



88

写真図版51 縄文土器（4）



91



S111

99



97

98



96

※96～98はミニチュア土器

写真図版52 縄文土器（5）



S112(1)



S112



S114

112

S115

119



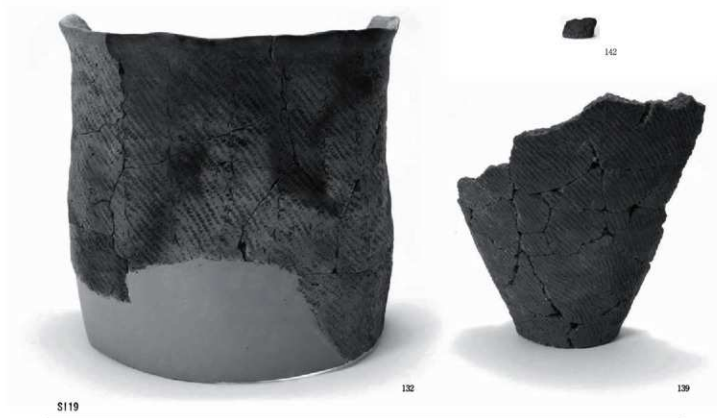
131



S119



写真図版53 縄文土器(6)



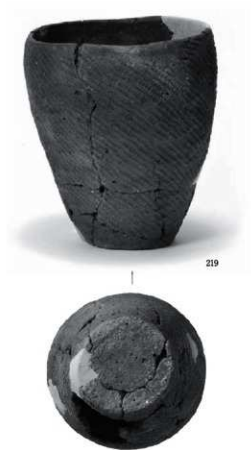
S120



写真図版54 縄文土器（7）



写真図版55 縄文土器(8)



S137



S138

写真図版56 縄文土器(9)



226



227



228



遺構外

SK05



1



2



3a



3b



3c



6

S101



7



8

※4・5は立体写真に掲載



9

S102

写真図版57 縄文土器 (10)



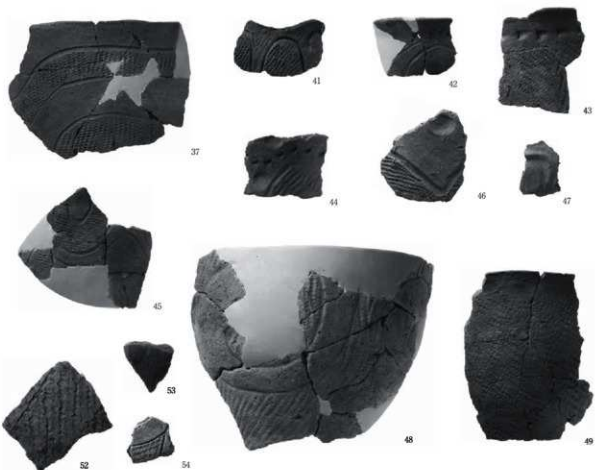
※10・12・25・29は立体写真に掲載

※31・32は立体写真に掲載

S103

S105

写真図版58 縄文土器 (11)



S106

※36~40・50-51は立体写真に掲載



S107

55

56

S109

65

※64は立体写真に掲載

S110

75

67



S108

58

59

60

61

62

※57-63は立体写真に掲載



S111

69

70

71a

71b

※68は立体写真に掲載

写真図版59 縄文土器 (12)



72a



72b



73



74



76



77



75



79



80



81



82



84



83



85



86



89



90



92



93



94

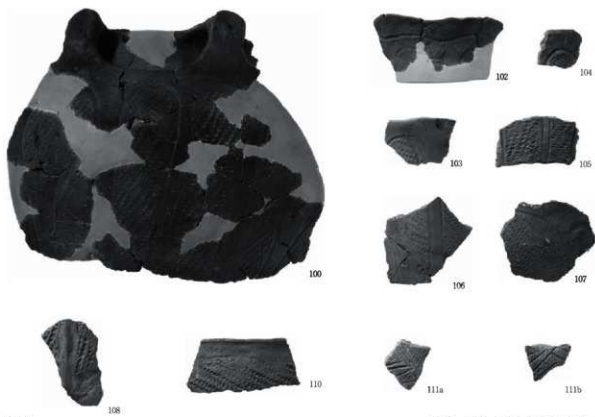


96

S111

※78-87・88-91-99は立体写真に掲載

写真図版60 縄文土器 (13)



※101・109・112は立体写真に掲載



※119は立体写真に掲載



写真図版61 縄文土器 (14)



124



125



126



127

S116



134



135



136



137



140



138



141



143a



143b

S119

※130~133・139・140・142は立体写真に掲載



144



145



146



147



148



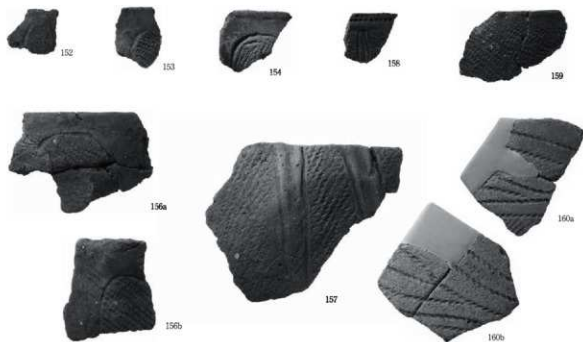
149



150

S120

写真図版62 縄文土器 (15)

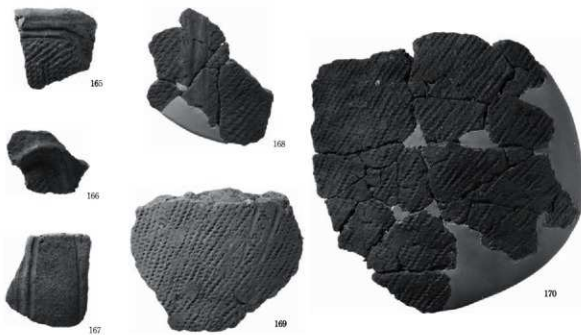


S121

※150・151は立体写真に掲載



S122



S123

写真図版63 縄文土器 (16)



S124



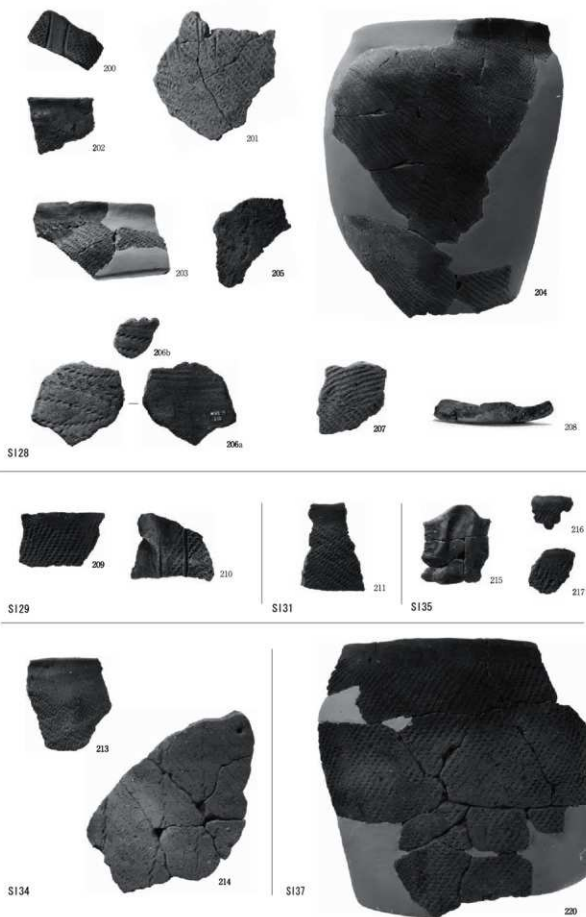
S125

S126



S128

写真図版64 縄文土器 (17)



写真図版65 縄文土器 (18)



221

S137(2)



222

225

S138



229



230



231



232



233



234



235



236



237

遺構外



238



239



240



241



242



243



244

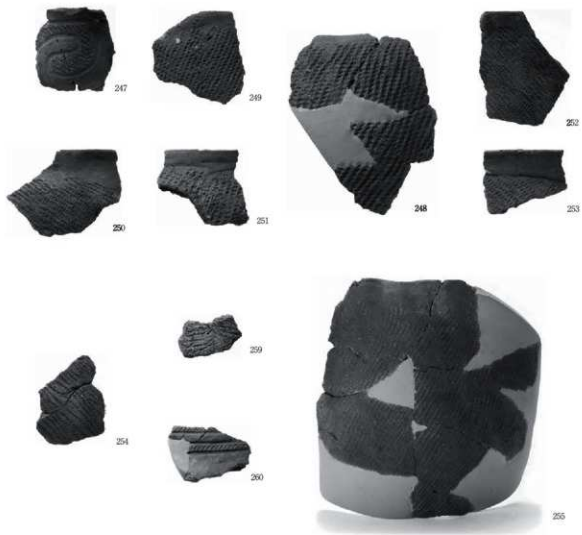


245

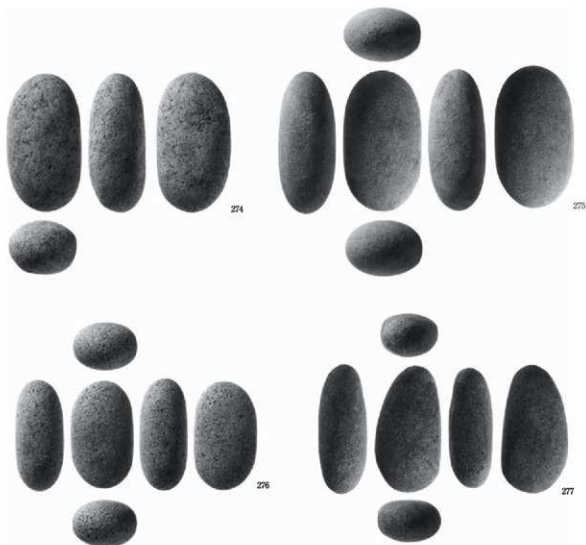


246

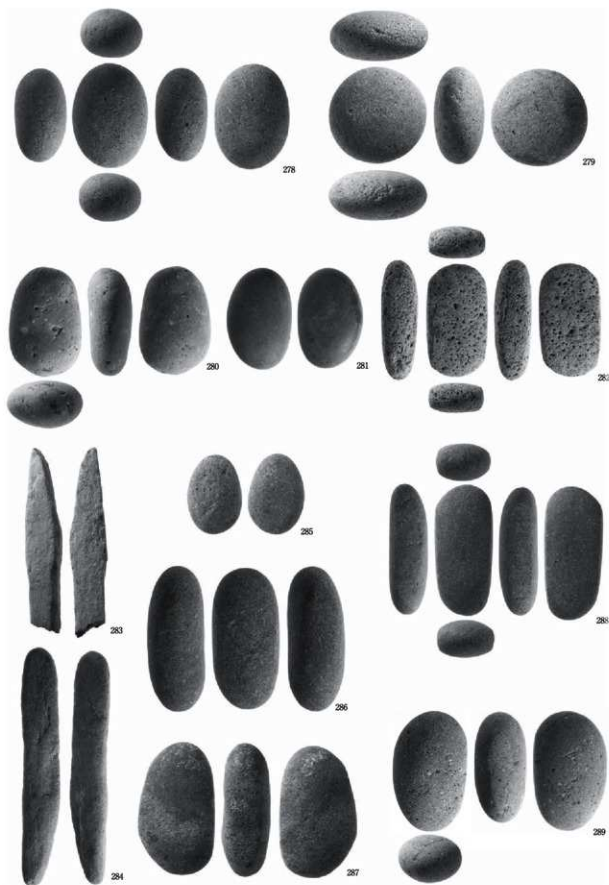
写真図版66 縄文土器 (19)



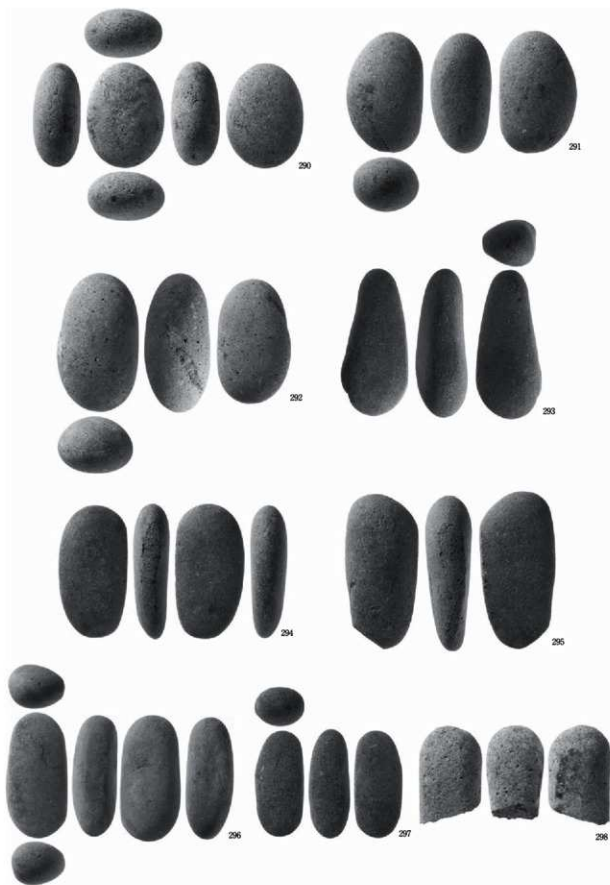
写真図版67 縄文土器 (20)



写真図版68 石器 (1)



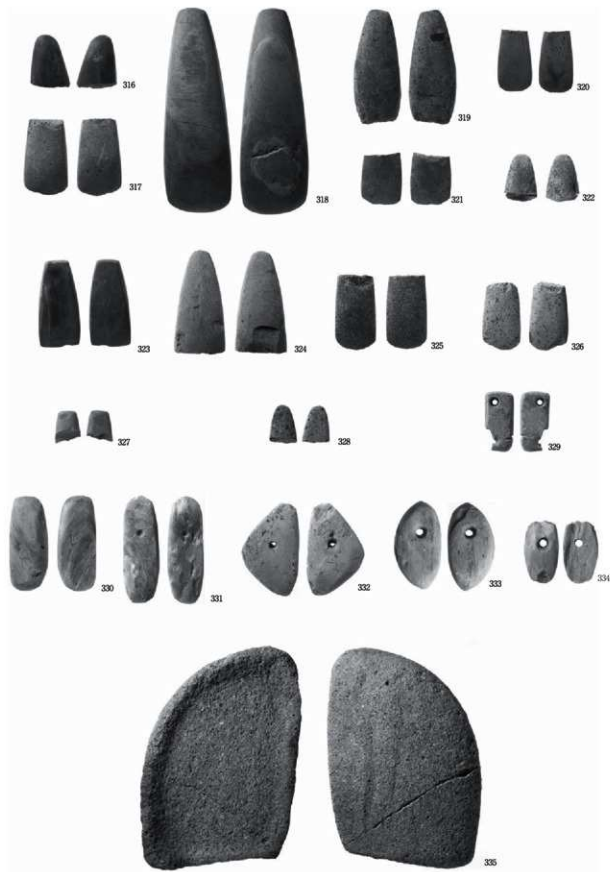
写真図版69 石器 (2)



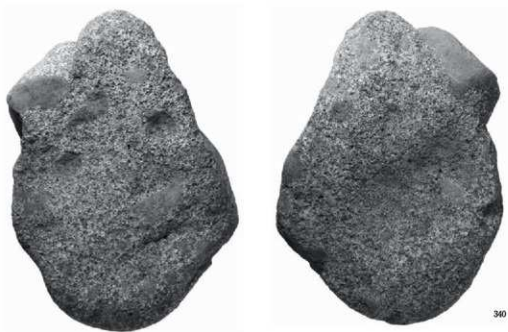
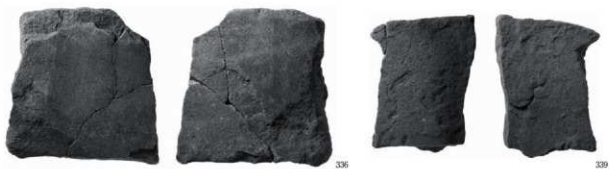
写真図版70 石器（3）



写真図版71 石器（4）



写真図版72 石器 (5)



写真図版73 石器(6)



341



342



343(1)



343(2)

写真図版74 石器(7)

報告書抄録

ふりがな	こなり2いせきはくつちようさほうこくしょ							
書名	小成Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第644集							
編著者名	藤本玲子・佐々木隆英							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	2015年3月19日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こなり2いせきはく 小成Ⅱ遺跡	いわてけんかみかへつこふ 岩手県下閉伊郡 いわいげふんしょう 岩泉町小本字 こなり 小成4-36ほか	03483	LG53-0313	39度 49分 18秒	141度 57分 40秒	2013.07.01 ～ 2013.10.11	1,900㎡	三陸沿岸道路 (田老～岩泉線) 工事に伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
小成Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 38 棟 土坑 2 基	縄文前期土器、大木 8・9・10式土器 ミニチュア土器、円 盤状土製品、石鏃、 石錐、石匙、異形石 器、不定形石器、ス タレイバー、砥磨器 類、多面体燧石、磨 製石斧、垂飾、石皿、 台石	縄文時代中期後葉の集落跡。			
		時期不明	溝跡 1 条 焼土遺構 1 基					
要約	大木9式期を中心とする複式炉、石囲炉、地床炉を伴う竪穴住居跡 38 棟が検出され、縄文時代中期後葉を中心とする集落跡であることが分かった。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第644集

小成Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成27年3月12日

発行 平成27年3月19日

- 編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話(019)638-9001
- 発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川4番1号
電話(0193)62-1744
- (公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話(019)654-2235
- 印刷 第一印刷株式会社
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ四丁目6-40
電話(019)646-6001
-

©(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2015